

後北式土器 (第156図・写真図版75)

VI Id～I jのグリットにかけて、表土～I層より8片出土。うち4片は接合して15×10cmほどの大きさの口縁部片となった。大型の鉢形土器と思われるが、全体形は不明。口縁部は平口縁と思われるが、一部に山形突起を想定させるカーブも見られる。口縁部断面は鈍な三角形を呈し、わずかに外反気味である。文様は残存破片全体に施されているが、貼付微隆起線とそれにとりもなう刻み、帯縄文とで構成される。口縁部は4～6本の微隆起線がめぐり、うち3～4本に刻みを有する。微隆起線間はやがて無文としている。体部には主として斜めに刻みを持たない微隆起線が走り、微隆起線間は無文と帯縄文が交互に施される。帯縄文はRL原体を用いて、微隆起線に沿って走らせてある。内面は全体になでである。胎上には砂粒を多く含むが焼成は良い。器表面は内外面とも黄褐色だが、断面内部は暗褐色に焼けている。北海道および東北各地で出土している。後北C2式に類似する。



第156図 後北式土器拓影図(遺構外出土)

第VII群土器

Iグリット・Jグリットの表土・I層を中心として、コンテナ1個分ほどの土器器片が出土している。小片が広範囲に散布していたこともあって、復元し得たもの、特徴の把握するものは少数であった。

1類 非ロクロ成形の坏を含む土器群 (第157・158図1～31・写真図版74)

a、坏 (1～9)

ほとんど小片のみであり、規模や技法がある程度判断し得るものを掲載した。

器形は、判別し得るものはすべて丸底風の平底である。体部外面に段を有するもの(1・2)と有しないもの(3～8)とがある。口縁は、いずれも緩く立ち上がって外反するが、微妙な屈曲を持つもの(5・8)や、口縁端が内側に折れて上を向くもの(7)などもある。調整は

外面口縁はナデ、体部から底部は削り、内面はナデとミガキに黒色処理が一般的のようだが、体部にはミガキを施す例（7・8）もある。

b、壺（10～14）

復元し得たもの1点（10）、推定により、図上で復元したもの1点（11）、底部1点（12）を掲載した。10は朱彩がしてあり、外面全域・底部外面に至るまで、および口縁部内面まで塗っている。口縁内面に塗った際に滴ったと思われる朱が、体下半内面に付着している。器形は、口縁がなめらかに開く形をとり、肩部は盛り上げる感じで不明瞭に段を成す。口縁部は厚くならない。胴部は丸くなるが、下半は多少直線的になる。底部は多少張り出す形をとる。最大径は胴部中央にくる。調整は、厚い朱のため明確でないが、口縁部は内外面ともナデのみと思われる。特異な点として口縁部外面に施された縦の篋描き沈線文様があげられる。2cmほどの間隔で、5cmほどの長さにやや傾しながら整然と並んで描かれている。体部外面ヘラナデ、内面は上半ヘラナデである。11は体部上半が欠失しており、推定の復元図である。口縁部は急角度で外に開き、口唇外面に段を成して断面三角形となる。肩に段を有する。図では2段にも見えるが、胴部上端に凹凸がめぐるためであり、1段のみである。この体部上端の凹凸は、前述の壺（10）にも共通する。縦のヘラナデとなっている。12は底部片で、胴部にヘラナデの痕がうかがえる。磨滅の為に不明瞭だが、底部外面に木葉痕らしきものが観察された。13・14も同様にヘラナデ調整を持つ底部片だが、胴部への開きが多少小さめであり、壺の可能性もある。

c、壺（15～31）

出土した土師器片の多数を占めるが、復元し得たのはわずかである。頸部に段を有するものがほとんどであり、中には口縁部にかけて5～6条の段をもつものもある（19）。20のみ段を持たない。口唇部は上に向かって丸くなるものと、外に向かって多少鋭角を成すものがある。調整は内外面ともナデ・ヘラナデが多く、刷毛目を見せるのは15のみである。16は軽く内湾し、外面縦に朱線がめぐる。底部はくびれて外に膨らむものが多く（18・28～31）、断面形は内面がやや丸みをもっている。

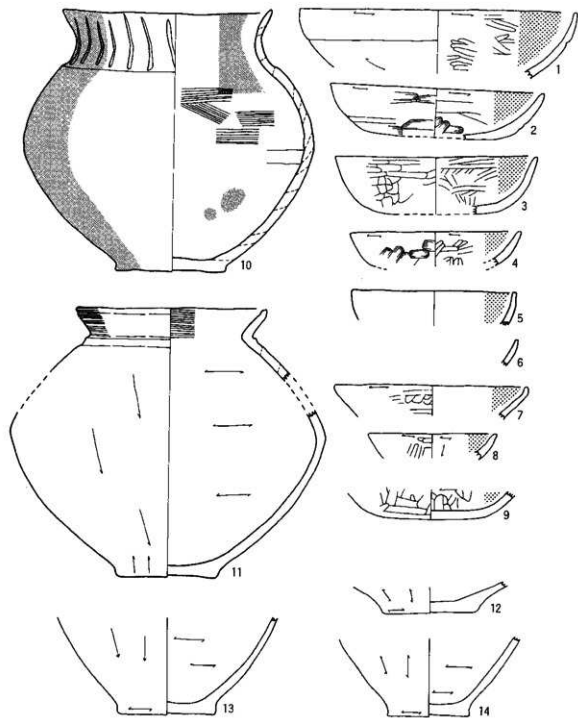
2類 ロクロ成形の坏を含む土器群（第158図32～37・写真図版74）

a、坏（32・33）

特徴のわかるものは2点のみである。内湾する薄い口縁片（32）と、外反する厚い口縁片（33）である。いずれもロクロを用いており、内面に黒色処理を施している。

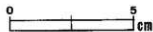
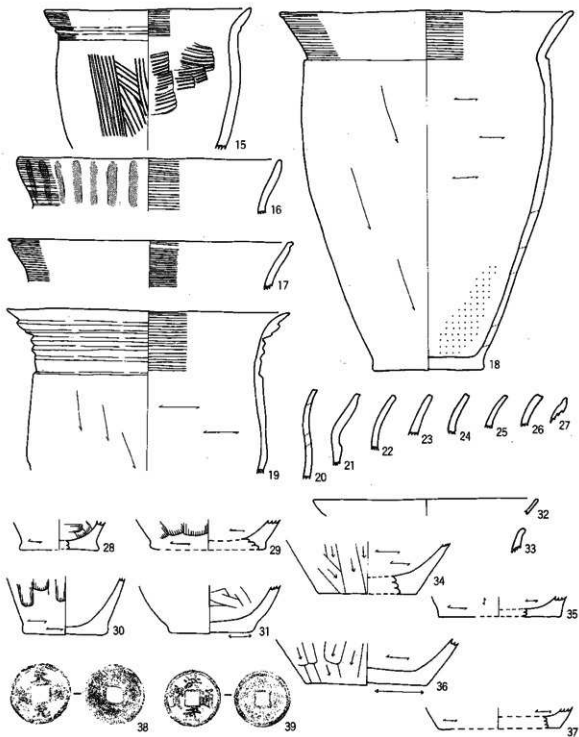
b、壺（34～37）

34・36は大まかなタッチでヘラ削りを施している。35・37はナデによる調整である。いずれも底部のみの出土である。

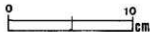


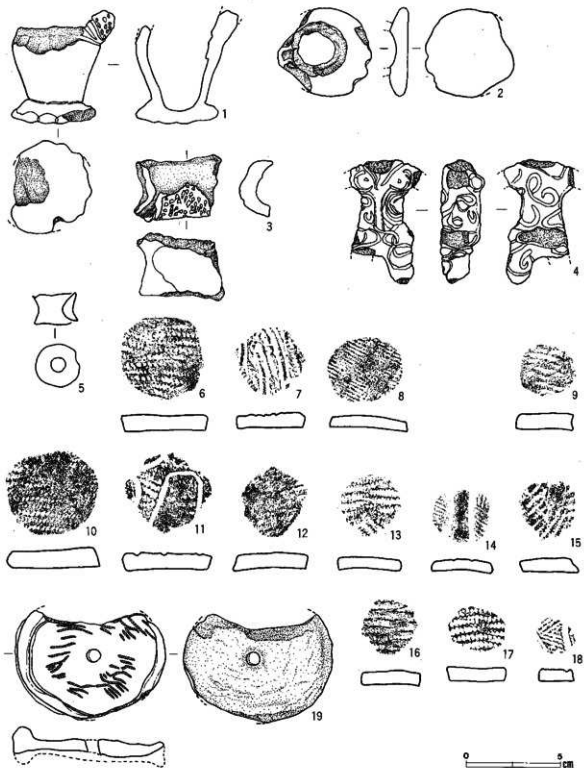
第157圖 遺構外出土遺物(20)土師器





第158圖 遠隔外出土遺物(21)土師器・古銭





第159图 遺物包含層・遺構外出土遺物(22)土製品

(2) 土製品 (第15図6～8・19・写真図版75)

円盤状土製品

3点出土している(6～8)。いずれも周辺を打ち欠いたのみの製作だが、3点とも多少の磨減は認められる。

紡錘車

1点のみの出土をみた(19)。径8cmほどの幾分ゆがんだ円形であり、片面が完全に剝離して中央の厚さは不明だが端部に張り出しがあり、そこは1.5cmの厚みを持つ。残存している面には燃糸圧痕が施されている。VII群3類に属するものと思われる。

(3) 石器 (第160～163図・写真図版77・78)

a. 石鎌 (1～16)

有茎鎌12点・無茎鎌4点の計16点が出土している。

有茎鎌：1・2は表裏の全面を調整して、中央に稜線を作り出し、端整な形となっている。調整は、1においては基部の左右両端から刃部は刃先に向かって、基部は基端に向っての調整である。2も同様と思われるが、基部については欠損しておりわかりにくい。3・5・6も端整な造りであるが、表裏両面に剝離面を残す。3・5は刃先から基部へ、6はその逆の順で調整してある。6は基部が欠損している。4・7は基部から刃先へ、8・9は刃先から基部への調整となっている。11は調整手順が任意で粗末であり、裏面は未調整部分も多く製作途中の未完成品の可能性もある。2・6・10は基部にタールの付着が認められる。16は大型であり、鎌以外の使用目的も想定し得る。刃先から基部方向へ、全面調整を施している。

無茎鎌：4点すべて、基部から刃先方向へと調整している。調整剝離の短い、不揃いなものが多い。

b. 形器 (17)

左右側縁を細かく刃止めた三角形の断面を呈す。縦断面は中心部で幅が広がり全体として舟形となり、先端部は欠損しているものの形器と思われる。

c. 石錐 (18～20)

3点出土。3点とも、先端からつまみ方向への調整である。刃部断面は、18が菱形、19が扁平、20は三角形となる。18・20は先端が欠損しており、その真上両刃に磨減が認められる。19

は先端が平らだが、欠損ではない。磨減も認められない。

d. 石匙 (21~24)

縦形3点・横形1点の計4点出土している。21は刃部は形成する3辺のうち2辺が両面の、1辺が片面の調整である。23は先端が欠損して不明だが、片側のみ両面調整と思われる。23の調整は全体に雑である。22はつまみ部が極端に幅広い特異な形態をしている。刃部調整は、両面からおこなわれている。3点とも、刃部に磨減等の明確な使用のあとは認められなかった。24は横形の石匙であり、刃部は下端辺にのみ形成されている。調整は両面からで、磨減している。

e. 掻器 (25~28)

25は片側縁から先端にかけて、片面調整により刃部を形成している。但し、反対側縁は無調整であるが、細かい打ち欠きが多少あり、使用痕と思われる。26は左側縁が表面から、右側縁な裏面からの片面調整であり、どちらも先端まで調整が及んでいる。28は三角形の二辺に刃部を持つ、どちらとも両面調整である。なお25・26・28とも欠損は無い。28は薄い剝片を用いた小品で、両側縁に片面から刃を造っている。先端が欠損している。

f. 石斧 (29~31・34)

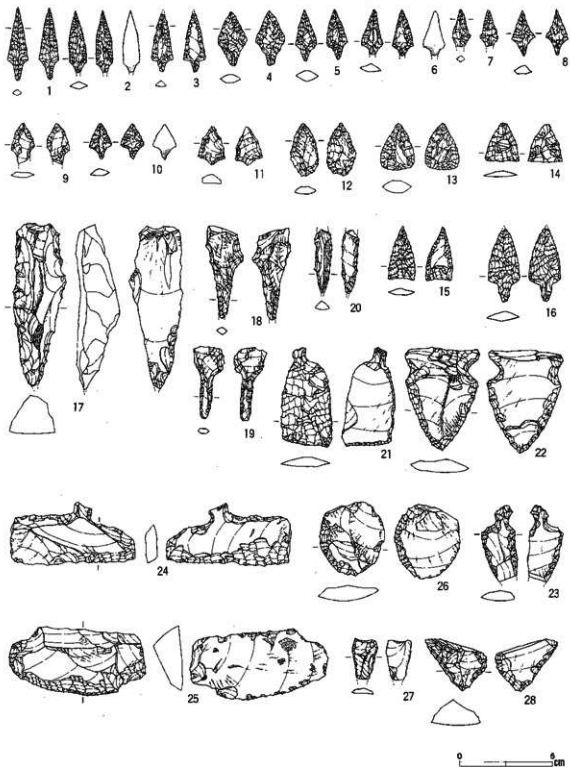
磨製のもの3点が出土している。29は偏平で定角的であり、両刃であるが刃先が片面によつた断面を示す。刃全体に刃こぼれがある。基部は欠損している。30は刃部欠損。31は完形品で基部と打ち欠きが多少みられ、刃部も刃こぼれが認められる。何度も砥ぎなおされている。打製のものは1点出土している。形態から石斧としたが刃こぼれがなく、多少の磨減が認められることから、32・33と同様、石鏃として使用されたものかもしれない。石核を用いて作成しており刃部は片面からの調整である。

g. 石鏃 (32・33)

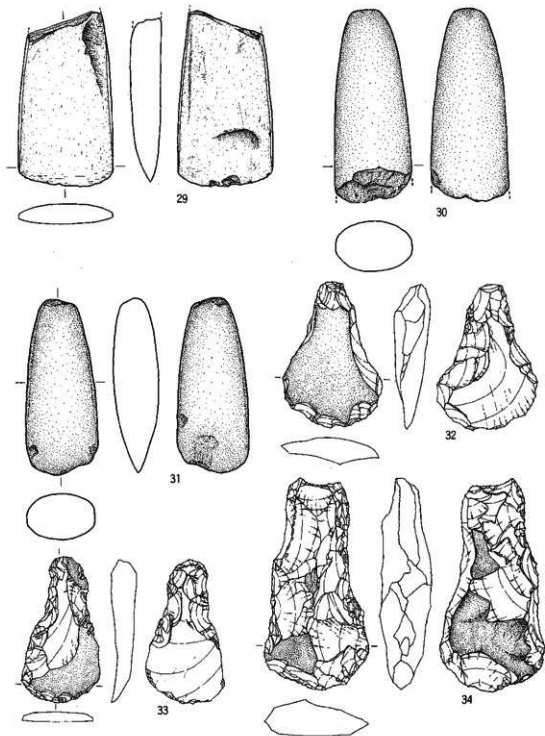
両者とも剝片を用いている。刃部が薄く、柄部は多少厚いものである。反りにあわせて、片面から刃部調整を施している。32は磨減が認められる。

h. 凹石・磨石・石皿の類 (35~45)

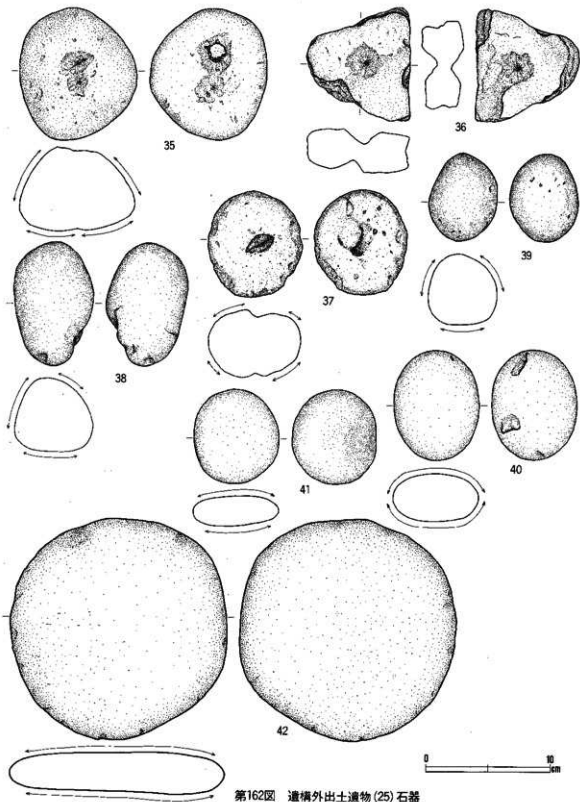
凹石は35~37である。いずれも両面に顕著な凹部を持つ。38~44は磨石であるが、44は石皿(45)とセットで出土している。42は磨痕が片面のみ顕著であり、石皿と思われる。磨石は、



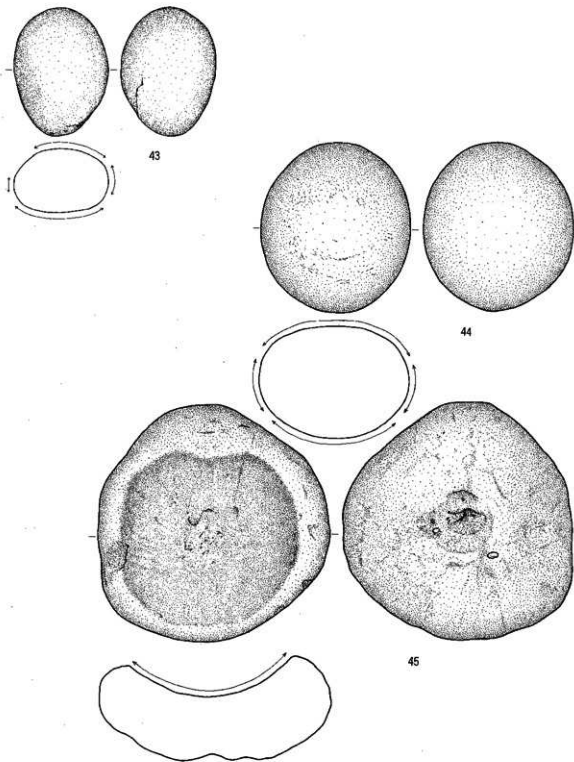
第160圖 遺構外出土遺物(23)石器



第161圖 遺構外出土遺物(24)石器



第162图 遺構外出土遺物(25) 石器



第163圖 遺構外出土遺物(26)石器

- ①全面を任意に使用しているもの (38・39)、②偏平で両面のみ使用しているもの (41・43・44)、③偏平で両面および全周と全体を使用しているもの (40) とがある。

(4) 古 銭 (第158図・写真図版75)

VII Jn グリッドの表土中より、北宋銭 2 点が出土している。以下の表の通りである。ともに無背。

第31表 3区出土古銭計測値一覧

銭 銘	初 鋳 年	輪 外 径 (cm)	輪 内 径 (cm)	内 郭 (cm)	孔 (cm)	外 縁 厚 (cm)	重 量 (g)
天 聖 元 宝	1023	2.3	2.0	0.65	0.5×0.5	0.15	3.6
元 祐 通 宝	1093	2.5	2.1	0.8	0.6×0.6	0.1	3.5

III. ま と め

当区検出の遺構・出土遺物についての事実記載は既述の通りである。以下、遺構については特に竪穴住居址について、遺物については弥生時代の遺物を中心に時代毎に整理し、まとめる。

1. 遺 構

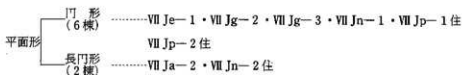
縄文時代竪穴住居址 (第32表)

竪穴住居址10棟は、いずれも調査区中央から東寄りの区域にて検出された。10棟のうち、規模や時期を把握できるのは8棟である。

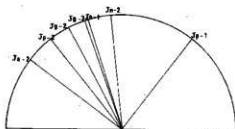
(1) 平面形・規模

住居址の平面形は、不明な2棟を除きいずれも円形を基調とし、円形に近いものと長円形の

ものに大別される。



竪穴住居址の規模を床面積・平面形から比較すると、床面積ではVII Jp-2住居址の7.5㎡を最小にVII Ja-2住居址の〔26.8㎡〕を最大とするものまで大差が認められ、長門形プランの住居址の規模が大きい傾向が認められる。



第164図 縄文時代竪穴住居址主軸方位

(2) 方向

竪穴住居址の長軸方向をもって主軸方位とすると次のように整理される。

長・短軸が同一値の真円に近いVII Jg-2住居址と平面形が不明なVII Jn-3・VII Jp-3住居址を除く7棟について比較すると、北～北西方向に集中する傾向が認められる。

(3) 床

竪穴住居址の床面は、いずれも掘り込み面をそのまま使用し、ほぼ平坦で全般に柔らかい傾向がみられる。特に貼床等の手を加えた痕跡は認められない。但し、事実記載で記述したように、硬化現象が顕著な住居址があることからその位置を整理すると次のようになる。

- 炉の周辺と南西壁沿いに認めるもの.....VII Ja-2住
- 竪穴東半に認めるもの.....VII Jp-3住
- 竪穴中心域に認めるもの.....VII Jp-1・VII Jn-2住
- 南東域に認めるもの.....VII Jn-3住

特にVII Ja-2住居址においては、南西壁沿いに位置するP₁・P₂間から竪穴中心部に位置する炉にかけて顕著な為、出入口施設が南西壁に存在した可能性があると推測される。

(4) 柱穴

柱穴配置を完全に復元できる例は少ないが、検出された配列から次のように整理される。

- 壁沿いに位置するもの（6棟）……………VII Ja-2・VII Jn-2・VII Jg-2住
 VII Jp-1・VII Jp-2・VII Jp-3住
- 壁沿いと中央寄りに位置するもの（1棟）……VII Jn-3住
- 不明（3棟）……………VII Je-1・VII Jg-3・VII Jn-1住

(5) 炉

炉の構造から次のように整理される。

- A 石囲炉（1棟）……………VII Jn-2住
- B 石囲炉+土器埋設炉（1棟）……VII Jg-2住
- C 土器埋設炉+地床炉（1棟）……VII Jp-1住
- D 地床炉（7棟）……………VII Ja-2・VII Je-1・VII Jg-3・VII Jn-1住
 VII Jn-3・VII Jp-2・VII Jp-3住

以上のように、設置数では単独例が多く、複数例は少ない。A、Bの石囲炉について礫の配置をみると、Aでは「コの字状」にBでは土器を頂点とする「ハの字状」に配される特徴が認められる。

(6) その他の特徴

10棟の竪穴住居のうち8棟が焼失家屋である。炭化材の残存状況が極めて不良なことから上屋構造の復元には至らなかった。

第32表 縄文時代竪穴住居一覧

(○)推定値 (●)現存値

遺構名	時期	周 囲				平面形	長軸方向	竪 穴		地 床	炉	重 複	埋 設	土 器	備 考	
		長軸 (m)	短軸 (m)	壁高 (m)	床面積 (m ²)			主	副							
VIJa-2	後期	5.60	3.00	15~21	(26.8)	長円形	N-SL-S-W		8	地床炉		○	34	6	北部は遺跡の島状遺構	
VIJe-1	#	16.00	6.00	47~73	不明	(円形)	—		1	地床炉	VIJa-1住、VIJe-2住、VIIJp-1住に先立		45	8	9	
VIJg-2	#	4.00	4.00	16~24	9.6	円形	N-28°-W		7	1	土器埋設炉 土器が「ハ」の字	VIJg-1住に先行	○	54	10	
VIJg-3	#	4.00	3.00	19~23	9.6	円形	N-19°-W				地床炉	VIJg-1住に先行	○	56	10	
VIJa-1	#	4.50	4.30	4~42	(11.8)	円形	N-17.5°-W		1		地床炉	VIJo住に先行		82	15	
VIJa-2	#	4.74	4.20	10~36	(13.2)	長円形	N-6°-W		9		石圍炉 「コ」の字	第30号焼土に先行	○	84	15	
VIJp-1	#	3.60	3.60	15~25	4.5	円形	N-37.5°-E		13		地床炉 土器埋設炉			91	16	
VIJa-2	#	3.60	3.40	17~29	7.5	円形	N-38°-W		7		地床炉		○	94	16	
VIJa-3	不明	不明	不明	不明	—	(円形)	—		17		地床炉		(○)	87	15	
VIJp-3	#	#	#	#	—	(円形)	—		7		地床炉		(○)	96	16	北部部に先行する遺構により推定される不明

弥生時代竪穴住居址 (第33表)

当区で検出された弥生時代の竪穴住居址は18棟であるが、住居を構成する個々の要素をみれば決して一様なものではなく、共通点とともに大きな相違点も認められる。調査範囲が部分的であったり、重複あるいは削平・擾乱等により明確にできなかった部分もあるが、計測推定値等も含め、各項目毎に整理し小まめとした。

(1) 平面形

各住居址の平面形は、いずれも円形を基調とするものであるが、円形に近いものと長円形を呈するものに細分できる。唯、円形・長円形の名称については厳密なものではなく、長軸と短軸の比10%以内のものを円形とし、それ以上のものを長円形とした。

— 円形 (11棟)	-----VII Ib・VII Ic・VII Je-2・VII Jg-1・VII Ki 住
平面形	VII Jm・VII Jk-1・VII Jk-2・VII Jo・VII J/ 住
— 長円形 (7棟)	-----VII Ia・VII Ij・VII Ja-1・VII Ji・VII Jc・VII Jf-1 住
	VII Jf-2 住

(2) 規模 (第165図)

竪穴住居址の規模は、床面積・平面形などから比較することができる。床面積は、VII Jk-2 住居址の10.5㎡を最小にVII Ji 住居址の51.8㎡を最大とするものまで大差が認められる。平面形の長軸・短軸値も同様にVII Jk-2 住居址の4.1m×4.0mを最小に、VII Ji 住居址の9.0m×8.9mを最大とするものまでと18棟の住居址の規模は様々であるが床面積からは次のように分類することができる。

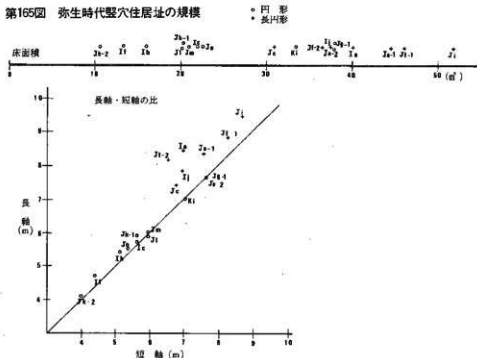
- | | |
|--------------------|--|
| A 小型住居址 (16㎡以下) | 3棟-----VII Ib・VII If・VII Jk-2 住 |
| B 中型住居址 (20㎡～22㎡) | 5棟-----VII Jo・VII Ic・VII Jm・VII Jk-1・VII J/ 住 |
| C 大型住居址 (30㎡～37㎡) | 6棟-----VII Jg-1・VII Je-2・VII Ij・VII Jf-2・VII Ki・VII Jc 住 |
| D 超大型住居址 (40㎡～51㎡) | 4棟-----VII Ji・VII Jf-1・VII Ja-1・VII Ia 住 |

以上のように、小型の住居址から超大型住居址までの4グループに大別される。

次に床面積と平面形との対応関係について整理すると、大型・超大型としたC・Dに含まれる住居址10棟の平面形は、円形3棟、長円形7棟となり、大型規模の住居址には長円形プラン

の多い傾向が認められる。

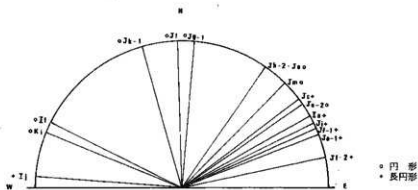
第165図 弥生時代竪穴住居址の規模



(3) 方向 (第166図)

調査範囲が部分的なVII Ib・VII Icの2住居址を除く16棟について、竪穴住居址の長軸方向をもって主軸方位とすると次のように整理される。

南北方向3棟、北西～南東方向2棟、東西方向1棟、北東～南西方向10棟となり、単純に分布のみを考えると、北東～南西方向に集中する傾向がみられる。



第166図 弥生時代竪穴住居址主軸方位

(4) 床

竪穴住居址の床面は、いずれも掘り込み面をそのまま使用し、ほぼ平坦で全般に柔らかい傾向がみられる。特に貼床等の手を加えた痕跡は認められない。但し、各遺構で記述したように、個々の住居址の床面には微妙な硬化現象・傾斜等が認められることから以下その2点を中心に整理する。

① 床面硬化について

11棟の住居址で認められ、位置によって次のように分類される。

- | | | | |
|---|-------------------------|------|--|
| A | 炉の周辺にのみ認めるもの…………… | (2棟) | VII Jf-1・VII Jo 住 |
| B | 南西壁～竪穴中心域にかけて認めるもの…………… | (6棟) | VII Ia・VII Ja-1・VII Jc 住
VII Jf・VII Ki・VII Ib 住 |
| C | 炉の周辺と竪穴南半に認めるもの…………… | (1棟) | VII Jk-1 住 |
| D | 炉の周辺と竪穴北東域に認めるもの…………… | (1棟) | VII Je-2 住 |
| E | 炉の東側と竪穴中心域に認めるもの…………… | (1棟) | VII Jf-2 住 |

以上11棟の床面に認められる現象が、住居址の使用に伴ってのみ形成される自然的硬化であるとすれば、特にB類にみられる特徴から、出入口施設が南西壁に存在した可能性が高いと推測される。尚、VII Je-2 住はVII Jf-1 住と重複する為、前者の北東域が後者の南西域に相当する可能性もあることと、特定はできないが、VII Jk-1 住の南半についても考慮すると、C・D類にも同様な可能性が想定される。

② 床面の傾斜について

床面は、全般にほぼ平坦な状況を呈し、特に顕著な凹凸は認められない。伯し、個々の住居址についてみると、床面全体が僅かな傾斜をもつ例が多い。以下床面の傾斜と微地形との関係について整理する。

- | | | | |
|---|--------------------------------|--|------------|
| A | 微地形の傾斜に平行するもの(9棟)…………… | VII Ia・VII If・VII Ij 住
VII Ja-1・VII Jc・VII Je-2 住
VII Jf-1・VII Jk-1・VII Jf 住 | |
| B | 微地形の傾斜に逆行するもの(1棟)…………… | | VII Jf-2 住 |
| C | 微地形の傾斜と床面の傾斜方向が直交するもの(1棟)…………… | | VII Jm 住 |
| D | 微地形同様に平行するもの(3棟)…………… | VII Jg-1・VII Jk-2・VII Ki 住 | |
| E | その他の傾斜(溜鉢状)…………… | VII Ji 住 | |
| F | 不明…………… | VII Ib・VII Ic 住 | |

微地形との対応関係では以上のように整理される。E・Fを除く、14棟の住居址についてみると、大旨床面の傾斜が微地形と同一方向である例が多く、水平な床面についても、同様な対応関係が認められる。

(5) 柱穴

18棟の竪穴住居址について、柱穴配置を完全に復元できる例はごく少数に限られる為、個々の住居址について不明な点も多い。しかし、検出された配列には一定の規則性が認められ、分類することができる。以下、配置形を中心に整理する。

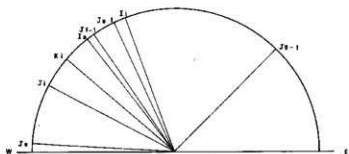
- | | | |
|---|--------------------------|---|
| A | 壁沿いに位置するもの (7棟) | $\left\{ \begin{array}{l} \text{VII Jk-1} \cdot \text{VII Jj} \cdot \text{VII Ib} \cdot \text{VII Ic 住} \\ \text{VII Jf-1} \cdot \text{VII Jf-2} \cdot \text{VII Je-2 住} \end{array} \right.$ |
| B | 壁沿いと中央寄りに位置するもの (6棟) ... | $\left\{ \begin{array}{l} \text{VII Ia} \cdot \text{VII Ij} \cdot \text{VII Jc 住} \\ \text{VII Jm} \cdot \text{VII Ji} \cdot \text{VII Ki 住} \end{array} \right.$ |
| C | 不明 | VII Jo \cdot VII Jk-2 \cdot VII Jg-1 住 |

以上のA・Bについて特徴を要約すると、A類では個々の住居址で均一化した規模のピットが配列されるのに対し、B類では中央寄りのピット壁沿いに比べ大型化する傾向にあり、主・副の柱穴配置が想定される。このことから単純に柱穴配置のみを問題にすれば、木遺跡の弥生時代竪穴住居址は構造的に二つに分類される。

(6) 炉 (第167・168図)

炉は、当区で検出された竪穴住居址の構成要素のなかで、最も顕著な相違点をみいだすことができる。個々の住居址に伴う炉には、地床炉・石囲炉・土器埋設炉があり、単独あるいは複数で設置される。以下炉を検出した16棟の住居址について、構造・設置数を中心に整理する。





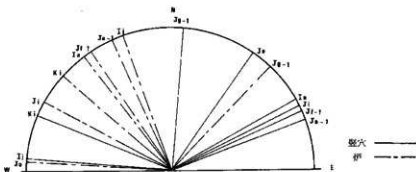
第167図 弥生時代炉址主軸方位

以上のように、設置数では単独例が多く、複数例は少ない。単独で設置されるものには、地床炉と石囲炉の2タイプがみられ、複数のはバリエーションに富んだ組合せとなっている。両者に共通し、しかも特徴的なことは、石囲炉の存在である。石囲炉は、本遺跡で検出された弥生時代竪穴住居址の構造要素のなかで最も特徴的なもので、縄文時代との大きな相違点をみいだす部分である。石囲炉8基の構造は、いずれも隣列が平行する「二の字状」を呈する形に配置される共通点を有する。平行する隣列の中央線を主軸方位とすると、北西～南東方向のもの6基、東西方向のもの1基、北東～南西方向のもの1基となり、北西～南東方向に集中する傾向がみられる。

更に石囲炉の主軸と竪穴住居址の主軸との対応関係から整理すると次のように分類される。

(炉の方向) (竪穴住居址の方向)

- A 北西～南東……………北東～南西……………Ⅶ J_a-1・Ⅶ J_f-1・Ⅶ J_a・Ⅶ J_i 住
 B 北東～南西……………南～北……………Ⅶ J_g-1 住
 C 東～西……………北東～南西……………Ⅶ J_o 住
 D 北西～南東……………北西～南東……………Ⅶ K_i 住
 E 北西～南東……………東～西……………Ⅶ I_j 住



第168図 弥生時代竪穴住居址・炉址主軸方位

以上のように、石囲炉の「二の字」を呈する礫列が竪穴住居址の主軸方向にほぼ直交する形で配される例が多い。少ない資料と推定計測値を含めた分類の為断定はできないが、住居の構築に際し、一種の規則性が存在した可能性が考えられる。

(7) 付属施設

4棟の住居址から付属施設と考えられる楕円形ピットを検出している。いずれも位置・形状等から柱穴とは見なし難い。貯蔵穴と想定されるピットもあるが、明確に用途を特定できる資料は得られなかった。

(8) 立地

住居址の立地と地形について次のように整理される。

当区の地形は既述のごとく、大旨北西から南東方向に下る極めて緩やかな斜面となっており、住居址は、ほぼ等高線の張り出しに沿って、北東から南西方向の列状に立地する傾向が認められる。

(9) その他の特徴

① 埋土

竪穴住居址18棟の検出に際し、基本層序Ⅰ灰白色粉状バミスの不整な分布域をもって確認したものは12棟にのぼる。層厚は、ⅦⅠa・ⅦⅠj住の20cmを最高に、ⅦⅠmの数cmまでみられ中心域で平均14cmと全般に厚い。堆積状況は、いずれもレンズ状である。また、基本層序Ⅲに相当する赤褐色土を埋土上位に有するⅦⅠj・ⅦⅠm住居址は、同層中に認められる多量の大礫・砂粒などから、北側丘陵あるいは西側上流域からの土石流による急激な堆積の可能性が考えられる。尚、18棟の住居址はいずれも自然堆積である。(粉状バミスの分析結果は後載)

② 焼失家屋

焼失家屋は17棟検出された。炭化材の残存状況が極めて不良なことから、住居址の上屋構造を復元できるには至らなかった。(炭化材の各種鑑定結果は後載)

弥生時代の竪穴住居址は以上のように整理される。

これらの各項目のなかで特に規模と柱穴配置について考えると次のような5グループにまとめることが出来る。

2 出土遺物

(1) 土器

本調査区出土の土器は、縄文時代早期から平安時代に至るものまでみられた。

第Ⅰ群土器

縄文時代早期中葉のものと思われる、押型文の土器片が出土している。調査区西側北寄りの基本層序第Ⅲ層より、3片のみの出土である。他に、本遺跡2区にみられるような種々の早期土器は出土していない。又、遺構にともなう出土も無かった。

第Ⅱ群土器

縄文時代前期前葉の土器群である。本遺跡2区にみられる、長七谷地3群から大木1式にかけての一群のものが、本調査区西側から中央の広い範囲のⅡ～Ⅲ層より、若干の出土をみている。遺構にともなう出土は無い。

Ⅳ群土器

本調査区の全範囲から、多くの土器が出土している。中心域はⅦJグリットの縄文時代後期の各竪穴住居址内およびその周辺と、ⅦJグリット東端からⅦKグリットにかけての遺物包含層Jブロック・Kブロックである。遺構外出土のものは、基本層序Ⅰ～Ⅱ層を中心として出土している。

Ⅳ群1類

縄文時代後期初頭の門前式と思われるものである。本調査区中央部の基本層序Ⅱ層より出土している。類似のものが本遺跡8区より若干量出土している。本区には1点のみであり、遺構にともなう出土は無い。

Ⅳ群2類

縄文時代後期前葉の土器群である。東北部における南境・宮戸Ⅰ式、北部における十腰Ⅰ式などに類似する。竪穴住居内出土のもの、特に住居埋土下位から床面にかけて出土している遺構時期決定資料、および第1・7号ピット、第7・8・27・32・33号焼土出土資料は、すべて本類に含まれるものである。又、遺構外出土・遺物包含層出土の土器も、本類が主体を占める。本遺跡においては、8区出土遺物に類似のものが多くみられる。

Ⅳ群3類

縄文時代後期前葉から中葉の土器群である。東北部における宮戸Ⅱa式、北部における十

腰内Ⅱ式などに類似する。本調査区では遺構にともなう出土は無く、遺物包含層および遺構外出土遺物に若干量みられる。本遺跡では5区および8区の出土遺物に、類似のものがみられる。

Ⅳ群4類

縄文時代後期末葉の土器群である。本調査区遺物包含層Kブロックを主とし、Jブロック、遺構外からも少量の出土をみた。

Ⅳ群5類

縄文時代後期最終末の土器群と思われる。遺物包含層Kブロックからのみ出土している。

第Ⅴ群土器

主として遺物包含層Kブロックからの出土である。Jブロックおよび遺構外からの出土も若干みられるが、圧倒的量がKブロックからとなっている。本区遺構には該期のものは無い。

Ⅴ群1類

縄文時代前葉の、大洞B式に当る土器群である。中型および大型の深鉢を主体とし、若干の台付鉢・壺などを出している。

Ⅴ群2類

縄文時代晩期前葉の、大洞B-C式に当る土器群である。大型の深鉢・小型の台付鉢を主体としており、1類にみられる中型の深鉢はほとんどみられない。

Ⅴ群3類

縄文時代晩期中葉の、大洞C1式のものである。台付鉢を主体としている。主に遺物包含層Kブロックを主とし、若干量が遺構外からも出土している。1・2類に比し、出土総量ははるかに少ない。

Ⅴ群4類

縄文時代晩期後葉の大洞A式A'式の土器。少量が遺物包含層Kブロックからのみ出土した。

Ⅷ群土器

土師器は、本調査区西側中央を中心域として、若干の量が広く散布していた。出土層位は基本序Ⅰ層が主である。

Ⅷ群1類

奈良時代後半のものと思われ、水沢市石田遺跡などから出土している坏や壺に類似するもの、二戸市中曾根遺跡から出土する甕に類似するもの、久慈市山屋敷遺跡などから出土する甕に類似するものなどが出土している。ピット・焼土等の埋土からの小片の出土もみられるが、明確

に遺構にともなうものは無い。

Ⅷ群 2類

平安時代前半のものと思われる。ごく少量の出土であり、坏・甕の小片が出土している。

弥生時代の土器について

前章で述べた様に、本調査区からは大量の弥生時代に属する土器が出土している。18棟の弥生時代の竪穴住居址からは言うに及ばず、遺構外からも相当量見つかった。これらの土器は器種も豊富で、大きさ・器形・文様なども実に様々ある。従って、ここではこれら数多くの土器を器種毎に分類し、更に器形・法量・文様について検討を加え、それらの関係について考えて行きたいと思う。

尚、各器種の分析に当っては、原則として器形のわかる実測可能土器を対象としたが、全体の数量の割には実測可能土器が少なかつた「壺形土器」については、敢えて拓影図として掲載したものの中から器形的にしっかりしたものについて対象扱いとし、「蓋形土器」は出土点数が少ないことから拓影図も含めた全点数について対象とした。

(1) 器種の分類

3区から出土した弥生土器は、次の5器種からなる。即ち、高坏形土器・壺形土器・浅鉢形土器・甕形土器・蓋形土器である。(以下「～形土器」の部分省略して述べる。) これら各器種に於ける分類については、前章で下記に述べる様な観点を以って実施、記述したのであるが、以下に進める各器種毎の分析についても前章で用いた分類にそのまま使用する。

- ①高坏……○坏部と脚部から成り、坏部は概して緩やかに開く。
 - 内外面共に丁寧な作りである。
 - 外面には文様が展開する。
 - 胎土には金雲母が含まれている。
 - 朱塗りの痕跡が見られる。
- ②壺……○体部に膨らみを持ち、頸部で括れ、最大径を体部に有す。
 - 概して作りは丁寧で、特に口縁部に於いては顕著である。
 - 胎土には金雲母が含まれている。
- ③甕……○甕高値が口径値以上である。
 - 内面のナデ調整は、口縁部以外は割合雑である。

(尚、所謂「深鉢形土器」及び「變形土器」の両者共にこの類に入っている。)

④浅鉢……○最大径が口縁部に有り、器高値が口径値以下である。

○内面調整が比較的良い。

⑤蓋……○坏部(笠部)が割合直線的・やや外傾的に開き、内面調整が概ね雑である。

ツマミ部の内面調整は、高坏脚部のそれより丁寧である。

以上の様な観点に依る分類であるが、実際には器種の不明確なものもあり、それらのものについては具体的に次の点で分けた。

(ex. 1) 高坏の坏部と浅鉢：精製の浅鉢で底部を欠くものと高坏の坏部については、その立ち上がりの角度に依って分類した。即ち、摺鉢状の立ち上がりを基準として、それより緩い立ち上がりものを高坏、それ以上の角度を持つものを浅鉢とした。

(ex. 2) 壺と壺：括れを有する壺と文様を持たない壺については、その形態及び調整の違いで分類した。即ち、壺の調整の方が壺のそれよりも丁寧であり、地文部に於いても縄文施文後にナデ調整を加えているなどの点で分類した。

尚、器種毎の分類・分析に際しては、時期的な考慮も加えることとし、原則として前章で触れた各遺構の時期・遺構外出土遺物に於ける弥生時代の3時期を元にして、次の3時期に分類した。

- 1 類……弥生時代中期前半に位置づけられるもの。(谷起島式・山王III層式に類似するもの)
- 2 類……弥生時代中期後半に位置づけられるもの。(橋本式・樹形甕式に類似するもの)
- 3 類……弥生時代後期に位置づけられるもの。(常盤式・天王山式に類似するもの)

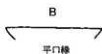
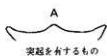
(2) 各器種に於ける器形・法量・文様

①高坏 (第169図・第34～36表)

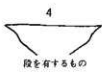
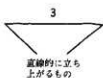
実測図として図示した点数は、全部で28点である。時期別に見ると1類が11点、2類が17点で、3類に属するものは1点も無い。

- a. 口縁部形態：突起の有無に依ってA・Bの2形態に分けたが、Aの突起を有すグループの中には所謂口唇部から突出する部分としての突起を持つものから、側面的には若干の高まりが見え、平面的には六角形を呈する程度のものである。因に、大きな突起然としたAタイプは弥生時代中期前半(1類)に多く見られる。

(口縁形態)

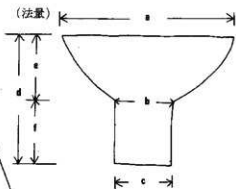


(環部形態)



5
その他

(環部文様)



(脚部形態)



(脚部文様)



()…反転・推定値
 []…現器高
 単位…cm

第169図 高坏形土器 分類基準

b 坏・脚部形態：図で示した様に器形については、坏部と脚部に分けて前者を4・後者を3形態に分類した。即ち、実測可能土器28点中、完形或いは坏部～脚部の部位を有するものは7点のみであり、他の21点は坏部或いは脚部の何れかの部位しか有しないものであるため、両者に分けて実施したものである。

坏部形態では、やや丸味を持ちながら開く1のタイプが多く、続いて2タイプが多い。但し、時期的に見ると1類に於いては3タイプがやや少ないものの割合平均しているのに対し、2類では1タイプが多く4タイプは全く見られない。

脚部に於いては、分類した3形態共に余り数値的な変化は見受けられないが、幾分、口のタイプが少ない様である。

c 量：図で示した通りa～fまでの各部位について測定した。前述した様に、脚～口縁部まで実測可能な土器が数点しかないため、各部位間の関係についてはあまり考然とはしないが、時期毎に更に分類すると次の様な傾向が見られる。即ち、全体的に2類に比して1類の方が大き目であるが、脚高(f)はやや低めの傾向にあるという点である。

d 文様：坏部に見る文様では、圧倒的に変形工字文を伴うもの(あ・う)が多く、全体の実に69.6%にも及んでいる。また、類別に見ると、1類に於いてはその殆どが沈線で描いた変形工字文(あ)であり、磨消文様は殆ど出て来ないのに比べ、2類に於いては磨消を伴う文様が多くなる傾向が見られる(う+え=39.2%)。

脚部文様で見て行くと、波状文様を基調としたものが多く(㊲+㊳=53.8%)、特に1類に於いては殆どが範描沈線文のみの波状文(㊲)であり、2類に於いてはこれに代わって磨消技法を伴う文様が多くなっている(㊳+㊴=53.8%)。

尚、以上の様な文様に見られる傾向は、前章で図示した拓影図を考慮に入ると更に強まることを付加しておきたい。

e 朱塗り：以上述べて来たこれらの高坏には、朱塗りが施されているものが多い。そこで、図に掲載した高坏について拓影図のものも含めて全点数について朱の有無を確認したところ、第49表の様な結果が出た。即ち、全体の85.4%に朱の痕跡が認められたのである。朱の認められなかった14.6%については、磨減等に依り確認出来なかったものもあることから、実際には朱を用いた個体数は更に多かったものと考えられる。

②壺 (第170図・第37～39表)

前述した様に、以下の点数には実測図示したものに加えて、器形のある程度判かる拓影図

についても一部入れている。従って、全体象点数は27点となっており、1類が10点・2類が15点・3類に属するものが2点の时期的内訳である。

- a. 口縁部形態：突起の有無によって、A・B 2タイプに分けた。全体的に見るとA・B両者共に量的な差はさほどないが、類別に見ると1類で突起を有すAタイプが多く、2類で平口縁のBタイプが増えている傾向が見られる。
- b. 頸部形態：括れ具合に依りイ・ロ・ハの3タイプに分類した。その結果「く」の字状に括れるロと、緩やかに括れるハの両タイプが比較的多く、イのタイプは1・2類には見られず3類に1点あるだけである。また、1類に於いてはロの方がハよりも若干多いのに比べ、2類では同数となっている。
- c. 体部形態：あ～えの4タイプに分類した。全体的にはうタイプが25.9%を占めて一番多く、いタイプが14.8%と続く。時期別に見ると、1類では各タイプが見られるのに対し2類ではい・うに集中する傾向が見られる。
- d. 文様形態：2及び3が多いが、2は所謂地文のみのタイプであり、3は平行沈線の文様部を持つものと頸部にのみ平行沈線が繞っているタイプの相方を含んでいる。时期的には1類があまり文様パターンが多くないのに比べ、2類では各タイプに属するものが見られ多様化している傾向がある。
- e. 文様部の範囲：各対象土器に於ける文様の範囲についてa～eまでの5タイプに分類した。ここで挙げたdタイプは所謂地文のみの土器が当てはまるため厳密には他の文様とは区別するべきであるが、他との比較という点から敢えて同列に置いたものである。全体的にはdが44.5%と多いが、これは文様形態に於ける2及び3が多いという事実と符合する。1類ではc・dのみ見られるのに対し、2類ではaにも見られ、しかもcが増えている。
- f. 質量：口径・最大胴径・底径・器高について測定した訳であるが、完形或いは口縁～底部まで有する実測可能土器は27点中5点しかないため、数値的にはやや信憑性には欠けるが、傾向的には指摘できる点がある。即ち、1類・2類共に大小各種が見られるものの2類の方がやや大形化している様である。(器高の平均値に関しては、前述の5点中1類・2類が各2点、3類が1点であるため、傾向性もあまり見出せない。)
- g. 朱塗り：壺に見る朱塗り土器の割合は比較的多く、全体で38.5%にのぼるが、特に2類に於いては42.9%と多くなっている。これら朱の施された土器は沈線文や磨消文を持つものに多く見られる。

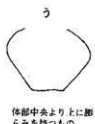
(口縁形態)



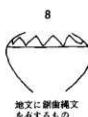
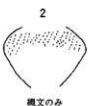
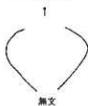
(頸部形態)



(体部形態)



(文様形態)



(文様部の範囲)



- a: 口縁～頸部までのもの
- b: 口縁～最大径までのもの
- c: 口縁～最大径より下までのもの
- d: 頸部から下のもの

第170図 壺形土器 分類基準

第37表 壺形土器 形態・文様・法量一覽

No	出土地点	土器番号	現存部位				法量 (cm)				器形				文様	備考
			口縁部	腹部	胴部 上半	底面	口縁	最大径	底径	器高	口縁部	胴部	体形	形状		
1	ⅧIa区	1	→	→	→	→	18.6									胴部より下に文様存
2	Ⅱ	2	→	→	→	→	16.4			(4.7)	不明	不明	不明	不明	不明	
3	ⅧIa区	1	→	→	→	→	3.4	7.0	5.0	6.2	B	イ	ウ	3	3	3
4	Ⅱ	2	→	→	→	→				(7.2)	不明	不明	不明	不明	不明	漆画文
5	ⅧIa区	1	→	→	→	→	(15.4)	17.9		(9.6)	A	ハ	不明	不明	不明	
6	Ⅱ	2	→	→	→	→	(15.0)	20.0		(6.7)	不明	不明	不明	不明	不明	
7	ⅧIa区	6	→	→	→	→					不明	不明	不明	不明	不明	拓影同
8	ⅧIa区	1	→	→	→	→	11.0			(5.6)	A	不明	不明	不明	不明	胴部に1本の沈線有
9	Ⅱ	2	→	→	→	→	(8.2)			(7.0)	A	不明	不明	不明	不明	
10	ⅧIa区	1	→	→	→	→			20.4	(14.4)	不明	不明	不明	不明	不明	平行沈線も有
11	Ⅱ	2	→	→	→	→				(2.3)	不明	不明	不明	不明	不明	竹管文
12	ⅧIa区	1	→	→	→	→	16.0	22.0	8.2	20.2	A	不明	不明	不明	不明	
13	Ⅱ	5	→	→	→	→				6.3	(5.8)	不明	不明	不明	不明	
14	ⅧIa区	1	→	→	→	→	11.5	6.4		(7.6)	不明	不明	不明	不明	不明	胴部に1本の沈線
15	ⅧIa区	1	→	→	→	→		19.7	7.0	(17.6)	不明	不明	不明	不明	不明	平行沈線も有
16	Ⅱ	2	→	→	→	→	(8.5)	10.3	6.5	11.0	A	ハ	ウ	10	10	不明
17	Ⅱ	5	→	→	→	→	8.0			(7.6)	B	ハ	不明	不明	不明	
18	Ⅱ	6	→	→	→	→	(13.0)	(14.4)		(5.5)	A	不明	不明	不明	不明	
19	ⅧIa区	1	→	→	→	→	(8.4)	(25.2)	(9.2)	(33.7)	B	ハ	ホ	1	1	
20	Ⅱ	2	→	→	→	→	9.5	10.2	(6.8)	16.5	A	不明	不明	不明	不明	胴部に沈線1本有
21	ⅧIa区	1	→	→	→	→	12.2	18.2		(10.0)	A	ハ	不明	不明	不明	
22	Ⅱ	17	→	→	→	→					不明	不明	不明	不明	不明	沈線文、平行沈線有、拓影同
23	ⅧIa区	1	→	→	→	→				(12.0)	不明	不明	不明	不明	不明	
24	Ⅱ	2	→	→	→	→	14.3	6.1		(8.2)	不明	不明	不明	不明	不明	
25	ⅧIa区	1	→	→	→	→				(7.0)	不明	不明	不明	不明	不明	
26	遺構外	1	→	→	→	→	13.1	(24.0)	(5.0)	20.7	不明	不明	不明	不明	不明	平行沈線も有
27	Ⅱ	2	→	→	→	→	4.8	2.6		(3.8)	不明	不明	不明	不明	不明	

() 一 反影・推定値 () 一 複製品

第38表 壺形土器 時期別形態・文様一覽

	器 形											文 様											対応点数											
	口縁部	腹部	胴部	体形	底面	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	不明	a	b	c	d	e	不明												
1	壺	5	2	3	0	5	3	2	1	1	2	1	1	1	1	7	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	7	1	1	10
2	罐	3	4	8	0	5	5	5	0	3	4	0	8	9	2	6	1	1	1	0	1	1	2	0	2	0	2	0	4	5	0	4	15	
3	瓶	0	1	1	1	1	0	0	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	2	
合 計		8	7	12	1	15	9	7	1	4	7	1	14	1	9	7	2	1	1	0	1	2	2	1	3	1	5	12	1	5	2	27		
(%)		29.4	25.9	44.4	3.7	37.0	13.4	25.9	3.7	14.4	15.9	3.7	51.9	3.7	33.4	25.9	7.4	3.7	3.7	0	3.7	7.4	7.4	3.7	11.1	3.7	18.9	44.4	3.7	18.5				

第39表 壺形土器 時期別法量一覽

	器 形	口径	最大口径		底径	器 高
			口径	口径		
1	壺	小	8.2	7.0	6.3	16.5
		大	16.9	35.2	9.2	33.7
		平均	11.0	15.60	6.75	24.1
2	罐	小	8.0	4.8	2.6	11.0
		大	16.4	24.0	7.9	20.7
		平均	12.8	18.27	5.08	15.85
3	瓶	3.4	7.0	5.0	6.2	
平均	9.07	33.65	5.81	15.38		

(注) 3類の口径測定可能土器は1点のみ 単位: cm 器高の() 型に於て

③浅鉢 (第171図・第40～42表)

浅鉢土器は全体に少なく、実測可能土器は14点に過ぎない。時期別によると、1類が9点であり、2類が5点であるが、3類には見られない。(VII f住Na11の異形浅鉢についてはその特殊性から敢えて除外し、深鉢形土器として壺の分類に入れた。)

- a. 器形：台の有無に依りⅠ・Ⅱの2つに分けた。底部欠損に依り不明のものが5点あるが、台の無いものの方が多いのは事実である。また、1点のみ括れを有す頸部を持つものがある。
- b. 口縁部形態：A～Cの3形態に分類した。全体に平口縁のBタイプが多いが、1類でその傾向が強い。また、1類では波状口縁のCタイプが1点出土している。
- c. 文様形態：あ～かの6タイプに分けた。全体的には沈線等の文様を持たないタイプが多いが、他の文様を持つう～かタイプを合わせると7点になる訳であるから、文様部を持つタイプが多いのが判かる。また、これら文様を有す中でも変形工字文を持つもの(え・か)がやや多い。尚、磨消技法を用いた文様を有するものは出ていない。また、2類の台部には沈線文が描かれているものがある。
- d. 法量：数値的に見ると口径値と底径値では、2～2.5倍の割で口径の方が大きい。また、

(器形)



(口縁部形態)



(文様形態)



第171図 浅鉢形土器 分類基準

口径に対する器高値は4割弱～6割弱しかない。時期的に見ると、2類に比し1類の方が大きめの傾向がある。

e 朱塗り：朱を施すものが割合見られ、41.7%がその痕跡を留めていた。これは、割合的に見ると高坏に次いで多い数値である。朱彩が成されているものは、沈線等の文様を持つものに多い。

第40表 浅鉢形土器 形態・文様・法量一覧

No	出土地点	土器番号	法 量 (cm)			形 態 ・ 文 様			備 考
			口 径	底 径	器 高	I 線	器 形	文 様	
1	Ⅷ Jo-1 住	3	(16.1)	—	(9.0)	B	不明	お	地文+平行沈線
2	Ⅷ Ⅱ 住	5	(10.4)	4.9	4.9	B	Ⅱ	あ	縄文
3	#	12	—	5.0	(4.4)	不明	I	お	台付鉢の台
4	Ⅷ Jo-2 住	1	(25.6)	—	(13.3)	A	不明	い	地文+沈線1本
5	Ⅷ Jo-1 住	1	(15.4)	—	(10.0)	A	不明	い	#
6	Ⅷ Jo-生	1	(13.4)	—	(6.2)	A	不明	え	地文+底形工字
7	#	3	14.4	7.4	8.6	B	Ⅱ	あ	腹部に沈線を持ち括れを有す
8	Ⅷ Ⅱ 住	2	(21.8)	—	(8.0)	B	不明	う	平行沈線
9	#	3	16.8	(6.2)	10.4	A	Ⅱ	え	地文+底形工字
10	#	4	(12.9)	(5.2)	9.8	B	I	い	縄文
11	Ⅷ ki 住	2	(19.6)	5.7	4.9	B	Ⅱ	い	縄文+沈線1本
12	#	3	6.9	6.0	6.3	C	Ⅱ	あ	やや深んだ筒状を呈す
13	遺構外	3	—	(5.8)	(5.8)	不明	Ⅱ	か	底形工字文
14	#	11	(27.0)	5.7	16.8	B	Ⅱ	お	地文+平行沈線

() … 尺取・推定値 () … 視測値

第41表 浅鉢形土器 時期別形態・文様一覧

	形 態								文 様					対象点数
	I	II	不明	A	B	C	不明	あ	い	う	え	お	か	
1 曜	1	5	3	3	5	1	0	2	3	1	2	1	0	9
2 類	1	2	2	1	2	9	2	1	1	0	6	2	1	5
合 計	2	7	5	4	7	1	2	3	4	1	2	3	1	14
(%)	14.3	50.0	35.7	28.6	50.0	7.1	14.3	21.45	28.6	7.1	14.3	21.45	7.1	

第42表 浅鉢形土器 時期別法量一覧

No	形 態	口 径			底 径			器 高			
		小	大	平均	小	大	平均	小	大	平均	
1	曜	小	—	—	8.9	—	—	—	—	—	4.9
		大	—	—	27.0	—	—	—	—	—	10.4
		平均	—	—	16.0	—	—	—	—	—	9.45
2	類	小	—	—	10.4	—	—	—	—	—	(実績でまたは1点のみ)
		大	—	—	16.1	—	—	—	—	—	5.8
		平均	—	—	13.97	—	—	—	—	—	4.9
平	均	—	—	15.285	—	—	—	—	—	7.165	

単位：cm 西側の () は推定

④ 壺 (第172図・第43～45表)

壺形土器は3区出土遺物の中で最も多く、実測可能土器だけで70点にもものぼる。時期別の内訳は、1類及び2類が各28点・3類が14点である。但し、口縁～底部まで残存するものは、70点中37点(1類:14、2類:14、3類:9)である。

- a. 口縁部形態: A～Eの5タイプに分け、更に複合口縁のものには丸印を付した。その結果、全体的に平口縁のBタイプが多く(47.1%)、突起を有すA(15.7%)・波状口縁のC(15.7%)がこれに続いている。また、複合口縁はAとBにのみ見られる。時期的には、1類に於いてBが著しく多いが突起のAタイプも比較的多いのに比べ、2類では平口縁Bタイプがやや減少し波状のCタイプが多くなっている。3類ではA・Bに複合口縁のものが見られる様になり、割合的には突起を有すものが波状のものに比べやや多くなっているが、やはりBの平口縁タイプが多い。
- b. 頸部形態: イ～ニの4タイプに分けたが、頸部に沈線が繞るものについては丸印を付した。全体的に見ると、「く」の字状に括れるイ及び若干緩く括れるロの2タイプが多く、両者を合わせると50%にもなる。また、この両タイプでは沈線を有するものの方が多く、特にイに於いては顕著である。ハ・ニのタイプに於いては、逆に沈線を有すものの方がずっと少なくなっている。時期的に見ると、1・2類では括れのあまり見られないハ・ニのタイプは少なく、2類に於てはニは全く見られないのに比べ、3類では逆に顕著に括れを有すイ・ロが全く見られず、括れの少ないもの・括れないものばかりである。
- c. 体部形態: あ～えの4タイプに分けた。全体的には、肩部を有するあタイプ(34.3%)とあまり肩の張らないうタイプ(32.8%)が多い。時期的に見て行くと、1類ではう・あが多く、2類ではあが圧倒的に多く続いていることが多いが、1・2類共にえタイプは全く見られない。3類では、逆にえタイプが多く、次いでうタイプが続いている。
- d. 文様形態: 1～4の4形態に分けた。2の地文のみのタイプが圧倒的に多く、全体の実に68.6%にも達する。これは、所謂粗製土器が多いことの裏付けであろう。また、無文土器(1タイプ)も比較的多く、11.4%の割である。時期的には、1・2類共に2が多く3・4は殆ど見られないが、2類では1タイプも比較的多い。3類では4タイプが多く、1タイプは全く見られず、2・3も比較的少ない傾向が見られるが、この3類の4タイプに見られるその他の文様とは、交互刺突文などが挙げられる。

(口縁部形態)



E…その他

※複合口縁は
○で囲む。

(頸部形態)



※沈線を有するものは○で囲む。

(体部形態)

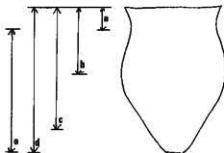


(文様形態)



(文様部の範囲)

- a: 口縁～頸部にあるもの
- b: 口縁～体部上半にあるもの
- c: 口縁～体部下半にあるもの
- d: 口縁～体部下半で、頸部が無文帯となるもの
- e: 頸部以下にあるもの
- f: 無文のもの
- g: その他



第172図 壺形土器 分類基準

第43表 甕形土器 形態・文様・度量一覽

No.	出土地点	土器番号	口径		最大径		高 (cm)			口縁部			胎体			文様	備考
			径	径	径	径	全高	口縁高	口縁径	厚	形	形	形	形	形		
1	Ⅷ-1a	3	(9.5)	(10.1)	5.6	10.6	c	㊦	う	2	e						
2	Ⅷ	4	(10.9)	(8.4)	4.8	9.6	B	㊦	あ	2	e						
3	Ⅷ	5	(9.0)	(9.0)	4.8	9.1	B	㊦	あ	2	e						
4	Ⅷ	10	(27.8)	(24.9)	—	(21.1)	B	㊦	う	3	f						
5	Ⅷ	11	(22.4)	(25.4)	7.4	24.8	c	㊦	あ	3	e						
6	Ⅷ-1c	1	(25.7)	—	6.8	(28.8)	c	㊦	あ	3	e						
7	Ⅷ	2	(29.8)	(28.0)	—	(29.5)	B	㊦	あ	3	e						
8	Ⅷ	3	(33.6)	(30.5)	—	(36.7)	B	㊦	う	4	d						
9	Ⅷ-1b	3	14.4	—	5.9	19.3	B	㊦	あ	4	d						交互刺突文
10	Ⅷ	4	(29.0)	(31.9)	6.0	44.7	B	㊦	い	4	d						交互刺突文
11	Ⅷ	5	(27.8)	26.1	7.6	31.5	B	㊦	い	3	e						
12	Ⅷ	6	39.3	31.3	8.9	44.2	B	㊦	う	4	d						
13	Ⅷ	7	(27.2)	(31.8)	7.0	45.0	B	㊦	う	2	d						
14	Ⅷ	8	(44.0)	—	7.8	(39.7)	A	㊦	あ	4	a						
15	Ⅷ	9	(25.0)	—	7.0	25.0	E	㊦	あ	4	a						
16	Ⅷ	10	38.6	—	—	(15.5)	C	㊦	あ	4	a						
17	Ⅷ	11	(22.2)	(31.8)	(31.8)	(36.0)	—	(26.4)	B	㊦	あ	2	a				不要削り跡を呈する跡
18	Ⅷ-1a	1	(15.4)	—	—	(9.5)	A	㊦	い	2	a						
19	Ⅷ	2	(15.0)	—	—	30.7	B	㊦	い	2	e						
20	Ⅷ	3	(26.5)	—	—	(15.3)	B	㊦	あ	2	e						
21	Ⅷ	4	(15.0)	17.2	6.3	16.8	A	㊦	あ	2	e						腰一帯部に平行波線11本並ぶ。中央部。
22	Ⅷ-1b	4	(26.0)	29.9	—	(22.5)	D	㊦	あ	2	e						
23	Ⅷ	5	(29.2)	39.1	—	(27.2)	B	㊦	う	2	e						
24	Ⅷ-1c	5	28.5	27.9	9.2	32.4	C	㊦	う	2	e						
25	Ⅷ	6	(25.9)	29.9	6.4	28.9	B	㊦	う	4	c						
26	Ⅷ	7	(27.6)	(28.6)	(9.8)	(33.8)	A	㊦	あ	2	e						
27	Ⅷ	8	29.3	26.8	9.5	34.8	C	㊦	う	2	e						
28	Ⅷ	9	—	26.5	9.2	(23.0)	不明	㊦	う	2	e						
29	Ⅷ-1a	10	27.5	28.0	11.9	36.4	C	㊦	あ	1	f						
30	Ⅷ	11	27.8	28.1	8.6	27.2	C	㊦	う	1	f						
31	Ⅷ	4	—	—	8.9	(11.3)	不明	不明	不明	う	1	f					
32	Ⅷ-1b	4	(31.8)	—	(9.9)	37.9	B	㊦	う	3	e						
33	Ⅷ-1a	6	(13.8)	12.5	6.9	12.8	B	㊦	う	2	C						
34	Ⅷ	7	(13.8)	(15.5)	—	(16.5)	B	㊦	い	2	e						
35	Ⅷ	8	(22.8)	(26.4)	—	(12.2)	B	㊦	い	2	e						
36	Ⅷ	9	(27.4)	(27.7)	—	(19.2)	A	㊦	い	2	e						
37	Ⅷ-1a	2	25.7	26.5	14.4	35.8	B	㊦	う	2	C						
38	Ⅷ-1a	13	(11.1)	(11.1)	6.9	13.6	A	㊦	あ	1	f						
39	Ⅷ	14	(16.2)	16.9	7.7	17.1	B	㊦	あ	1	f						
40	Ⅷ	15	—	19.9	—	(12.5)	不明	不明	あ	2	e						
41	Ⅷ	16	(26.4)	(21.7)	—	(17.1)	B	㊦	あ	2	e						
42	Ⅷ	17	(22.4)	(22.5)	(7.5)	(26.5)	B	㊦	あ	2	e						
43	Ⅷ	18	—	(23.1)	—	(16.0)	不明	㊦	あ	2	c						
44	Ⅷ	19	—	—	9.2	(11.3)	不明	不明	不明	う	2	e					
45	Ⅷ	20	—	—	(9.0)	(12.4)	不明	不明	不明	う	2	e					
46	Ⅷ-1a	4	14.4	7.5	(13.5)	不明	㊦	あ	2	e							
47	Ⅷ	5	(24.4)	(26.1)	(9.8)	(35.7)	B	㊦	う	2	e						
48	Ⅷ	6	(24.0)	(29.8)	—	(23.8)	B	㊦	あ	2	e						
49	Ⅷ-1a	5	(6.9)	8.6	4.7	(6.8)	B	㊦	あ	2	e						
50	Ⅷ	9	(21.5)	(21.5)	8.6	26.4	A	㊦	あ	2	e						
51	Ⅷ	10	(18.6)	(21.3)	—	(20.4)	B	㊦	う	2	e						
52	Ⅷ	11	(23.1)	(25.9)	(10.2)	32.4	B	㊦	う	2	e						
53	Ⅷ	12	(27.8)	(28.6)	—	22.8	B	㊦	う	2	e						縁部文
54	Ⅷ	13	(22.8)	(24.0)	(6.2)	(33.2)	B	㊦	う	2	e						
55	Ⅷ	14	—	—	9.1	(19.3)	不明	不明	不明	う	2	e					
56	Ⅷ-1a	4	(14.4)	(17.0)	(7.2)	17.7	B	㊦	い	2	e						
57	Ⅷ-1a	4	(14.2)	(17.4)	—	(16.3)	C	㊦	う	2	e						
58	Ⅷ	5	—	—	21.2	不明	不明	不明	う	2	e						
59	Ⅷ	6	—	—	9.5	(6.7)	不明	不明	不明	う	2	e					
60	遺構内	6	(10.0)	(10.0)	3.6	13.5	A	㊦	う	2	e						内面に十字溝。
61	Ⅷ	7	10.5	11.1	3.1	11.9	B	㊦	あ	2	e						
62	Ⅷ	8	(3.4)	4.7	2.1	(4.5)	A	㊦	い	2	c						
63	Ⅷ	9	9.3	6.2	0.3	8.3	B	㊦	い	1	f						
64	Ⅷ	19	(24.5)	26.5	—	(21.8)	D	㊦	あ	2	e						
65	Ⅷ	20	(30.0)	(30.4)	—	(14.0)	C	㊦	あ	3	e						縁部文
66	Ⅷ	21	(29.3)	(34.0)	—	(36.5)	C	㊦	あ	2	e						
67	Ⅷ	22	34.7	—	7.1	—	㊦	㊦	う	1	a						交互刺突文
68	Ⅷ	23	(25.0)	(26.4)	—	15.0	B	㊦	う	3	C						
69	Ⅷ	24	(18.4)	16.0	6.4	(28.7)	B	㊦	う	4	C						刺突文

() 一尺制・推定値 ; () 一尺制高

第44表 甕形土器 時期別形態・文様一覧

時期	口										体										対象点数																
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	1	2	3	4	a	b	c	d	e	f		g															
1	4	9	17	9	2	1	6	4			1	6	1	6	0	3	4	1	3	8	6	11	0	3	2	25	1	9	0	0	6	0	17	1	3		
2	4	9	17	9	2	1	6	4			4	15	2	8	6	8	5	1	0	0	4	15	2	8	6	3	6	20	1	1	1	0	5	0	12	6	4
3	1	2	5	3	1	8	3	3			0	0	0	0	0	3	2	6	1	0	0	1	2	4	7	0	0	3	2	3	4	1	3	3	1	0	2
計	9	2	30	3	11	2	3	10			1	12	10	12	8	6	12	2	7	21	30	23	7	6	8	48	4	10	5	1	14	2	30	8	9		
%	13.7	47.1	35.2	2.9	4.2	3.5	18.6	31.4	10.0	20.9	10.9	34.3	32.0	10.4	9.0	16.9	15.7	14.3	17.1	1.0	44.3	42.8	11.4	22.8	41.2	5.8	14.3	12.8	1.5	21.4	11.2	13.2	12.8				

第45表 甕形土器 時期別法量一覧

時期	器	口径	底径		器高	
			小	大	小	大
1	甕	小	3.4		4.7	2.1
		大	31.8		34.0	14.4
		平均	18.87		28.96	7.47
2	甕	小	9.0		8.4	4.8
		大	30.0		30.4	11.0
		平均	21.63		22.92	7.67
3	甕	小	14.4		7.1	6.9
		大	44.0		35.2	8.9
		平均	29.0		26.72	7.64
平均			23.13		25.60	7.46

単位：cm 器高の()値は除く

- e. 文様部の範囲：a～gの7タイプに分類した。前述した様に全体的に粗製土器が多いという点が反映して、eの頸部以下に地文を付すタイプが多く、42.9%に達している。口縁部～体部下半まで文様が展開するCタイプが、20.0%と続いている。時期的に見ると、1類ではa・b・dが見られずe・cの順で多く、2類ではeがやはり一番多いが次いでf・cが続いており、b・dは見られずaも少数である。3類に於いてはfが出ていないもの他に割合平均的に表われている。従って、1・2類では粗製土器が多い傾向を示し、3類では文様部を有する精製土器が比較的多いという傾向を示していると言えよう。

- f. 法量：時期的変化について見ると、1・2・3類になるに従い大形化する傾向がある様であるが、底径は3者共にあまり違ってない。従って、特に3類では口径・器高が大形化している訳であるから、これらに対する底径値は非常に低くなり、口径に対して24.28%（1類では39.59%、2類では36.55%）、器高に対する数値は22.62%（1類…33.97%、2類…33.59%）となっている。

- g 朱塗り：朱彩が施されている土器は非常に少なく、実に5.3%にしか過ぎない。実際には粗製土器では全く見られず、精製土器の極く一部に見られるだけである。類毎に見ると、1類で3.1%・2類で4.9%・3類で7.5%となっている。

- h. モミ痕土器：掲載した壺の中で、実に4点のモミ痕土器が見つかっている。(実測可能土器2点・拓影図のもの2点) 時期的には、1類に属すと思われるもの2点、2・3類に属すと思われるもの各1点である。位置的には、口縁部内面1点・体部内面2点・底部外面1点である。尚、モミ痕の詳細については、後掲の「鑑定・分析」の章を参照されたい。

⑤蓋 (第173図・第46・47表)

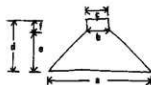
全部で18点の図示であるが、実測図のもの7点・拓影図11点である。しかし、上端〜下端まで実測可能なものは唯の1点しかなく、ツマミ部のみ或いは笠部のみというものが殆どである。従って、法量的な分析は困難であるから、法量的な観点は全体的な視点からのみに留めることとする。

- a. 笠部形態：1〜3の3形態に分けた。全体的には直線的に開く2が多く、50%にも達する。時期的に見ると、やや丸味を持って開く1のタイプは3類には見られず、やや外反気味に開く3タイプは2類で見られない。
- b. ツマミ部形態：イ・ロの2タイプに分けた。ツマミ部形態の判明するものは、18点中6点のみであったが、高環の脚部状を呈するイのタイプは1点のみで、他の5点は何れもロのタイプであった。イタイプの1点は2類に属し、唯一の精製土器である。

(笠部形態)



(法量)



(ツマミ部形態)



()…反転・推定図
[]…現器高
単位…cm

(文様形態)



第173図 蓋形土器 分類基準

c. 文様形態：あ～うの3タイプに分類した。全体的にはいの地文タイプが多く、18点中12点の66.7%にもものぼっている。類別に見ると、3類ではあ・うタイプが見られず、いの地文でも他の1・2類がLR縄文を付しているのに比べ、RL縄文が施されている。また、文様を持つタイプは1・2類にそれぞれ1点ずつ見られるが、1類のものはツマミ部に沈線が繞るものであり、2類のものは連弧文・磨消・刺突列点文を施した精製のものである。従って、笠部に文様を有するものはこの1点のみで、他は無文或いは地文のみの粗製のものであった。

d. 法量：掲載した18点中で、何れかの法量測定が可能であったものは7点に過ぎないが、1点を除いてbの計測は可能であった。その最大値は5.4cm・最小値は2.5cm・平均値は3.28cmである。また最大値5.4cmを測る個体は唯一点の精製土器であるが、全体的に見て、他の個体より大き目である様である。従って、この1点を除いた粗製土器のbの平均値は2.86cmとなり、大分小振りになる。ツマミ径cの平均値は5.56cm・

第46表 蓋形土器 形態・文様・法量一覧

No	出土地点	七器番号	法 量 (cm)						輪 郭	ツマミ径	文様形態	備 考
			a	b	c	d	e	f				
1	ⅧI a 住	9	(22.8)	5.4	-	(11.3)	7.65	(3.65)	2	イ	5	精製土器。半線り。
2	ⅧI b 住	11	-	-	-	-	-	-	2	不明	い	拓影図。笠部。
3	ⅧI f 住	12	-	-	-	-	-	-	2	不明	い	拓影図。笠部。
4	ⅧIc 住	4	-	3.4	4.4	(3.3)	(1.6)	1.7	不明	ロ	い	ツマミ部。
5	ⅧI d 住	4	-	3.1	4.7	(4.6)	(1.5)	2.5	不明	ロ	う	ツマミ部。上縁・縁部部に沈線有り。
6	#	10	-	-	-	-	-	-	2	不明	い	拓影図。笠部。
7	#	11	-	-	-	-	-	-	2	不明	い	拓影図。笠部。
8	ⅧI f 2 住	19	-	-	(10.2)	-	-	(4.2)	不明	ロ	あ	ツマミ部。
9	ⅧI 住	25	-	-	-	-	-	-	2	不明	い	拓影図。笠部。
10	ⅧI k 2 住	2	11.8	(2.8)	(3.6)	7.0	4.8	2.2	1	ロ	あ	裏口削り。
11	ⅧI j 1 住	6	-	2.5	4.9	(3.2)	(1.3)	1.9	不明	ロ	い	ツマミ部。
12	#	18	-	-	-	-	-	-	2	不明	あ	拓影図。笠部。
13	#	19	-	-	-	-	-	-	2	不明	い	拓影図。笠部。
14	遺構外	5	-	2.5	-	-	-	-	不明	不明	あ	縁合部付近のみ。
15	#	34	-	-	-	-	-	-	2	不明	い	拓影図。笠部。
16	#	35	-	-	-	-	-	-	3	不明	い	拓影図。笠部。
17	#	36	-	-	-	-	-	-	1	不明	い	拓影図。笠部。
18	#	127	-	-	-	-	-	-	2	不明	い	拓影図。笠部。

() 一尺尺・測定値 ; } 一取柄高

第47表 蓋形土器 時期別形態・文様一覧

	器		形			文					対象点数
	笠		部			部					
	1	2	3	不明	イ	ロ	小柄	あ	い	う	
1 期	1	2	1	3	0	4	6	3	6	1	10
2 期	1	2	0	2	1	3	3	1	3	1	5
3 期	0	2	1	0	0	0	3	0	3	0	3
計	2	9	2	5	1	3	12	4	12	2	18
(%)	11.1	50.0	11.1	27.8	5.5	27.8	66.7	22.2	66.7	11.1	

ツمامミ高の平均値は2.08cmで、個々に見てもツمامミ径がツمامミ高の倍ぐらいになっているものが多い。尚、時期的な相違は、確としない。

- e. 朱塗り：唯一点の粗製土器のみ見られる。朱の範囲は、外面全体及びツمامミ部内面に見られる。
- f. 蒸気口について：1類の時期に属するVII J k-2 堅穴住居址出土の蓋形土器には、ツمامミ部の底部分から笠部の天圓部分にかけて穴が1ヶ穿たれている。このタイプは、他の蓋形土器には見られず、本調査区で唯一点の例である。この穴に関しては、蓋形土器に穿たれている点・位置等から、蒸気抜きの機能が考えられるが、県内でもこの種の機能を持つ蓋形土器の類例は無い様である。(註)

(3) 結論

以上、各器種毎にその形態・文様・法量について若干の分析を試みた。その結果、各器種毎の特徴と時期別に見た傾向が、ある程度掴めた様に思う。従って、以下ではこの2点について若干まとめてみたい。

①各器種毎の特徴

- a. 高坏：すべてが精製土器であり、その殆どには朱彩が施され、坏部・脚部共に文様部を有すが、坏部では変形工字文・脚部では波状文が一般的である。但し、その文様パターンは実に多種多様であり、変形工字文の範疇に入るものだけでも10種類以上は見られ、その他にも垂下文的モチーフ等色々ある。また、口縁部形態では突起を有すもの・平口縁の両者が見られるが、前者がやや多いものの突起然とした口唇部から突出したものは少ない。
- b. 壺：全体的に丁寧な作りのものが多く、朱彩のものも目立つ。器形的には頸部に括れを有すものが多く、口縁形態も突起を有すもの・平口縁の両者がある。文様的には地文のみを付すもの或いは頸部にのみ沈線線を有し以下地文のものが多いが、変形工字文・連弧文・連続山形文等の文様を有すものも割合見られた。
- c. 浅鉢：数量的にはあまり多くない。平口縁のものが多く、文様を有するもの・地方のみのものが同量程度ある。また、台付のものも若干あるが、器形を推定出来るものは無い。朱塗りを施すものも割合多く、文様を有すものに顕著である。
- d. 甕：各部形態・全体器形・文様等、様々なタイプが見られるが、概して地文のみを付すものや頸部に沈線を有すもの以下地文のみの所謂粗製土器が圧倒的に多い。また、器形的には、肩部を有し頸部に括れ、口縁部で開くタイプが多く見られ、底部が小さめのものが目立つ。尚、「モミ痕」を有する土器が全部で4点出土している。

第48表 弥生時代竪穴住居址出土朱塗り土器点数一覧

住居名	器種	高 坏	蓋	壺	浅 鉢	深鉢・壺	他	計
VII Ia	全	15.0	1.0	4.0	0	7.0	4.0	31.0
	朱	14.0	1.0	1.0	0	1.0	0	17.0
	%	93.3	100	25.0	0	14.3	0	54.8
VII Ib	全	3.0	1.0	3.0	0	7.0	0	14.0
	朱	3.0	0	0	0	1.0	0	4.0
	%	100	0	0	0	14.3	0	28.6
VII Ic	全	0	0	0	0	7.0	0	7.0
	朱	0	0	0	0	0	0	0
	%	0	0	0	0	0	0	0
VII If	全	0	1.0	2.0	0	26.0	0	29.0
	朱	0	0	1.0	0	2.0	0	3.0
	%	0	0	50.0	0	7.7	0	0.1
VII Ij	全	2.0	0	3.0	0	3.0	1.0	9.0
	朱	2.0	0	0	0	0	0	2.0
	%	100	0	0	0	0	0	22.2
VII Ja-1	全	2.0	0	3.0	1.0	4.0	1.0	11.0
	朱	1.0	0	1.0	0	0	0	2.0
	%	50.0	0	33.3	0	0	0	18.2
VII Jc	全	1.0	1.0	2.0	0	8.0	0	12.0
	朱	0	0	1.0	0	0	0	1.0
	%	0	0	50.0	0	0	0	8.3
VII Je-2	全	2.0	0	2.0	0	3.0	0	7.0
	朱	2.0	0	0	0	0	0	2.0
	%	100	0	0	0	0	0	28.6
VII Jf-1	全	11.0	3.0	2.0	0	6.0	0	22.0
	朱	10.0	0	1.0	0	0	0	11.0
	%	90.9	0	50.0	0	0	0	50.0
VII Jf-2	全	5.0	0	2.0	0	2.0	0	9.0
	朱	4.0	0	2.0	0	0	0	6.0
	%	80.0	0	100	0	0	0	66.7
VII Jg-1	全	0	0	1.0	1.0	4.0	0	6.0
	朱	0	0	0	0	0	0	0
	%	0	0	0	0	0	0	0
VII Ji	全	11.0	1.0	6.0	2.0	13.0	0	33.0
	朱	11.0	0	5.0	1.0	1.0	0	18.0
	%	100	0	83.3	50.0	7.7	0	54.5
VII Jk-1	全	6.0	0	2.0	0	1.0	0	9.3
	朱	3.0	0	0	0	0	0	3.0
	%	50.0	0	0	0	0	0	33.3
VII Jk-2	全	5.0	1.0	0	1.0	4.0	0	11.3
	朱	3.0	0	0	0	0	0	3.0
	%	60.0	0	0	0	0	0	27.3
VII Jl	全	12.0	3.0	3.0	3.0	11.0	0	32.0
	朱	12.0	0	0	2.0	0	0	14.0
	%	100	0	0	66.7	0	0	43.8
VII Jm	全	1.0	0	2.0	0	2.0	0	5.0
	朱	1.0	0	1.0	0	0	0	2.0
	%	100	0	50.0	0	0	0	40.0
VII Jo	全	4.0	0	1.0	2.0	2.0	0	9.0
	朱	3.0	0	1.0	1.0	0	0	5.0
	%	75.0	0	100	50.0	0	0	55.6
VII Ki	全	2.0	0	1.0	2.0	3.0	0	8.0
	朱	1.0	0	1.0	1.0	1.0	0	4.0
	%	50.0	0	100	50.0	33.3	0	50.0

第49表 弥生時代竪穴住居址出土朱塗り土器時期別点数一覧

時期	器種	高 坏	壺	浅 鉢	甕	甕	他	計
1類	全	47.0	13.0	8.0	32.0	7.0	0	107.0
	朱	38.0	5.0	4.0	1.0	0	0	48.0
	%	80.9	38.5	50.0	3.1	0	0	46.2
2類	全	32.0	21.0	4.0	41.0	3.0	6.0	107.0
	朱	29.0	9.0	1.0	2.0	1.0	0	42.0
	%	90.6	42.9	25.0	4.9	33.3	0	39.3
3類	全	3.0	5.0	0	40.0	2.0	0	50.0
	朱	3.0	1.0	0	3.0	0	0	7.0
	%	100	20.0	0	7.5	0	0	14.0
合計	全	(31.1) 82.0	(14.8) 39.0	(4.5) 12.0	(42.8) 113.0	(4.5) 12.0	(2.3) 6.0	264.0
	朱	(72.2) 70.0	(15.5) 15.0	(5.1) 5.0	(6.2) 6.0	(1.0) 1.0	0	97.0
	%	85.4	38.5	41.7	5.3	8.3	0	36.74

(註) 全……全点数 朱……朱塗り土器点数

合計の全点数・朱塗り土器点数下の()内数値は各々合計点数に対する%である。

- e. 蓋：量的には割合が少なく、1点を除いて無文或いは地文のみの土器である。残る1点は文様を有し朱彩が施された精製土器である。また、県内でも珍しい「蒸気口」を有すものが1点出土している。

②時期別に見る傾向

各器種で浮上した特徴を1～3類の各時期別に検討した場合、概ね次の様な事が言い得ると思われる。

- a. 1類：器種は高坏・壺・浅鉢・甕・蓋が見られ、高坏・壺・浅鉢には寛描沈線に依る変形工字文が施されるものが目立つ。壺・甕には地文のみが殆どされたものが多いが、口縁部には突起等の平口縁以外のものも目立つ。特に高坏に於いては大きな突起を有すものも見られる。
- b. 2類：1類と同じく5器種見られるが、甕を除いて文様部を有する精製土器が増え、その文様もバラエティーに富む。文様では、磨消技法を用いたものが主流となり、寛描沈線文に依るものは減少している。器形的には全体的に平口縁のものが増え、突起を有すものでも、割合小さめの突起のものが多い。
- c. 3類：高坏・浅鉢は見られなくなり、壺も非常に数が少なくなって、甕が中心となる。甕では深鉢或いは若干括れる程度の器形を示すものが殆どとなり、大形化する傾向が見られると共に、交互刺突文等の文様を有す精製土器が目立つ。また、地文そのものも1・2類で見られたLR縄文は見られず、縷糸文L・附加条RL等が使用されている。

以上、器種毎・時期毎に若干の分析・検討を加えた訳であるが、あくまでも本調査3区出土の弥生土器についての単純なデータ処理に過ぎず、他遺跡或いは時期的・形式的な比較検討は全く行っていない。量・質共に充実したこれだけの資料であるだけに、力量不足な担当者としては敢えて生半可な考察はせずに、データの提出を原則とした。しかし、データの処理等についても多々問題は残るであろうが、今後の弥生時代の土器群研究の一助として役立てて頂ければ幸いである。

参考文献

- 伊東信雄 1974 弥生文化「水沢市史」1 水沢市
 // 1984 青森県における稲作農耕文化の形成「東北文化研究所紀要」第15号 東北学院大学

- // 1985 東北地方における稲作農耕の成立「日本史の黎明」六興出版
- 中村五郎 1976 東北地方南部の弥生式土器編年「東北考古学の諸問題」東北考古学会
- 坪井清足 1953 福島県天王山遺跡の弥生式土器「史林」36-1 京都大学
- 須藤 隆 1982 北辺の弥生文化「縄文土器大成」5 講談社
- // 1983 東北地方の初期弥生土器—山王山層式—「考古学雑誌」68-3
- // 1983 弥生文化の伝播と恵山文化の成立「考古学論叢」芹沢長介先生還暦記念論文
集刊行会
- // 1973 土器組成論「考古学研究」19の4
- 小田野哲憲 1982 弥生時代「岩手の土器」岩手県立博物館
- // 1985 和井内東遺跡出土の弥生式土器「日高見聞」菊池啓治郎学兄還暦記念会編
- 杉原康二・他 1985 弥生時代「岩手の遺跡」岩手県埋蔵文化財センター
- 林謙作・小田野哲憲 1977「谷起島遺跡第一次発掘調査報告書」一関市教育委員会
- 小田野哲憲・熊谷常正 1979「第2次谷起島遺跡発掘調査概要」一関市教育委員会
- 工藤 武 1982「第4次谷起島遺跡発掘調査概要」一関市教育委員会
- 山口了紀 1978「江刺市沼の上遺跡」岩手県埋蔵文化財センター
- 伊藤鉄夫 1973「沼ノ上遺跡調査報告書」江刺市教育委員会
- // 1969「水沢市の歴史」水沢市教育委員会
- 遠藤勝博 1981「大淵遺跡」岩手県埋蔵文化財センター
- 高橋義介 1981「火行塚遺跡」岩手県埋蔵文化財センター
- 小田野哲憲・高田和徳 1983「上野B遺跡」一戸町教育委員会
- 高田和徳 1984「上野遺跡」一戸町教育委員会
- // 1985「上野遺跡」一戸町教育委員会
- 高橋信雄・他 1979「兎II遺跡」岩手県埋蔵文化財センター
- 高橋文明 1983「蔵屋敷遺跡」江釣子村教育委員会
- 近藤宗光・他 1985「小井田III遺跡発掘調査報告書」岩手県埋蔵文化財センター
- 三浦謙一・他 1984「長者屋敷遺跡発掘調査報告書(III)」岩手県埋蔵文化財センター
- 三上 昭 1980「墳館遺跡」岩手県教育委員会
- 三浦圭介・他 1985「垂柳遺跡」青森県教育委員会・垂柳遺跡発掘調査会
- 加藤道男 1982「青木畑遺跡」宮城県教育委員会

(2) 石器

本調査区から出土した石器は、遺構の内外から多量に出ているが、器種・法量・石質等については一覧表（第53表）にまとめた。

これら多くの石器のうち、特に弥生時代に属する石器について、以下若干の検討を加えてみたい。尚、この弥生時代に属する石器の対象としては、本調査区で検出された18棟の弥生時代竪穴住居址内から出土したものに限定することとした。

① 器種の分類

前述した事実記載で用いた分類を、ここでもそのまま利用する。即ち、石鏃・石匙・石錐・石ペラ・スクレーパー・不定形石器・石斧・磨石・凹石・砥石・石皿・台石の各器種である。尚、ここで用いたスクレーパーとは、形態的にやや定形化できるものを不定形石器と区別するために使った名称である。

これら各器種については更に各々細分を計った訳であるが、剥片石器では形態毎に、他では機能毎に分類した。細分については、以下述べる各器種毎の説明中で触れることとする。

② 各器種に見る特徴

- a. 石鏃：茎の有無に依って大きく2つに分け、更に基部形態に依って3種類に分け、計5タイプに分類した。弥生時代の住居址からは合計10点の石鏃が出ているが、前述の5タイプに分けると以下の如くなる。

(有茎鏃)

凹基有茎鏃……	1点
平基有茎鏃……	1点
凸基有茎鏃……	6点
計……………	8点

(無茎鏃)

凹基無茎鏃……	2点
平基無茎鏃……	0点
計……………	2点

(平基無茎鏃は、弥生時代住居外から出土している)

即ち、有茎鏃の方が圧倒的に多く、特に凸基有茎鏃が抜き目出ている。

また、石質について見ると、第52表の如く、硬質頁岩を筆頭に珪質頁岩・チャート・珪質凝灰岩・玉髓が使われており、硬質の岩石を用いていることがわかる。

製作技法に関しては、表裏両面に稜線を持ち先端も鋭利に作っているものもあるが、割合雑な作り方をしているものもあり、形状的にもやや歪みを持つものもあるなど、全体的にやや稚拙な観を受ける。先端部及び基端部に欠損を有するものが比較的多く、先端部に再加工を施しているものもあるなど、使用されていたことを物語るものも多い。

法量的には第51表に示す通り、有茎鏃の平均値で長さ2.98cm・幅1.14cm・厚さ0.44cm・重さ1.26gであり、無茎鏃で長さ2.0cm・幅1.25cm・厚さ0.3cm・重さ0.55gである。

- b.石匙：形状によって、縦形・横形の2形態に分類した。表中の不明となっているものは、石匙の部分片で形態がわからないものである。形態のわかるもの4点、不明なもの3点の計7点が出土しているが、前者4点の内訳は縦形3・横形1である。石質的には、硬質頁岩及び珪質頁岩が用いられている。

また技法的には、裏面は剥離面をそのまま使用して表側のみ調整を施した片面調整のものが目立つ。

- c.石錐：形態によって、定形・不定形の2者に分けた。定形のもの1・不定形のもの2の計3点の出土である。不定形のものは何れも一部を若干加工して錐部としているものであるが、内1点は錐部を持つと同時に刃部を作り出した一辺を有しており、搔・削的機能も併わせ持っている。

石質的にはやはり硬質系の硬質頁岩・珪質頁岩が使われている。

- d.石べら：2点の出せであるが、細分は行わなかった。石質は何れも硬質頁岩を用いている。技法的には、細かい調整はあまりされず、比較的大きめの剥離に依って成形され、刃部についてもやや大きめの剥離調整に依って作られている。両者共に、長さ(平均7.9cm)の削に厚味(平均2.15cm)がある。

第50表 弥生時代竪穴住居址出土石器 器種別点数一覧

器種	石鏃		石匙		石錐		石べら		スレーパー		不定形		石斧		磨石		石		コア		合計	
	有茎	無茎	縦形	横形	不明	定形	不定形	片形	円形	アップの加工品	片	丸	打製	磨製	磨石のみ	磨石の供用	磨石のみ	磨石の供用	コア	コア		不明あり
Ⅷ1a位			2						1		3	4		1	3	1			1	1	1	20
Ⅷ1b位											1									1		2
Ⅷ1c位											1	1				1			1			6
Ⅷ1d位																						1
Ⅷ1e位			2					1	1				2	1				1	1	1	1	12
Ⅷ1e-1位						1							1	1								4
Ⅷ1e位											1				2					1	1	6
Ⅷ1e-2位															1							1
Ⅷ1f-1位	2	1									5		4							1		12
Ⅷ1f-2位	1					1							1								2	5
Ⅷ1g-1位												2								1		3
Ⅷ1h位	1										1				1				1	2	1	10
Ⅷ1k-1位						1						1									1	3
Ⅷ1k-2位															2					1		3
Ⅷ1j位	1		1										4	1		1	1					9
Ⅷ2m位						1								1								2
Ⅷ2o位																	1					1
Ⅷ2l位			1										3									5
小計	8	2	3	1	3	1	2		2	1	4	20	2	8	11	4	0	1		4	4	105
合計	10		7		3		2		3		30	10		15		1		4		4	6	2

- e. スクレーパー：前述した様に形状的に定形化可能なグループであるが、台形状を呈するものと円形を呈するものを取り上げた。

台形状を呈するものは2点の出土であるが、両者共に硬質頁岩を用いている。製作技法的に特徴なのは、器面調整は片面のみに施され、裏面は剝離面をそのまま活用しており、両側の刃部調整をその裏面から施し、下端の刃部を表面から作り出している点である。即ち、各刃部共に片刃ではあるが、その加工面は両側と下端では逆になっているのである。また、全体的に薄手なもの特徴的である。用途的には、掻・削器の類と考えられるものの確とはせず、不明である。尚、同種のものは遺物包含層Kブロックから出土している。

円形を呈するものは、珪質頁岩を用いた1点のみであるが、遺構外から他に1点出土している。器面調整は両面から施され、円周の殆どに作り出された刃部もまた両面から加工されている。

- f. 不定形石器：以上述べた様な定形石器外の剝片石器をすべてこのグループに入れた。但し、極く小片に加工を加えたもの（チップの加工品）については、他のものと一応分けて取り上げた。即ち、この種の小さな石器は縄文時代に於いては殆ど見受けられない様であることから、弥生時代の石器に於ける一つの特徴を成すものと考えら

第51表 弥生時代野穴住居址出土石器 器種別量一覽

法 益	器 種	石 鏃				石 錐		石 斧		スクレーパー		不定形		石 斧		磨 石		刮 石		研 石	石・骨	コ 骨	その他
		有茎	無茎	鏡形	楕形	不明	定形	不定形	台形	円形	台形	円形	チップ	他	打製	磨製	磨石のみ	磨石併用	刮石のみ				
長さ (cm)	最小値	2.4	1.9	5.4	-	-	3.8	7.3	6.9	-	1.4	1.8	-	4.8	4.4	5.0	-	15.9	28.1	2.5	3.4		
	最大値	3.5	2.1	6.7	-	-	6.7	8.5	7.8	-	1.9	8.1	-	14.8	16.2	11.9	-	36.7	71.4	6.7	12.3		
	平均値	2.96	2.0	5.97	3.4	-	3.5	4.25	7.9	6.96	2.2	1.7	4.36	11.1	8.36	10.19	8.92	(6.7)	17.36	39.75	4.86	6.25	
幅 (cm)	最小値	0.9	1.1	2.9	-	-	1.5	5.2	3.9	-	1.2	1.6	-	1.9	3.5	4.5	-	6.5	17.2	3.4	3.2		
	最大値	1.7	1.4	2.4	-	-	3.9	5.2	4.4	-	1.9	6.2	-	4.8	12.0	18.3	-	22.9	18.4	4.7	7.8		
	平均値	1.16	1.25	2.27	4.0	-	2.1	3.2	5.2	4.15	3.0	1.54	3.26	5.5	3.5	7.12	7.53	5.8	8.25	17.8	3.69	4.92	
厚さ (cm)	最小値	0.3	0.2	0.6	-	-	0.7	1.6	1.1	-	0.12	0.5	-	0.6	0.9	2.4	-	2.4	3.8	2.0	1.7		
	最大値	0.7	0.3	0.9	-	-	0.9	2.7	1.2	-	0.4	2.0	-	4.1	9.8	6.2	-	8.2	18.6	3.7	5.9		
	平均値	0.44	0.2	0.72	0.6	-	0.6	0.8	2.15	1.2	0.9	0.34	1.32	2.2	2.7	5.89	4.98	5.8	5.0	6.65	2.64	2.96	
重量 (g)	最小値	0.4	0.4	7.8	-	-	4.4	55.2	41.1	-	0.4	2.2	-	8.2	19.5	79.5	-	470.0	2380.0	25.3	18.4		
	最大値	2.7	0.7	12.4	-	-	7.3	85.6	45.0	-	1.7	16.8	-	471.0	1254.0	1135.0	-	2920.0	4990.0	55.6	536.9		
	平均値	1.26	0.55	9.6	5.8	-	2.5	5.85	70.4	43.05	0.4	8.98	18.79	214.0	356.79	279.99	582.4	(785.0)	1266.0	3341.0	57.4	145.9	

※石鏃を除き()内厚値は含まない。

れたからである。

チップの加工品は全部で4点であるが、石質的には硬質頁岩・珪質頁岩・黒曜石の3種が使われているが、黒曜石は他には使われていない。4点の法量の平均値を見てもわかる通り（長さ1.7cm・幅1.54cm・厚さ0.34cm・重さ0.98g）非常に小形である。技法的には、器面調整は成されず剥離面をそのまま用いて刃部だけに加工を加えている。刃部は片刃・両刃の相方がある。

他の不定形石器は全部で26点にのぼるが、形状・技法・法量・石質共に実に様々である。形状的には比較的握りの良いものも数点あるが、定形化出来ず、技法的にも割合丹念に行っているものから稚拙な刃部を若干持つだけのものまで種々ある。但し、石質に関しては硬質頁岩・珪質頁岩・メノウ・玉髓の4種が見られるのみで、内、硬質頁岩が19点と最も多い。

8. 石斧：打製及び磨製の2種に分けた。打製のもは2点、磨製のもは8点出土している。打製のもは硬質頁岩・頁岩が使われており、大きな剥離技法を用いて仕上げている。但し、2点中1点は基端部片であるから、あまり参考にはならない。

磨製石斧の8点中には小形のもの2点・太型蛤刃石斧2点が含まれているが、すべてに刃こぼれ或いは再研磨痕が残り、良く使われていたことがわかる。石質としては、砂岩・硬砂岩・プロピライト・緑色凝灰岩・角閃岩・珪質泥岩の6種類が用いられている。尚、太型蛤刃石斧2点中1点は床面出土の完形品であり、その資料的価値は貴重である。

第52表 弥生時代竪穴住居址出土石器 器種別石質一覧

部 種	石 鏃		石 錐		石 鏃		スチレー		不定形		石 斧		磨 石		凹 石		鏡石		コ ア		計 数	合 計	
	有茎	無茎	板形	壺形	不明	定形	不定形	心付	心付	心付	心付	心付	心付	心付	心付	心付	心付	心付	心付	心付			心付
硬質頁岩	4	2	1	1	3		2	2	2		1	19	1							4	6	2	49
珪質頁岩	1		2			1				1	1	4											10
頁 岩												1								4			5
チャート	1																						1
メノウ											1												1
黒曜石											2												2
珪質凝灰岩	1																						1
玉 髓	1											2									1		4
砂 岩												1	1	1									3
硬砂岩												1											1
プロピライト												1											1
緑色凝灰岩												1											1
角閃岩												1											1
珪質泥岩												3											3
緑石製山鏡													6	3			2	3					12
石英灰山鏡																	1						1
安山岩													3				1	1					5
灰山岩質漆器													2			1		1					4

h. 磨石：敲打痕の有無に依って2種に分けた。即ち、磨石専用として使われたもの11点、敲打的にも使われたもの4点の合計15点である。これらは比較的良く使い込まれたものが多く、法量的にも長さ10.19cm・幅7.33cm・厚さ5.08cm・重さ1125.0g（磨石専用のものの平均値）と、比較的使い易い大きさとなっている。石質で見ると、砂岩・輝石安山岩・安山岩・安山岩質溶岩の4種があるが、輝石安山岩が8点と最も多い。

i. 凹石：凹石専用のものと、磨石として用いたものの2種に分けたが、弥生時代の住居内からは後者が1点出土しているに過ぎない。（前者は、遺構外出土のものに見られる。）安山岩質溶岩を用いたもので、表裏両面に凹部がある。

j. 砥石：全部で4点の出土であるが、比較的良く使われている。縦長のものが多く、表裏2面の他に側面を用いているものも多い。石質は、輝石安山岩・石英安山岩・安山岩の3種が見られる。

k. 石皿・台石：分類上は両者に分けたが、表中（第50～52表）に於いては一括した。全部で4点の出土であり、輝石安山岩・安山岩・安山岩質溶岩が用いられている。比較的大きめのものが多い。（平均値で長さ19.75cm・幅17.8cm・厚さ6.85cm・重さ3940.0g）

l. コア：使用痕の有無に依って、2者に分けた。即ち、コア自体が8点・コアに敲打痕或いは刃部を持つもの6点の計14点の出土である。石質では、硬質頁岩9点・頁岩4点・玉髓1点の3種が見られる。法量的にコアとコアスクレーパーの類を比較すると、後者の方がやや大きいことがわかる。（前者の平均値は長さ4.86cm・幅3.69cm・厚さ2.94cm・重さ57.4g、後者は長さ6.25cm・幅4.92cm・厚さ2.98cm・重さ145.8gである。）

m. その他：1点は、VII Jj 住床面出土の接合資料であり、もう1点はVII Ja-1 住出土の器種不明のものである。前者の接合資料は破片11点からなるもので、剥片製作過程が復元出来たものであるが、詳細は事実記載の項を参照されたい。

尚、両者共に、硬質頁岩製である。

③結論

以上、弥生時代竪穴住居址出土の石器計105点について、各器種毎に若干の検討を加えて来た訳であるが、これらのことから弥生時代に属する石器についてある程度まとめて見たい。

a. …器種は、石鏃・石匙・石錐・石ペラ・スクレーパー（定形化出来る剥片石器）・不定形石器・石弁・磨石・凹石・砥石・石皿・台石の12種見られ、更にそれぞれが細分可能である。

第53表 3 区出土石器一覽

() 現存値。

山上地点	層位	種 類	測 量				特 徴	石 質	備 考	現存値	写真 No.
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)					
Ⅴb法		不定形	1.7	1.25	0.35	0.4	片割、チップの加工品	硬質頁岩		8-36	21-36
Ⅴ		Ⅱ	1.9	1.8	0.4	1.4	Ⅱ	黒曜石		8-37	21-37
Ⅴ	2 層	Ⅱ	1.8	1.9	0.4	1.7	Ⅱ	Ⅱ		8-38	21-38
Ⅴ	床 面	彫影石匙	5.8	2.0	0.6	7.9	片面調整。	硬質頁岩		8-39	21-39
Ⅴ		Ⅱ	5.4	2.4	0.7	8.6	Ⅱ	硬質頁岩		8-40	21-40
Ⅴ	3 層	石 匙	(3.7)	1.6	0.8	(4.1)	両端欠損、両面加工。	硬質頁岩		8-41	21-41
Ⅴ		石 匙	(1.4)	(1.7)	(0.4)	(0.8)	先端部欠、両面加工。	Ⅱ		8-42	21-42
Ⅴ	床 面	不定形	4.8	3.4	0.9	11.8	両方。	Ⅱ		8-43	21-43
Ⅴ	1 層	Ⅱ	8.1	5.6	1.0	47.3	バレル管に刃。	硬質頁岩		8-44	21-44
Ⅴ	床 面	有部ヌツ レナイ	6.9	3.9	1.3	43.1	両端・下端に片刃。	硬質頁岩	有部ヌツは硬質工 の石質	8-45	21-45
Ⅴ		不定形	2.8	3.0	0.9	7.0	片面調整。	Ⅱ		8-46	21-46
Ⅴ		Ⅱ	(4.5)	3.3	0.9	(15.5)	上部尖突の下端部 に片刃	Ⅱ	石匙片の可能性 もある	8-47	21-47
Ⅴ		コ ア	6.3	3.6	1.7	65.2		頁 岩		8-48	21-48
Ⅴ	1 層	Ⅱ	3.6	3.2	1.8	18.4	一面に凸下の刃。	玉 髓		8-49	21-49
Ⅴ	3 層	磨製石匙	8.9	4.1	2.2	113.0	両面あまりはつきり せず。刃にばれあり。	砂 岩		8-50	21-50
Ⅴ	3 層	磨 石	4.4	3.5	0.9	19.6	三角形で薄手。	褐色凝灰岩	片割品の可能性 もある	8-51	21-51
Ⅴ		Ⅱ	11.9	8.6	5.9	83.0	磨打痕有り。	輝石安山岩		9-52	21-52
Ⅴ		Ⅱ	8.3	7.3	3.9	445.0	使用痕顯著。	Ⅱ		9-53	21-53
Ⅴ	床面直上	Ⅱ	(4.9)	7.5	4.4	(341.0)	半分欠失	Ⅱ		9-54	21-54
Ⅴ	床面直上	砥 石	17.8	8.0	4.5	798.0	使用痕深き。	石炭安山岩		9-55	21-55
Ⅴb位	3 層	不定形	6.8	3.7	2.0	58.6	作りは荒して鈍。	硬質頁岩		12-16	21-16
Ⅴ	床 面	台 石	(12.6)	(8.9)	3.8	(348.9)	一部欠損。	安 山 岩		12-17	21-17
Ⅴb法	2 層	不定形	1.4	1.2	0.4	0.4	チップの加工品。	硬質頁岩		16-4	21-4
Ⅴ	1 層	Ⅱ	4.3	5.2	1.6	36.3	片面自然産。	Ⅱ		16-9	21-9
Ⅴ	床面直上	コ ア	4.7	3.4	3.6	37.8		Ⅱ		18-10	21-10
Ⅴ		凹 石	(6.7)	5.8	5.6	(85.9)	両面に凹み、磨痕有。	安山岩質凝灰岩		18-11	21-11
Ⅴ		磨 石	9.8	10.5	6.6	952.0	一面のみ使用。	輝石安山岩		18-12	21-12
Ⅴ		磨 石	30.7	12.9	8.2	2939.0	側面の使用。	Ⅱ	有石の可能性も有	18-13	21-13
Ⅴb位	埋 土	磨 石	8.0	6.7	4.2	315.0	一部に磨打痕。	Ⅱ		25-27	21-27
Ⅴb位	4 層	凸基有磨石	3.5	1.9	0.3	1.0	葉形に近い。	硬質頁岩		28-12	21-12
Ⅴ	3 層	Ⅱ	(4.0)	1.3	0.7	(2.7)	葉形先端欠損。	Ⅱ		28-13	21-13
Ⅴ	床面直上	Ⅱ	(2.9)	0.9	0.35	(1.6)	両端部欠損。先端部 も欠損	チャート		28-14	21-14
Ⅴ		有部ヌツ レナイ	7.6	4.4	1.1	45.0	両端・下端に片刃。 両方	硬質頁岩	便宜上の呼称。	28-15	21-15
Ⅴ	4 層	不定形	4.6	2.3	0.8	9.2	片面調整。	Ⅱ		28-16	21-16
Ⅴ	床面直上	不定形	5.3	3.0	0.7	13.7	片面調整。	硬質頁岩		28-17	21-17
Ⅴ	3 層	コ ア	2.5	3.6	2.0	25.3		Ⅱ		28-18	21-18
Ⅴ	4 層	コアヌツ レナイ	3.8	4.3	2.6	35.6	刃に刃を持つ。	Ⅱ		28-19	21-19
Ⅴ	3 層	石 ベラ	8.5	5.2	2.7	85.6	両側・下端に刃。	Ⅱ		28-20	21-20
Ⅴ	4 層	磨製石匙	(3.2)	(4.1)	(1.3)	(16.2)	刃先部がこぼれ有。	硬 砂 岩		28-21	21-21
Ⅴ		砥 石	17.2	6.9	5.6	1036.0	長く使われている。	輝石安山岩		28-22	21-22
Ⅴ	床面直上	煤合資料				515.0	11片からなる。	硬質頁岩		28-23	—
ⅤJa-1位		不定形	4.4	1.6	0.8	4.4	両面に片刃。	硬質頁岩		30-12	28-12
Ⅴ		石 匙	(1.6)	2.2	0.4	1.4	両端部欠損。	Ⅱ		33-13	28-13
Ⅴ		玉製磨製石匙	(8.4)	3.9	2.7	(34.6)	基部・刃先若干欠損。	プロセライト		33-14	28-14
Ⅴ		不 明	4.9	3.2	1.8	21.0	有孔。	硬質頁岩		33-15	28-15
ⅤJa-2位	NSベルト	不定形	2.5	3.3	0.7	3.1	一面にのみ刃。	硬質頁岩		36-7	28-7
Ⅴb位	床 面	有部ヌツ レナイ	3.2	3.8	0.9	8.4	両面調整。	Ⅱ		42-19	30-19
Ⅴ	2 層	不定形	2.1	3.2	0.7	7.8	一部片刃。	Ⅱ		42-20	30-20

Ⅷ上住	床面直上	コ	ア	6.7	3.0	2.9	54.1		頁 岩	42-21	30-21	
#	#	磨	石	16.2	12.0	9.8	1250.0		安山岩質頁岩	42-22	30-22	
#	1 階	石	#	8.2	6.8	5.1	288.0		#	42-23	30-23	
#	2 階	白	石 (25.0)	(20.2)	6.5	(2600.0)		片面の使用。	輝石安山岩	42-24	30-24	
ⅧJe-1住	2 階	不	定 形	4.3	3.9	1.3	11.6	両縁に中層な方。	硬質頁岩	43-7	31-7	
#	1 階	コ	ア	5.3	4.0	1.9	49.0	厚が100mm程度あり。	#	43-8	31-8	
ⅧJe-2住	床面直上	磨	石	9.8	3.6	2.6	148.0		安 山 岩	44-9	31-9	
ⅧJf-1住	3 階	凸	角形基礎	2.7	1.9	0.6	9.9	鋭利。	硬質凝灰岩	49-27	32-27	
#	4 階	平	基有基礎 (3.0)	1.2	0.4	1.2	先端部欠損。	硬質頁岩	49-28	32-28		
#	3 階	凸	角形基礎	1.9	1.4	0.3	0.4	両縁部に鋭い段。	硬質頁岩	49-29	32-29	
#	2 階	不	定 形	1.9	2.2	0.6	2.2	丸縁部、1角部。	メ / ウ	49-30	32-30	
#	3 階	磨	石 楕	3.8	1.5	0.9	4.4	不整形、一端を加工。	硬質頁岩	49-31	32-31	
#	4 階	不	定 形	4.6	4.4	1.4	25.8	一部に層状な方。	#	49-32	32-32	
#	3 階	コ	ア	4.2	3.5	3.5	63.4		#	49-33	32-33	
#	4 階	不	定 形	8.0	3.5	0.7	19.4		#	49-34	32-34	
#	控	小	形基礎石	5.0	1.9	0.6	9.2	刃部凹み。	硬質頁岩	49-35	32-35	
#	#	#	#	4.8	1.9	0.8	11.8	#	#	49-36	32-36	
#	2 階	磨	石 卵	(7.5)	4.1	2.4	(123.0)	基礎欠損。刃に段。	角 閃 岩	49-37	32-37	
#	先	西	入段状石	14.8	4.8	4.1	471.0	尖平方二枚あり。	緑色凝灰岩	49-38	32-38	
ⅧJf-2住	3 階	凸	角形基礎	2.6	1.1	0.3	0.8	鋭平、先端欠損。	硬質頁岩	51-11	33-11	
#	4 階	磨	石 楕	3.5	2.1	0.6	2.6	両面加工。	硬質頁岩	51-12	33-12	
#	3 階	コ	ア	5.4	3.5	2.5	47.0	一部に層状な方。	硬質頁岩	51-13	33-13	
#	4 階	#	#	4.7	5.7	1.7	54.8	#	#	51-14	33-14	
#	#	打	製 打 石	11.1	5.3	3.2	234.0	大きな割傷あり。	#	51-15	33-15	
ⅧJg-1住	3 階	コ	ア	3.7	3.6	2.4	36.8		#	53-7	33-7	
#	床	面	不 定 形	3.0	2.6	0.9	7.5		玉 髓。	53-8	33-8	
#	軒	内	#	4.0	2.3	0.9	8.6	片方。	#	53-9	33-9	
ⅧJg-2住	床	面	#	4.2	3.1	0.9	10.0	片方。	硬質頁岩	55-6	34-6	
ⅧJh住	床面直上	凸	角形基礎	2.4	0.9	0.3	0.4	鋭利。	玉 髓	63-26	36-26	
#	#	不	定 形	2.5	1.7	0.6	3.2	片面は自然面。	硬質頁岩	63-27	36-27	
#	#	打	ベ 石	7.3	6.2	1.6	55.2	厚は6cm程度。	#	63-28	36-28	
#	#	不	定 形	4.0	2.9	0.9	10.0	両側・片面に層状な方。	#	63-29	36-29	
#	#	#	#	4.9	2.8	0.6	8.8	層状な方。	#	63-40	36-40	
#	#	コ	ア	5.7	4.1	3.7	95.6		頁 岩	63-41	36-41	
#	#	#	#	5.1	4.7	3.3	81.0		#	63-42	36-42	
#	#	#	#	12.3	7.3	3.9	536.0	刃作製的な割傷あり。	硬質頁岩	63-43	36-43	
#	床	面	磨	石	15.6	6.4	3.9	613.0	良く使われている。	安 山 岩	63-44	36-44
#	#	凸	石	18.1	17.2	10.6	2080.0	両面両面使用。	安山岩質頁岩	63-45	36-45	
ⅧJk-1住	1 階	磨	石 楕	3.4	4.0	0.6	5.6	薄手。両面加工。	硬質頁岩	67-12	37-12	
#	3 階	不	定 形	4.4	4.7	1.3	29.0	裏面・下縁に丸みあり。	#	67-13	37-13	
#	#	コ	ア	8.3	5.7	4.0	183.0	一部に割打痕あり。	#	67-14	37-14	
ⅧJk-2住	床面直上	磨	石	0.5	7.4	3.6	372.0	使用痕あり。	輝石安山岩	71-12	38-12	
#	2 階	#	#	9.8	8.1	8.0	950.0	凸部の不具合が表についている。	安 山 岩	71-13	38-13	
#	控	面	台	21.4	18.4	6.5	4900.0	両面・使用痕あり。	輝石安山岩	71-14	38-14	
ⅧJl住	2 階	凸	角形基礎	2.7	1.7	0.6	2.1	先端の一部に割傷。	硬質頁岩	79-35	41-35	
#	4 階	磨	石 楕	6.7	2.4	0.9	13.4	一部は方角、他は鋭角。	硬質頁岩	79-37	41-37	
#	3 階	不	定 形	3.2	2.6	0.9	8.8	刃部丁寧な作り。	硬質頁岩	79-38	41-38	
#	#	#	#	1.8	2.3	0.6	2.2	片方。	#	79-39	41-39	
#	#	#	#	5.8	5.3	1.9	47.5	片方。	#	79-40	41-40	
#	2 階	打	製 打 石	(4.7)	4.6	3.5	(66.5)	基部片。	頁 岩	79-41	41-41	
#	3 階	不	定 形	5.4	3.5	1.6	35.2	傘状状の方。	硬質頁岩	79-42	41-42	
#	2 階	磨	石	(8.2)	7.5	5.1	(425.0)	1部欠損。	輝石安山岩	79-43	41-43	

VIJ / 1 生	2	磨	石	5.0	4.5	2.4	79.6	部に磨打痕。	砂	岩	79-44	41-44	
VIJm / 1	床	砥石	石	4.7	3.9	0.7	7.3	不規則。磨削の跡に一部に欠け。	硬質頁岩	#	83-9	49-9	
#	#	磨製石片	(6.8)	(4.7)	(2.0)			基部欠損。	硬質頁岩	#	81-10	42-10	
VIJn-1 生	1	磨	#	(9.7)	4.4	3.5	(232.0)	欠損。磨削の跡。	硬質頁岩	#	80-6	49-5	
VIJn-2 生	#	砥石	石	(12.2)	5.7	2.5	(235.0)		安山岩	#	86-11	45-11	
#	#	磨石	#	11.4	9.1	6.9	937.0	欠けられている。	#	#	86-11	49-12	
VIJo 生	II	磨	#	16.8	10.3	6.2	1125.0	欠けられている。一部に磨打痕。	輝石安山岩	#	90-11	44-11	
VIJp-1 生	III	磨	磨製石片	(6.0)	4.3	2.4	(48.0)	基部欠損。	角閃岩	#	93-11	45-13	
VIK 生	3	磨	磨製石片	2.1	1.1	0.3	0.7	鋭利。	硬質頁岩	#	100-14	46-14	
#	4	磨	不定形	5.0	2.8	0.8	9.1	片刃。	硬質頁岩	#	100-19	46-19	
#	3	磨	#	2.9	3.8	0.7	6.4	片刃。	硬質頁岩	#	100-20	46-20	
#	1	磨	#	6.7	6.2	1.6	32.6	片刃。一部肉欠。	硬質頁岩	#	100-21	46-21	
#	#	磨石	#	13.8	6.6	3.6	470.0	使用痕跡。	安山岩	#	105-22	46-22	
VIJ / 磨石	配石	石	刀	23.9	4.8	2.4	347.0	刃をもち持つ。	硬質頁岩	#	111-2	49-2	
#	#	磨石	#	13.2	8.9	8.2	1310.0	一部に磨打痕。	輝石安山岩	#	111-1	49-1	
VIJo 2	II	磨	磨製石片	2.5	1.9	0.7	2.3	先端部欠損。	玉	硬質頁岩	プロセライト	117-1	76-1
VIJp	II	磨	磨製石片	2.6	1.4	0.5	1.2	基部部欠損。	チャート	#	117-2	76-2	
VIJ / 4	II	磨	磨	4.6	1.5	0.9	3.7	不定形。	硬質頁岩	#	117-3	76-3	
VIJp (ベ)	III	磨	磨製石片	(4.5)	2.9	0.6	(7.9)	ツラツラ面欠損。片面磨削。	#	#	117-4	76-4	
VIJ / 4	II	磨	#	5.3	1.7	0.7	6.0	磨削片痕跡。	#	#	117-5	76-5	
VIJp 2	II	磨	磨・磨	2.8	1.5	0.4	1.9	磨削と全面に刃。	玉	硬質頁岩	#	117-6	76-6
VIJh	#	#	#	2.2	2.1	0.7	2.4	片刃	#	#	117-7	76-7	
#	#	#	#	3.0	2.8	0.8	5.5	肉欠	#	#	117-8	76-8	
#	1	磨	#	13.0	(1.9)	(0.5)	(2.2)	肉欠	#	#	117-9	76-9	
VIJh 3	#	磨製石片	#	6.7	4.2	3.0	143.0	断面円形。	安山岩	#	117-10	76-10	
VIJp (ベ)	II	磨	#	(13.1)	6.0	3.1	(353.0)	基部欠損。	プロセライト	#	117-11	76-11	
VIJh 4	II	磨	#	(6.8)	5.1	2.7	(196.0)	基部欠損。刃部に磨削。	安山岩	#	117-12	76-12	
VIJ / 3	II	磨	磨石	11.9	10.2	9.5	1740.0	欠けられている。	輝石安山岩	#	118-12	76-13	
VIJh 4	#	#	#	10.1	7.9	5.1	626.0	#	安山岩	#	118-14	76-14	
VIJ / 2	#	#	#	6.4	5.45	3.9	390.0	#	輝石安山岩	#	118-15	76-15	
VIJp 1	I	磨	#	7.4	6.3	4.1	392.0	#	#	#	118-16	76-16	
VIJ / 3	II	磨	#	5.2	5.7	6.1	213.0	一面使用。No.18とセット。欠けられている。No.17とセット。	硬質頁岩	#	118-17	76-17	
#	#	石	皿	(16.3)	(16.4)	6.6	(1310.0)		硬質頁岩	#	118-18	76-18	
VIK 1	II	磨	磨製石片	2.5	1.25	1.1	0.4	鋭利。	玉	硬質頁岩	プロセライト	135-1	76-19
VIK 3	II	磨	磨製石片	(2.2)	(1.5)	0.6	(1.2)	基部欠損。	#	#	135-2	76-20	
VIK 4	II	磨	磨製石片	5.5	2.7	0.75	12.6	片面磨削。	硬質頁岩	#	135-3	76-21	
VIK 3	I	磨	磨製石片	5.6	2.3	0.7	9.4	片面磨削。	硬質頁岩	#	135-4	76-22	
VIKe 3	II	磨	#	6.3	3.8	0.7	16.0	#	硬質頁岩	#	135-5	76-24	
VIKm 1	#	#	#	6.2	2.9	1.6	17.5	#	#	#	135-6	76-23	
VIK 3	#	#	#	5.8	2.4	1.05	12.0	物と片面磨削。	#	#	135-7	76-28	
VIK 4	I b	磨	磨製石片	5.3	6.95	0.85	27.7	自然面が残る。	#	#	135-8	76-29	
VIK 2	II	磨	磨	2.5	6.3	1.1	20.4	物と片面磨削。	#	#	135-9	76-25	
VIK 3	#	#	#	6.2	3.5	1.2	28.2	両側・下縁に刃。	#	#	135-10	76-26	
VIKe 3	#	#	#	8.6	3.1	1.6	29.5	先端部欠損。	玉	硬質頁岩	#	135-11	76-27
VIKm	衣	土	磨製石片	(6.0)	4.4	2.4	(139.3)	刃部欠損。	硬質頁岩	#	135-12	77-35	
VIK 1	II	磨	#	(7.7)	4.0	2.1	107.4	基部欠損。おこぼれ。	プロセライト	#	135-13	77-34	
VIK 3	II	磨	磨	(6.8)	(6.6)	1.7	(32.4)	石製の。	磨石	#	135-14	77-30	
VIJk 1	III	磨	磨石	12.6	8.4	7.9	1350.0	磨石としても使用。	輝石安山岩	#	135-15	77-32	
VIK 2	II	磨	磨石	6.1	6.1	4.5	285.0	欠けられている。	岩	硬質頁岩	#	136-16	77-31
VIK 4	表	土	#	12.5	8.7	4.6	730.0	#	角閃岩	#	136-17	77-33	
VIJo 4	I	磨	磨製石片	3.95	1.1	0.45	1.3	鋭利。	硬質頁岩	#	140-1	77-48	
VIJo 2	#	#	#	3.3	1.0	0.4	0.9	基部欠損。フスマアノ上付。	硬質頁岩	#	140-2	77-49	

VIJc 4		平形石英砂	(3.2)	1.2	0.4	(1.5)	先端欠損。	硬質頁岩	160-3	77-47
3区	赤 採	凸輪石英砂	(2.9)	1.6	0.8	(2.2)	菱形に近い。	硬質頁岩	160-4	77-45
VIId 1	日 磨	#	2.7	1.1	0.6	1.1	厚味あり。	玉 髓	160-5	77-47
VIId 3	赤 採	#	2.6	1.15	0.4	0.9	基部欠損。アスファルト付着。	硬質頁岩	160-6	77-38
VIJo 3	I 磨	#	(2.0)	1.0	0.4	0.7	基部欠損。	硬質頁岩	160-7	77-36
3区	赤 採	#	2.5	1.3	0.3	1.0	菱形に近い。	#	160-8	77-40
VIJc 4	I 磨	#	2.3	1.25	0.2	(0.9)	基部欠損。やや重む。	#	160-9	77-41
VIJc	日 磨	#	2.0	1.25	0.5	0.6	基部欠損。アスファルト付着。	#	160-10	77-42
VIJg 4	日 磨	#	2.1	1.3	0.5	1.5	基部が異形。全体に重。	玉 髓	160-11	77-51
VIJo 4	I 磨	無定石砂	2.9	1.6	0.6	2.3	形がやや不整。	チャート	160-12	77-43
VIJm 4	日 磨	平形無定砂	2.1	1.85	0.7	3.7	やや不整。	玉 髓	160-13	77-49
VIJc	赤 採	#	2.1	1.8	0.4	1.1	薄手。	硬質頁岩	160-14	77-50
3区	赤 採	凸輪無定砂	3.6	1.9	0.3	1.0	菱形に近い。	#	160-15	77-44
VIJ 3		凸輪石英砂	(4.0)	1.7	0.5	(3.1)	先端若干欠損。	硬質頁岩	160-16	77-46
VIJK 1	赤 土 磨	赤 砂	8.9	2.8	2.1	44.2	基部に重。	硬質頁岩	160-17	77-55
VIJo 2	日 磨	石 磨	(5.9)	1.8	0.9	(7.0)	先端欠損。	#	160-18	77-54
VIJ 3	I 磨	#	3.9	1.65	0.45	2.2	平潤。尖形。	#	160-19	77-53
VIJd	赤 土	#	(3.45)	0.9	0.7	(3.0)	上部欠損。	硬質頁岩	160-20	77-52
VIJ		赤砂石磨	5.4	2.7	0.5	9.3	丁寧な作り。	#	160-21	77-57
VIJo 2	日 磨	#	5.6	4.0	0.9	17.3	上部に快り有。	硬質頁岩	160-22	77-56
VIJd 3	3 磨	#	(4.1)	1.8	0.5	(4.4)	先端欠損。	硬質頁岩	160-23	77-58
VIJK 1	日 磨	凸輪石磨	3.5	6.6	1.6	23.9	両刃。刀形。	硬質頁岩	160-24	77-50
VIJo 4	#	磨 砂	7.4	3.6	1.5	44.8	粒と片重調整。	玉 髓	160-25	78-64
VIJo		凸輪(磨)砂	4.0	3.6	1.1	15.7	片刃。	硬質頁岩	160-26	78-65
3区	赤 採	磨 砂	2.2	1.4	0.3	1.1	一部欠損。	#	160-27	78-66
VIJo	I b 磨	#	2.8	3.3	1.4	8.5	角度のある両刃。	塊状燧石	160-28	78-63
VIJH	I 磨	磨製石片	(9.4)	5.1	1.7	151.3	基部欠損。非調整砂。	輝石燧石	160-29	78-67
VIJo 3	日 磨	#	(10.5)	4.2	2.7	(26.0)	刃部欠損。	燧 石	160-30	78-68
	#	#	(9.5)	3.9	2.5	(134.6)	刃こぼれ有。	砂 岩	160-31	78-69
VIJm	赤 土	石 磨	7.9	5.4	1.8	23.4	片割自然形。	頁 岩	160-32	78-62
VIJ 4	日 磨	#	5.3	1.7	0.7	6.0	片刃。	硬質頁岩	160-33	78-61
VIJo	赤 土	打製石片	11.4	5.6	2.1	133.0	使用痕有。	頁 岩	160-34	78-60
VIJe	#	石	10.8	9.5	6.8	708.0	調整痕。磨けして自然形。	安山岩質燧石	160-35	78-77
VIJo	#	#	9.1	9.0	3.3	210.0	石粒の破片を認め。	#	160-36	78-80
VIJ	#	#	8.6	7.7	5.3	396.0	磨石片としても使用している。	#	160-37	78-78
VIJ 2	日 磨	磨 石	10.1	6.5	6.6	357.0	磨平。	輝石燧石	160-38	78-75
VIJe	赤 土	#	7.2	5.6	5.8	300.0	使用痕が顕著。	#	160-39	78-74
3区	赤 採	#	9.0	6.95	3.95	383.0	良く使われている。	北浦門燧石	160-40	78-79
VIJg	赤 土	#	7.7	6.9	2.5	192.0	薄手。	輝石燧石	160-41	78-73
VIJh 1		有 石	18.0	17.5	3.5	1380.0	調整、薄手。使用痕顕著。	安 山 岩	160-42	78-72
VIJ 2	日 磨	磨 石	10.4	7.7	5.2	597.0	良く使われている。	輝石燧石	160-43	78-76
VIJo 4	#	#	13.7	12.2	9.1	2385.0	使用痕顕著。	安 山 岩	160-44	78-71
#	#	石 磨	19.2	18.8	11.4	2290.0	良く使われている。	安山岩質燧石	160-45	78-70

- b. …数量的には、武器としての石鏃は比較的少なく、ナイフ的戒いは播・削器的な石匙・スクレーパー・不定形石器の数が多くなっている。即ち、105点中前者は10点（9.52%）であり、後者は計40点（47.6%）となっている。
- c. …技法的には、剥片石器に於いて、比較的雑な作りのものが目立つ。
- d. …石質的には、剥片石器では硬質で致密なものを用い、（硬質頁岩が最も多く、コアも含めて49点にものぼる。）磨石・凹石・砥石・石皿・台石では安山岩系のもが使われている。また、磨製石斧に関しては、比較的独自の他器種ではあまり使われない石材を用いている。（プロピライト・珪質泥岩等）
- e. …不定形石器が多い点・チップも加工して使用している点・コアが比較的小さい点などから、石材はなるべく無駄にしない利用の仕方をしていたものと思われる。
- f. …弥生時代に属する石器の特徴的な器種としては、太型蛤刃石斧及び、チップに加工を施した石器・台形状を呈するスクレーパーが挙げられると思われる。

3 竪穴住居址について

縄文時代の竪穴住居址について

当区において検出された10棟の竪穴住居址には、明確な時期決定資料になり得る遺物を欠くものや、VII Jp-1・2・3住居址のように位置が極めて近接しているものもあり、10棟全てが1時期のものとは考えられない。しかし、遺跡全体の出土遺物、時期を決定し得る住居址との比較等から、いずれも縄文時代後期前葉の十腰内I式に伴うものと考えられる。住居址の立地は、当区の東側に偏在する特徴が認められ、しかも2～3棟の住居址が近接して位置する傾向が認められる。

弥生時代竪穴住居址の構成と時期 (第174図)

既述のように、当区出土の弥生式土器群は3類に分類される。ここでは、分類された土器群とそれを伴う18棟の住居址の前後関係や構成状況と特徴についてまとめてみたい。

〔第1期〕

第1期を構成する住居址は、1類土器が出土する8棟の住居址群である。当区東側の北寄りと中央部にほぼかたまつて位置しており、超大型・大型住居址と中型・小型の住居址によって構成される。

超大型住居址……………VII Jf-1住

大型住居址……………VII Je-2・VII Jf-2・VII Ki住

中型住居址……………VII Jo・VII Jk-1・VII JI住

小型住居址……………VII Jk-2住

以上8棟の住居址のうち6棟において重複関係が認められ、しかも超大型と大型どうしと中型と小型どうしという大別2グループにおいて重複するところから、規模の大きい住居址と中・小規模の住居址との組み合わせによって構成されたものと考えられる。軽米町馬場野II遺跡にみられる同一住居址の増築という重複は認められず、いずれも近接地点に再度構築する方法がとられている。I期を構成する住居址群の特徴は柱穴配置に認められる。配置が明確な6棟のうち5棟について、いずれも壁沿いに配置される。規模は各住居址毎に均一な傾向が認められ、ほぼ等間隔に配置されている。VII Ki住居址のように、中央寄りに主柱穴をもつタイプも存在することから一概には断定できないが、I期を代表する構造上の一特徴として、柱穴の壁沿い配置が考えられる。構築年代は弥生時代中期前半(谷起島式・山王III層式)頃と推定される。

〔第II期〕

第II期を構成する住居址は、2類土器が出土する7棟の住居址群である。I期に比較し、当区全域に広く展開する立地傾向が認められる。全般にI期よりも規模の大きい住居址によって構成される。

超大型住居址……………VII Ji・VII Ja-1・VII Ia住

大型住居址……………VII Jg-1・VII Ij・VII Jc住

中型住居址……………VII Jm住

各住居址の位置関係は、一部に近接するものが認められるものの、総じて散在する状況を示

す。Ⅱ期を構成する住居址群の特徴はⅠ期同様に柱穴配置に認められる。Ⅶ Jg - Ⅰ住(不明)を除き、いずれも壁沿いと中央寄りに配置される。しかも、中央寄りに配置される柱穴は壁沿いに比較し大型化する傾向が認められ、主柱穴と想定し得る。このことは柱の機能分化とも考えられ、第Ⅱ期を代表する構造上の最大特徴と考えられる。構築年代は弥生時代中期後半(橋本式・樹形両式)頃と推定される。

〔第Ⅲ期〕

第Ⅲ期を構成する住居址は、3類土器が出土する3棟の住居址群である。当区西側の北寄りにかたまって位置している。Ⅰ・Ⅱ期に比較し、規模の小さい住居址によって構成される。

中型住居址……………Ⅶ Ic 住

小型住居址……………Ⅶ Ib・Ⅶ If 住

Ⅶ Ib・Ⅶ Ic 住居址は、あまりにも近接することから同一時期内における僅かな時間差が考えられる。しかし、遺構・遺物からは明確に特定できなかつた。第Ⅲ期を構成する住居址の特徴もⅠ・Ⅱ期同様柱穴配置に認められる。いずれも壁沿いに配置され、Ⅰ期同様の配置形となる。構築年代は弥生時代後期(常盤式・天王山式)頃と推定される。

まとめ

当区における集落跡についてまとめると次のようになる。

1. 最初に集落が形成されたのは縄文時代後期前葉(十腰内Ⅰ式)の頃である。同時代の集落は、東側の区域にまとまった形で形成された。
2. 以後一時中断した後、再び集落が形成されるのは弥生時代中期前半の頃である。同時代の集落はⅢ期に分類され、中期前半には東側区域・同後半には全域にわたり、後期には北西区域に形成されるという変化が認められた。
3. 集落の構成は縄文時代・弥生時代の両時代において、規模の異なる住居から構成される傾向が認められる。特に弥生時代中期にみられる大型住居は、集落を形成する中核となる住居と想定される。
4. 縄文時代の集落は当区西方に隣接する配石地帯(8区)と同時期と考えられることから、当時の集落と墓域、或いは祭祀域との関係を考える上での貴重な資料である。

5. 弥生時代の住居の形態には、柱穴配置の変化に時期的な傾向性が認められるとともに、各期住居の個々において様々な特徴が認められた。とりわけ「二の字」状を呈する石囲炉は、当地域における一つの特徴とも考えられる。

参考文献

- 「上野B遺跡」-二戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書IV 一戸町教育委員会昭和58年3月
- 「馬場野II遺跡発掘調査報告」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告第99集
東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書 (勉岩手県文化振興事業団 昭和61年3月)
- 「岩手の遺跡」 勉岩手県埋蔵文化財センター 昭和60年3月
- 「火行塚遺跡」 岩手県埋文センター文化財調査報告書第23集 (勉岩手県埋蔵文化財センター
二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書 昭和56年3月)
- 「墳館」 岩手県文化財調査報告書第52集 東北縦貫自動車道関係文化財調査報告書III
岩手県教育委員会 昭和55年
- 「大淵遺跡」 岩手県埋文センター文化財調査報告書第23集 二戸バイパス関連遺跡発掘調
査報告書 (勉岩手県埋蔵文化財センター 昭和56年)
- 「小井田III遺跡発掘調査報告書」 岩手県埋文センター文化財調査報告書第85集 (勉岩手県
埋蔵文化財センター 昭和59年)
- 「君成田IV遺跡発掘調査報告書」 岩手県埋文センター文化財調査報告書第62集 (勉岩手県
埋蔵文化財センター 昭和58年)
- 「伝久遺跡」 御所ダム関連遺跡発掘調査報告書 岩手県埋文センター文化財調査報告書第
16集 (勉岩手県埋蔵文化財センター 昭和56年)
- 「常盤広町遺跡」 古代学3-2 岩手県佐倉河村発見の弥生式土器 古代学協会 昭和29
年
- 「橋本遺跡」 水沢の歴史—平安以前— 水沢市職育委員会 昭和44年
- 「卯邊坂遺跡」 岩手県文化財調査報告書第31集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報
告書I 岩手県教育委員会
- 「立石遺跡」 大迫町文化財報告3 大迫町教育委員会 昭和54年
- 「小田遺跡」 大迫町文化財報告4 小山遺跡発掘調査報告書 大迫町教育委員会 昭和55
年
- 「八丈遺跡」 北上市文化財報告第24集 凶版編 北上市教育委員会 昭和53年
北上市文化財報告第27集 本文編 同上 昭和54年
- 「大渡野遺跡」 岩手県文化財調査報告書第32集 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報

告書II 岩手県教育委員会 昭和54年

- 「長谷堂貝塚—昭和56年度緊急調査報告 岩手県教育委員会 昭和47年
日本考古学年報25 「長谷堂貝塚」 日本考古学協会 昭和47年
日本考古学年報31 「長谷堂中貝塚」 同上 昭和57年
- 「門前貝塚」 郷土史料館報告 盛岡市公民館 昭和35年

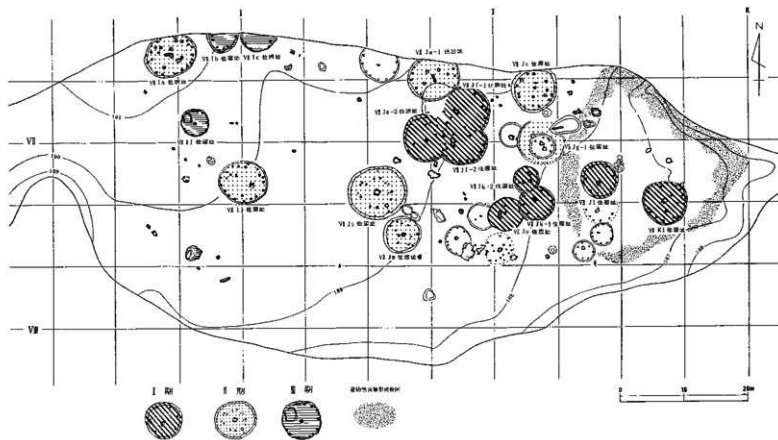


圖174 海南晚代洞穴遺址時間區分圖

湯舟沢遺跡 3 区の弥生式土器

岩手県立博物館 小田野 哲憲

はじめに

岩手県において同一遺跡から複数の、弥生時代に属する竪穴住居址が発見された例は極めて少なく、おそらく一戸町上野B遺跡（小田野・高田：1983，高田：1985他）、軽米町馬場野II遺跡（註1）、若成田IV遺跡（遠藤他：1983）、小井田III遺跡（近藤他：1985）に次いで5例目であろう。しかも本遺跡では、量の多寡はあるが各竪穴住居址より良好な資料がまとまって出土している。前章でも触れているが、これらの弥生式土器は竪穴住居址から出土したものが最も多く、土器と竪穴住居との関連を知る上でも貴重である。弥生時代と判明している18棟の住居址は、プラン上においては2形態に分類されるが、時期的には3分類が可能であり、伴出する土器も同様の分類が可能である。竪穴住居址は次の特徴により、III型に分類される。

I型：プランはほぼ円形で、柱穴は壁際にある。直径は4.3m～9.3mとバラツキが多い。炉は「ㄣ」字状の石囲炉と地床炉とがある。この型に属する竪穴住居址はVII Je-2・VII Jf-1・VII Jf-2・VII Jk-1・VII Jk-2・VII Jj・VII Jo・VII Kiの8棟である。

II型：プランは円形・楕円形の両者が半々で、柱穴は炉と壁の中間に4～5個ある。壁際に小ピットがめぐる例もある。径は5.7m～9.5mであり大形のものが多い。炉はI型とほぼ同様である。この型に属する竪穴住居址はVII Ia・VII Ja-1・VII Jc・VII Jg-1・VII Ji・VII Jmの7棟である。

III型：プランは円形で、柱穴はI型と同様壁際にある。径は4.5m～5.7mで小形化している。炉は、1例判明しているが地床炉である。この型に属する竪穴住居址はVII Ib・VII Ic・VII Ifの3棟である。

竪穴住居は以上の3型に分類できるが、次にはこれらI～III型から出土している土器の概要について述べる。記述の都合上、I型竪穴出土土器を「湯舟沢I類」、II型竪穴出土土器を「湯舟沢II類」、III型竪穴出土土器を「湯舟沢III類」土器とよぶ。

1. 湯舟沢I類土器（第175図）

(1) 器種

甕・甍・鉢（深鉢・小形鉢・浅鉢）・高坏・蓋が出土している。

〔壺形土器〕

概して小形のものが多く、最も大きい例で高さ34cmを計るが、ほとんどのものは器高20cm以下で、最小の例は約8cmである。数量は少ない。変形工字文(VII Jf 住-17)や口縁部粘土帯貼付文(VII Jk-1住-1)の文様の他は縄文を施す例が多い。

〔甕形土器〕

各竪穴住居址から出土しており、数量的にも最も多く出土している。ほとんどの資料が器高30cm以上である。最大径が口縁部にあるものと肩部にあるものとの両者があるが、数量的には後者が多い。無文の口縁部と沈線に区画された頸部・縄文をもつ体部が一般的である。口縁部は平縁・波状・山形の3種に分けられるが、平縁が最も多い。多くのものが煮沸に用いられており、器内外面に煤・炭化物の付着がみられる。

〔鉢形土器〕

深鉢：縄文時代晩期の深鉢の伝統を強く残している大形の深鉢で、口縁部がやや内傾する(VII Je-2住-4・VII Jf-2住-2他)。同様の器形は一関市谷起島遺跡(林・小田野：1977、工藤：1984他)で知られている。

小形鉢：変形土器をそのまま小形化した器形が最も多く、文様についても同様である。1例のみ当遺跡では珍しい二重の構造をもつ変形工字文をもつものがある。他に数例袖珍土器(VII Ki 住-3他)がある。

浅鉢：数量的には少ないが特徴的なものが多い。特に体部に段を有する器形(VII Jf 住-2)は本県に類例の少ない資料で、前記谷起島遺跡で少数知られているのみである。

〔高坏形土器〕

甕に次いで数量が多い。坏部は碗状のもの・浅鉢状のもの・頸部を有するものの3形態があり、口縁部は平縁・山形及び刻み目を有する三者がある。脚部はほとんどが筒形である。坏部は各種の変形工字文が施され(詳細は後述)、脚部は上下の平行沈線文の間にゆるやかな波状文をめぐらす例が最も多い。

〔蓋形土器〕

数量的には多くない。ほとんどが倒碗形である。VII Jk-2住居址出土例(VII Jk-2住-2)は底部中央にいわゆる蒸気口があいている。明瞭に蒸気口と確認されたものはこれが若手県で初めてである。

(2) 文様

縄文を除いてはほとんどが寛描き沈線による文様である。この中で最も多くバラエティに富むのは変形工字文である。

〔縄文〕

ほとんどが2段単節のLRであるが、少量RLも存在する。横走・斜行するものが多いが、中には縦走する例（VII Ij 住-4）もみられる。

〔変形工字文〕

高環に最も多く使用されている。高環以外では小形鉢（VII J/ 住-3, VII Jo 住-1）・壺の胴部（VII J/ 住-17）の3例のみである。種類については模式図（挿図1～2）に示すとおり様々な変化がみられる。

〔波状文〕

I類土器では高環の脚部に1～3本の単位で施文されるのみであり、変化に乏しいのが特徴である。

〔平行沈線文〕

各器種の文様帯を区画するものとして多用されている。特に高環に著しいが、高環の中には変形工字文でなく、口縁部と体部にそれぞれ数本をめぐらす例が多いのも特徴の一つである。胴部に段をもつ浅鉢（VII J/ 住-2）もこの類に入る。壺・鉢の口縁部文様としても少数みられる。

〔刺突文〕

高環脚部（VII Jf-1 住-21～24, 同一個体）にみられる他は口縁部の突起を突く程度である。

〔磨消縄文・充填縄文〕

数量的には少なく、高環形土器にのみ見られる。坏部においては、変形工字文の外側に施す磨消縄文と変形工字文内に施す充填縄文の2種類がある。脚部のそれは少なく1例のみである（VII Jf-1 住-18）。

〔丹塗り〕

図示した資料（完形品も砂片も1点と計算して）のみで見ると、高環に圧倒的に多く約82%、次いで浅鉢が多く44%、これに壺32%と続き、甕・深鉢3%、蓋0%の数値を示している。

以上にみられるようにI類土器は何らかの形で文様あるいは装飾を有しているが、その種類・手法については限られている。

2. 湯舟沢Ⅱ類土器（第176図）

（1）器種

壺・甕・鉢（小形鉢・浅鉢・台付鉢）・高環・蓋が出土している。

〔変形土器〕

I類土器と同様やや小形のものが多いが、中には有文精製の大形壺もある（VII Ja-1 住-1 6）。I類の壺よりは器形が豊富で、最大径が胴部中央にあるものが多い。文様も縄文のみではなく各種の篋描沈線文が胴部中央あるいは下半部まで及んでいる。II類土器での数量としては少ないが、I類土器の壺の割合よりは勝っている。

〔変形土器〕

I類土器と同様数量的には量も多い。ほとんどのものは30cm以上であるが、40cmを超えるものはない。最大径は口縁部にあるものと肩部にあるものとの両者あり、数量的にはほぼ同じ割合である。I類土器と同様頸部に1～3本の沈線をめぐらすもの他に、沈線をもたない器形が多くなっている。口縁部は平縁のものが最も多く、波状・山形はI類土器よりは少なくなり、波状は間隔が浅く、山形はよりゆるやかになってきている。また、全く文様をもたない壺が出現するのも大きな特徴である。この種の壺は最大径が口縁部にあり、頸部のくびれが強く、口縁部が強く外反するものが多い。また、他の壺に比較して、頸部から口縁部までが長いのも特徴の一つである。器面は荒い篋整形である。岩手県北部から青森県にかけて分布する壺と同じ器形・文様をもつものがある（VII Jj 住-4）。体部上半の沈線文の一部を区切る方法、縦走する縄文がよく特徴をあらわしている。竅穴住居址の出土であり、本県と青森県との当該時期を比較する上で貴重な資料となろう。

〔鉢形土器〕

小形鉢：壺をそのまま小形化したような器形（VII Ji 住-13, 14, VII Ia 住-4, 5）と小さな波状口縁をもつもの（VII Ia 住-3）の他に袖珍土器がある（VII Ia 住-12～14）。

浅鉢：数量的には少ない。ただし、高坏形坏部と分類した資料の中には浅鉢となり得る可能性をもっているものもある（特に平行沈線文のみ破片は）。形のはっきりしている浅鉢は3点（VII Ja-1 住-3・VII Jg-1 住-1・VII Ji 住-5）で、前二者は相似た特徴をもっている。

台付鉢：II類になって初めて出現する器形である。全体を知り得る資料はないので、あるいは台付壺となるものを含んでいる可能性がある。小形の台付は1例のみで（VII Ji 住-12）、「の」の字を重ねたモチーフをもつ。他の台付は比較的大きな粗製で、いずれも1ないし2本の沈線がめぐる（VII Ja-1 住-9・VII Ia 住-33）。

〔高坏形土器〕

I類土器と同様出土頻度の高い器種であるが、I類土器に占める割合よりは減少している。坏部は頸部をもつものがほとんど姿を消し、碗形を呈するものも少なくなり、浅鉢状を呈するものが大勢を占める。口縁部は平縁が最も多く、山形がこれに続き、小突起は少なくなる傾向にある。脚部はI類土器と同様筒形であるが、これより細い脚も出現する。文様は変形工字文

以外の多様な磨消縄文が用いられる。

〔蓋形土器〕

I類土器よりは減少している。明確に蓋と言えるのは2例のみ(VII Jc 住-4・VII Ji 住-25)で他の1例(VII Ia 住-9)は高環とも言える器形であるが、脚部の形状及び体部のモチーフから判断して蓋形土器に分類した。

(2) 文様

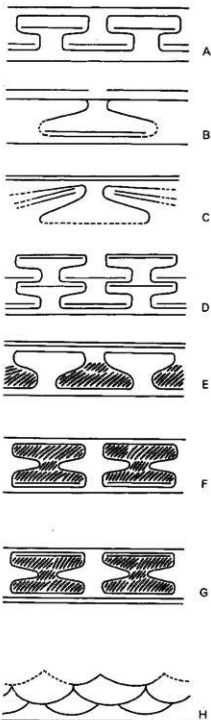
I類土器と同様、縄文と篋描き沈線によるものがほとんどである。

〔縄文〕

ほとんどが2段単節LRである。横走・斜傾するものが多いが、婁・鉢の中には縦走するものがあられる(VII Jc 住-5・6, VII Ia 住-33)。

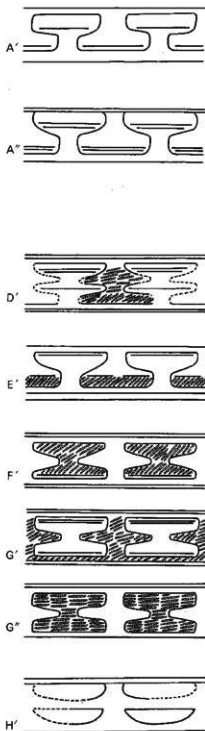
〔変形工字文〕

I類土器と同様に文様の主体を占めているが、種類は減少し、それに替るものとして王字文などが出現する。I類土器の変形工字文とII類土器の変形工字文を模式図化したのが挿図1(湯舟沢I類)と挿図2(湯舟沢II類)である。I類土器では、A～Eにみられるように横に連なるモチーフが多く、F・Gのように縦方向に完結するモチーフ(工字文)を有するものは極めて少量である。と同時に、磨消あるいは充填縄文をもつ変形工字文も少量である。II類土器では、文様帯の上・下限を区画する平行沈線の数の違いはあるが、A・F'のようにI類と全く同じモチーフも残存している。その一方でI類土器にはみられなかった変形工字文があらわれる。DとD'はAタイプのモチーフを二つ重ねて横に展開した文様であるが、モチーフ内の横線



湯舟沢I類

挿図 1



湯舟沢II類
挿図 2

の数・縄文の施文などに差異が認められる。EとE'では、Eには無かった途中で切れる横線が下に、普通の横線が上に引かれているなどの変化が認められる。同じことは工字文にも言えることで、I類においてはモチーフ内の横線が上あるいは下に引かれて縄文が施文されているが、II類になると横線の無いものや、逆に増えたりするものや、G'のようにモチーフ内を磨消すなどの変化があらわれる。II類土器の中でも、特に高坏では磨消縄文・充填縄文の多用化及びF'・G'にみられるような工字文が目立って多くなる。

〔垂下文〕

典型的な垂下文は数少なく、竪穴住居址から出土したのは1例のみである(VII Ia住-30)。他に遺構外から出土した壺(遺構外-63)・高坏(遺構外-83)に例がある。ただし、押図3-Lタイプの文様も垂下文に加えると類例は増加する。

〔連弧文〕

壺の一部(VII Ja-1住-6・VII Ia住-15)と蓋(VII Ia住-9)にみられるが数は少ない。上向きと下向きの両者がある。

〔山形文〕

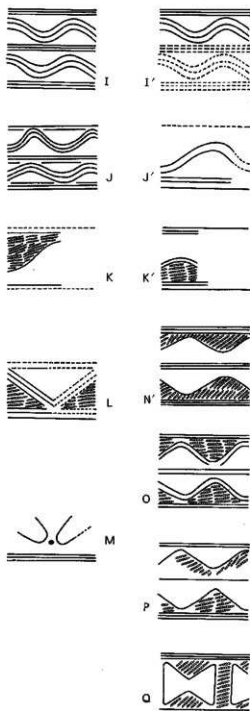
竪描き沈線の一部を故意に山形にした例がある(VII Ji住-3)。明確な連続山形文は、遺構外出土資料の中にある(遺構外-68~73)。

〔列点文〕

前述の蓋(VII Ia住-9)に3段にわたって認められる。これ1例のみである。

〔刺突文〕

壺に数例ある。口縁部で複合口縁の下方を一



湯舟沢Ⅰ類

湯舟沢Ⅱ類

挿図 3

周するもの (VII Jc 住-6) と口唇部を一周するもの (VII Jg-1 住-2) 及び、平行沈線の一部を切る刺突 (VII Ij 住-4) がある。

【重菱形文】

刺突文をもつ壺 (VII Jc 住-6) の頸部にあり 2本の沈線をはさむ形で上下の山形が菱状を示す。

【平行沈線文】

文様帯の上、下限を区画するものとして用いられる以外に、壺や鉢に多用されている。高坏においては、平行沈線のみ施文も目立つ。

【波状文】

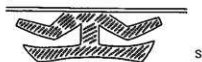
I類土器においては高坏の脚部のみに施文されていたが、II類土器になり壺形土器 (VII Jc 住-1・VII Ji 住-1) の体部にも用いられるようになるが、高坏の坏部に施文されている例は無い。また、I類と異なり数種類の波状文があらわれるのも特徴の一つである。I類土器とII類土器の高坏脚部の波状文を模式図化したものが挿図3である。IタイプはII類の時期となっても残存しているが、I類よりは減少している。かわりにこのタイプから変化した様々な波状文が出現する。I類では上・下3本の平行沈線により文様帯を区画し、さらに3本の中心線を描き、その中に波状文をめぐらすのが、II類になると中心線は1~3本の沈線で描かれ、波状文も1~2本となり (J'・K'・N~P)、途中で切れるOタイプのような例もある。と同時に、I類土器では稀であった磨滅文が多用されるようになるのも大きな特徴である。脚部にこのような文様をもつ高坏の坏部は、当然のことながら磨滅・充填縄文が施文されている。

【磨消縄文・充填縄文】

I類土器と比較すると、かなり増加している。I類土器では高環の一部にみられるだけであったが、II類土器では高環の半数以上の個体が磨消あるいは充填縄文をもつ。また、壺・台付鉢（VII J1住-12）、蓋（VII Ia住-9）にも施文されている。壺では波状文・連弧文・工字文・コ字文（VII J1住-2）などが描かれている有文精製土器のほとんどが磨消縄文をもっている。高環ではさらに種類が豊富で、その代表的な模式図が挿図4である。T・Uタイプのモチーフは、本県の今までの例からすると高環脚部に多くみられるが、湯舟沢では環部にも施文されている。他の遺跡ではこのモチーフが縦に、あるいは上下逆に付されていることもある。Qタイプ（挿図3）を含めたこの二者は、よくみられるモチーフの一つである。R・Sタイプは、本県では初めてあらわれたモチーフであるが、Rは垂下文の、Sは上（王）字文の系統を引くものと考えられる。Wタイプは破文（註2）の变化したもののようにも受け取れる。V・Wタイプとも主要モチーフの間に「V」形の沈線をもつが、この文様もこの時期に初めてあらわれるが、その分布は県内各地に及んでいる。湯舟沢II類の磨消縄文は、それまでの変形工字文・波状文などと同じモチーフを残す、あるいはその系統を一部引いている一方で、そこから新たに生み出したモチーフも多いに活用している。

【丹塗り】

図示した資料（全てを一点と計算して）のみでみると、高環90%・壺50%・蓋50%・浅鉢25%・甕5.3%の数値を示す。これをI類土器と比



湯舟沢II類

挿図 4

較すると相対的にパーセンテージは高くなっている。その中でも高坏のほとんど、壺の半数が特に顕著である。

〔その他の文様〕

壺・小形鉢の底部に数例網代痕が認められる。いずれも単純な一本潜り・一本送り（坪井：1899）である。この他に木葉痕もあり、I類に比べると底部文様をもつ例は多い。

3. 湯舟沢 III 類 土器 (第177図)

(1) 器種

壺・壺・鉢（小形鉢・浅鉢）・高坏・蓋が出土している。

〔壺形土器〕

I・II類に比較して数量は減少している。肩をもつ小形のもの（VII If 住-1）・球形の胴部と推定される磨消縄文をもつ中形のもの（VII Ib 住-1・2）と・頸部からなだらかに胴部につながる大形のもの（VII If 住-2）が出土している。特に大形の壺はこれまでに例の乏しい資料で、おそらく最大径は胴中央部よりは下に位置する器形と推定される。丹形され、成形も丁寧になされている。

〔鉢形土器〕

III類土器はほとんどが壺形土器で占められている。形態もバラエティに富み、かつ大形のものも多く、器高40cmを越えるものも少なくない。II類と異なり無文の壺はなくなる。形態の上からは、最大径が胴中央あるいは下半部にある一群と、頸部が比較的ゆるやかで口縁部が大きく広がり、そこが最大径となる一群とに分けられる。平縁を呈するものが最も多いが、小さな突起をもつ例（VII If 住-7・9）や、ゆるやかな波状を呈する例（VII Jc 住-1・VII If 住-10）もある。複合口縁が出現するのもこの時期からであるが、複合部分はそれほど肥厚はしていない。この類の壺は口縁部と体部に文様があり、頸部を無文とするのが一つの特徴のようである（VII Ic 住-3・VII If 住-3・7・19）。底部はやや上げ底風のものが多く、底縁部が少し外側にはみ出すのが特徴の一つでもある。大ききの割には器壁が薄く、固い焼成のものが多い。文様帯は前記の頸部無文となるもの以外に、口縁部が無文で頸部以下に文様のあるもの、全面に施文するものなど様々である。

〔鉢形土器〕

小形鉢：広口壺状の鉢が1例ある（VII Ib 住-3）。壺よりは器壁が厚く、丁寧な成形で刺突文と沈線文をもつ。

浅鉢：異形の浅鉢で（VII If 住-11）真上から見ると不正楕円形を呈する。底部は欠損して

いて不明である。一戸町上野遺跡（高田：1984）に類例があるが、丸底の底部である。口縁部の沈線は壺形土器（VII If 住-1）のそれと相通じるところがある。

〔高坏形土器〕

I類・II類土器と比較して極端に数の減少する器種である。3例（VII Ib 住-12～14）ともII類の器形・文様をそのまま引き継いでいる。いずれも丹塗り。

〔蓋形土器〕

VII Ib・VII If 住居址から1点づつ出土している（VII Ib 住-11・VII If 住-12）。倒碗形と笠形と推定される。器形・成形・文様が良く似ている。

（2） 文様

縄文・捺糸文・篋描沈線・刺突文が主体を占める。

〔縄文・捺糸文〕

III類土器の地文に用いられている縄文、あるいは捺糸文は複雑な施文方法がとられている。縄文では2段単節のLR・RL両者が用いられているが、数量的にはRLが多い。また原体の中には縄の周囲に他の条を巻き絡らげたいわゆる附加条（山内：1979）を用いているものも多い。結節回転文・絡条体任痕文も多く用いられている。明瞭な帯縄文は見られない。器内面あるいは底部に縄文をもつ例も若干ある（VII If 住-16・17・2・35）。条は角度の強い斜行あるいは縦走するものが多いが、底部付近で末端が交叉するものはほとんど無い。が、頸部から胴部にかけて、あるいは口縁部で羽状縄文風に上下に配列している例は多い（VII Ic 住-3～4・VII If 住-3・10他）。また、底部付近で原体を連弧文状に施文している例もある（VII If 住-3）。

〔交互刺突文〕

III類土器を代表する文様の一つであるが、VII If 住居址のみと遺構外の資料に限られている。極めて明瞭な交互刺突文で、退化したものは見うけられない。甕の口縁部あるいは頸部付近に1段か2段めぐらすが、一周せずに段違いになる例もある（VII If 住-3他）。器面を直接交互に刺突する例と、粘土紐を貼りつけてそれを刺突している例の両者がある。

〔連続山形文〕

雑で不定形化した形ではあるが、口縁部あるいは頸部をめぐっている。壺の山形は1本のみで（VII If 住-2）、甕のそれは2本一単位あるいは3本一単位となっている。（VII If 住-5・16・17）。

〔連弧文〕

連続山形文と組み合わせて用いられている例（VII If 住-2）、重連弧文が上・下に連なる例（VII If 住-4）と原体の回転によって連弧状をあらわしている例（VII If 住-3）とがある。

〔変形工字文〕

壺の体部上半に変形工字文もしくは流水文状の複雑かつ不定形な文様をめぐらせている (VII If 住-31他)。破片資料のみで正確なモチーフ、単位は不明である。他にII類の系統を引く変形工字文が高坪に見られる (VII Ib 住-12~14)。

〔刺突文〕

磨消縄文の部分を残す1例 (VII Ib 住-1) のみある。

〔列点文〕

小形鉢に一例ある (VII Ib 住-3)。上下を沈線に区画された中を、3段にわたって横方向に突いている。

〔その他の沈縄文〕

不定形化された連続山形文に区画された文様帯中に、モチーフが把握できない例 (VII Ic 住-1) がある。他に類例は出土していない。おそらく青森県垂柳遺跡 (伊東: 1960) や宮城県西台遺跡 (伊藤: 1958) あるいは一関市谷起島遺跡などにみられる縄文の退化した形ではないかと推定される。

〔丹塗り〕

I・II類土器と比較して丹彩される数は少ない。VII Ib 住居址の高坪片3点を除くと、壺3例中1点、壺40例中3点に認められるだけである。

4. 遺 構 外 出 土 の 土 器 (第178回)

遺構外出土の土器は既述した湯舟沢I~III類土器の範疇からはみだすものはほとんど見当たらない。ただし、その中でいくつか興味のある資料が散在しているので、時期に関係なく器形の上から特徴を述べる。

〔壺形土器〕

両部に2本一単位の連続山形文をめぐらす壺 (遺構外-1) は、県内では類例の乏しい資料であるが、盛岡市祭VI遺跡 (社3) で出土している。他の壺 (遺構外-25~29) はI~II類で見られる器形と文様である。II類に含まれるものの中には垂下文 (遺構外-63) や有文精製の大型壺も存在する。

〔甕形土器〕

いずれもI~III類に含まれ、前述の堅穴住居址のものと同様の例が多いが、やや異なる資料もある。いずれも口縁部が強く外反する器形で (遺構外-65・74)、両者とも県内で類例の少ない資料であり、かつ県内の弥生式土器の中から生ずる器形でもなく、他の地域特に宮城県地方

あるいは更に南の地域の影響を強く受けているものと考えられる。特に65の資料は成形も秀れ丹塗りが認められるなど、他の壺とはやや異っている。

〔鉢形土器〕

壺と同様、特徴的な資料が2例ある。沈線間に横長の方形をめぐる鉢（遺構外-3）と頸部以下に鋸歯文を配する鉢（遺構外-68~70）である。前者は王字文あるいは工字文のモチーフをひくものであるが、他地域では磨消縄文を伴うのが通例であり、紫波町上平沢新田（古田・千葉：1980）の例も同様である。ただし、当遺跡では縄文を伴っていない。後者は数少ない台付鉢であり、泉北あるいは青森県地方の関連をうかがわせるもので、田舎館2あるいは3群（須藤：1983）に位置づけられる資料であろう。

〔高坏形土器〕

1例（遺構外-12）を除いては一般的に見受けられる器形・文様である。12はあるいは台付鉢とすることも可能であろう。頸部をめぐる円形の刺突文・体部の変形工字文の継ぎ目にある刺突文及び特徴的な器形は、岩手県にはほとんど類例がなく、青森県地方の二枚橋式（須藤：1969）あるいは宇鉄II式（岩本・三宅他：1979）に同類を求めることができる（註4）。

〔蓋形土器〕

I~III類と同様、笠形と倒碗形（小田野：1983）のみで、それ以外の器形のもの出土していない。

〔その他の土器〕

底部に倒皿状の蓋のモチーフをもつ例（遺構外-33）があるが、穿孔もなく底部と判断した。他に器内面に複数の沈線をもつもの（遺構外-91）や靱痕をもつ壺（遺構外-124）などが出土している。

5. 湯舟沢 I ~ III 類土器のまとめ

(1) 湯舟沢 I 類土器

湯舟沢 I 類土器に類似する土器は県内各地で発見されている。最も資料が豊富な一関市谷起島遺跡（鳥畑：1955、林・小田野：1977、工藤：1982他）をはじめ、金ヶ崎町長坂下遺跡（伊藤：1965）、花泉町中神遺跡（伊東：1974）、江刺市沼の上遺跡（伊藤：1973、山口：1978）同市免II遺跡（高橋他：1979）、江釣子村蔵屋敷遺跡（高橋：1983）、松尾村長者屋敷遺跡（三浦他：1984）、二戸市火行塚遺跡・同大淵遺跡（高橋・遠藤：1981 a・b）、軽米町馬場町II遺跡（註5）など、北上川・馬淵川沿いの地域を中心に分布している。他に少量の遺物を出土した遺跡まで含めると相当量の遺跡数となるが、北上山地・奥羽山脈・海岸部は類例に乏しい。

壺形土器の数は少ないが小形壺は谷起島遺跡に、口縁部に隆帯をめぐらす例(VII Jk-1住-1)は長坂下遺跡や葦屋敷遺跡に類例を求めることができる。後者の壺は縄文式土器の伝統を強く残しているものである。同様のことは壺(深鉢)形土器・高環形土器にも言えることで、壺においては縄文式的な例(VII Ki住-4・VII Je-2住-4・VII Jf-2住-2他)とこの時期に新たに出現する壺形(VII Jk-2住-5・6他)とに分けられる。高環においては、人洞A'式の伝統の強い山形あるいは大きな突起をもつ口縁部と、ややふくらみをもつ坏部のタイプ(VII Jf住-8・VII Je-2住-3・VII Jk-1住-3他)と筒状の脚部、坏部にくびれがなくそのまま外に開くタイプとに分けられる。磨消縄文あるいは充墳縄文をもつものは少ない。また、口縁部に大突起をもつ例や変形I字文の端に2個の粘土瘤を貼り付ける例はほとんどない。小形有文の鉢形土器が少ないこともI類土器の特徴としてあげられる。蓋形土器は明らかにこの時代になり出現する器形であるが、本遺跡で蒸気孔をもつ例が初めて出土した。器形は笠形と倒碗形がほとんどで、倒皿形は出土していない。蓋は北上川中流域の遺跡では全器種に占める割合は高い方であるが、上流域あるいは馬淵川流域ではそれほど頻度は高くないようである。

県内の資料との比較は以上であるが、I類土器は他の地域との比較資料としても良好な土器が出土している。VII Jhの高環(遺構外-12)はおそらく青森県地方の二枚橋式(須藤:1969)あるいは宇鉄II式(岩本他:1979)に相当するものと考えられる。他の土器との伴同関係が不明であるので断言はできないが、湯舟沢I群に伴うことだけは確実であろう。胎土・焼成なども当地域の土器とは異なっており、搬入された可能性が高い。宮城県地方では近年、青木畑遺跡(加藤:1982)や山王遺跡(須藤:1983a)の内容が明らかにされ、本県の資料を比較する上で大いに役立っている。湯舟沢I類と青木畑式を比較すると、口縁部に隆帯あるいは沈線をめぐらす壺・口縁部がやや内傾する深鉢などは共通しているが、口縁部に大突起を有する、あるいは脚部に透かしのある高環・変形工字文の交点の粘瘤・倒皿形の蓋は無く、変形工字文をもつ小形浅鉢の数が極端に少ない等の相違点が認められる。これらは、谷起島遺跡と湯舟沢遺跡を比較しても同様のことが言える。また、山王III層式と比較すると、磨消縄文手法が少なく、I字文・王字文あるいは垂下文などがほとんど無いことがあげられる。湯舟沢I類土器は一部に青木畑式あるいは二枚橋式土器のような始現期の弥生式土器を含んでいるが、総じてこれらの次の段階に位置するものと考えられる(註6)。他の地域と比較するなら宇鉄II式・山王III層式の一部と併行する、と言えるであろう。

湯舟沢I類土器を出土した住居址のうち6棟が重複関係にある(VII Je-2・VII Jf-1・VII Jf-2の一群〈A群〉とVII Jk-1・VII Jk-2・VII Joの一群〈B群〉)。これら住居址出土の土器を比較すると、

A群：道橋上からみた新旧関係は、古い順にVII Je-2→VII Jf-2→VII Jf-1である。これに土器を比較すると、VII Je-2・VII Jf-2とも口縁部がやや内傾する深鉢があり、波状口縁や球形の胴部をもつ小形の壺がみられ、大洞A'式土器の伝統をより強く残している。VII Jf-1では波状文の高坏脚部、蓋、太い寛描沈線の磨消縄文があらわれる。磨消縄文はVII Jf-2の高坏にもあり、この3棟の出土土器に著しい時間差は認めることができず、極めて近い時間内の土器と考えられる。

B群：道橋上からは古い順にVII Jo・VII Jk-1→VII Jk-2と続く。VII Jo住居址には、磨消縄文をもつ工字文(VII Jo住-2)もあるが、青木畑遺跡や山王遺跡に多いAタイプ(挿図1参照)の変形工字文をもつ小形浅鉢(VII Jo住-1)や他の文様(VII Jo住-5)もある。VII Jk-1には簡帯文や波状口縁の壺(VII Jk-1・2)などもあり、やや古い様相を示している。また、VII Jk-2の高坏の器形・文様も同様であり、この3棟も土器の上から著しい時間差を見出すことは困難である。

その他の竪穴住居址の土器も大きな時間差はなく、これら8棟の竪穴住居址から出土した土器群は、ある一定の時間内に存在したと考えられる。その編年的位置づけは前述のとおりである。

(2) 湯舟沢II類土器

湯舟沢II類に類似する土器を出七する遺跡としては、花泉町中神遺跡、一関市谷起島遺跡、同草ヶ沢遺跡(遠藤：1978)、大船渡市長谷堂貝塚(草間他：1972)、陸前高田市長沢遺跡(小田野：1982)、水沢市橋本遺跡(伊東：1974)、江刺市沼の上遺跡、紫波町上平沢新田遺跡(吉田他：1980)、矢巾町大渡野遺跡(相原：1979)、玉山村山屋遺跡(小田野：1982)、松尾村野駄遺跡(田井：1978)、一戸町滝野遺跡(関：1980)、同上野遺跡(高田：1985他)、同小井田III遺跡(近藤他：1985)、二戸市足沢遺跡(関：1980)、同火行塚・大沢遺跡、九戸村塚II遺跡(平井他：1984)、久慈市上山野遺跡(村上他：1983)などが知られており、奥羽山地を除いて広く県内に分布している。

湯舟沢II類土器とI類土器を比較すると、以下の点で変化を認めることができる。壺形土器では、口縁部のみならず体部下半まで施文されたやや大形の器形が出現する。I類土器では、1例(VII Jf住-17)のみであったが、II類土器ではほとんどに磨消縄文を伴う下字文・波状文・連弧文などが施文されている。このようなモチーフをもつ類別及び完形品は数が少なく、繫VI遺跡(註7)・谷起島遺跡・長沢遺跡・足沢遺跡(須藤：1983)など、数遺跡が知られているのみである。そのうち、磨消縄文の連弧文(VII Ja-1住-6)をもつ壺は矢巾町清水野遺跡(註8)・同山王茶屋遺跡(小田野：1982)・一戸町小井田IV遺跡などに類別があり、かつ同滝野遺

跡の浅鉢にも類例があり、北上川・馬淵川流域に、この時期広く分布している。甕形土器は口縁部平縁のものが増加し、I類にあった口縁部がやや内傾する深鉢は姿を消し、無文の甕も増加する。I類と比較して全体的に大形となる傾向がある。作図した甕のみの数値を平均すると、I類では口径22.5cm・高さ27.2cmを示すが、II類では、それぞれ26.7, 32.1cmを示す（一部推定復原値も含まれている）。高坏はVII J1住居址の資料を除いて、ほとんどが平縁となり、坏部は碗状あるいは鉢状を呈する。多彩なモチーフの磨消縄文・充縄文が坏部に施文されている。

T. (王) 字文は中神遺跡や谷起島遺跡に、VII J1住居址の一群のモチーフも上記以外に沼の上遺跡・塚II遺跡などに類例がある。器形にこだわらずモチーフのみを見るなら、VII J1住-8は岩手町芝の山出土の甕形土器に（杉原他：1975）、VII J1住-6は陸前高田市山崎遺跡（佐藤他：1984）などに類例を求めることができる。また、蓋とした土器（VII Ia住-9）には異論のあるところかもしれないが、当遺跡では連弧文及び刺突文（列点文）を有する高坏あるいは台付鉢が全く無いこと、脚部の形態が高坏としては小さいことなどの理由で、蓋として取り扱うこととした。II類においてはまた、台付土器の出現も特徴の一つとなり得る。器形全体を知り得るものはないが、沈線のめぐる2例（VII Ja-1住-9・VII Ia住-33）は台付甕あるいは鉢に、連続山形文が頸部にある例（遺構外-68~70）は台付鉢に、小形の台（VII J1住-12）は不明である。浅鉢・小形鉢とも沈線あるいは縄文のみの施文で、単純化し、かつ同一の器形を示す傾向にある。

II類土器を近隣地域と比較するなら、青森県田舎館遺跡、秋田県宇津ノ台遺跡（須藤：1970）宮城県山王遺跡、同寺下園遺跡（加藤：1968）、同樹形凹遺跡などがあげられる。宇津ノ台式と同様の資料として平行沈線・磨消縄文をもつ甕（遺構外-64）などがあげられるが、刷毛目あるいは篋形痕文などは見られない。田舎館2あるいは3群に近似するものとして住居址内は少ないが（VII J1住-4・VII Ja-1住-8他）、遺構外では数例みられる（遺構外-68~73）。甕形土器（VII J1住-4）は井沢式（葛西：1976）あるいは田舎館2群（須藤：1982）と呼ばれているものに近い。井沢式土器併行とすると時期的にやや不都合が生じるが、田舎館2群あるいは樹形凹式土器（山内：1925、杉原：1936）併行とすれば無理は生じない。類例の少ない資料だけに、今後の検討課題としておきたい。山王III式と比較すると須藤氏の山王III層の上層の土器に類似するものが多い。また、寺下開式に類似するもの（遺構外-3）も認められる。樹形凹式に見られるような重層する連弧文・口縁部が強く外反する甕（遺構外-74）・山内博士のいう特殊な縄文（山内：1979）〔直前段多夾〕をもつ例（VII Ia住-6他）、なども一部は見られるが、一方で列点文を有する甕・長頸壺・細い沈線による変型工字文・渦巻文が見られないなどの相違があるなど、それぞれの地域の土器と一部では共通する特徴を共有するが、異なる点も多い。これらのことは、湯舟沢II類土器が、一部を除いてI類土器に継続して製作・使用されたもの

であることを示すものと言えよう。ただ、VII Jc 住居址の甕 (VII Jc 住一6) のように器形・文様ともより新しい要素を含む土器もあるが、他の共伴遺物あるいは竪穴のプランと比較するとII類土器に含めざるを得ない。特に、VII Jc 住居址の一群の多様な甕形土器 (VII Jc 住5~15) は、湯舟沢II類土器の在り方を知る上で重要な意味をもつものと思われる。

(3) 湯舟沢III類土器

湯舟沢III類に類似する土器は大船渡市関谷洞窟(後藤他:1968, 小田野:1982)、水沢市常盤遺跡(伊東:1954)、江刺市尻II遺跡(高橋他:1979b)、紫波町墳館遺跡(三上:1980)、盛岡市繁VI遺跡(上野他:1983)、盛岡市一本松遺跡、同銭神沢遺跡(武田:1978)、一戸町上野遺跡(高田:1985他)、亘小井田IV遺跡(橋沢他:1983)などで出土している。これらの遺跡から出土した土器は、「天王山式土器」に比定あるいは認定されている。従来、岩手県においては常盤遺跡の資料が最もまとまっており、多くはこの資料を型式認定の資料として用いてきた。湯舟沢遺跡では、常盤遺跡以上の量が出土しており、組成・器種を知る上で重要な位置を占めている。器種には壺・甕・鉢・高坏・蓋があるが、壺の数量が激減し、大形の各種の甕が主体となる。高坏・蓋も極く少数となり、異形の浅鉢 (VII If 住一11) が出現する。甕では深鉢状で口縁部が外に広がるものと頸部を有するものとに大きく分けられる。頸部をもつものの中ではさらに最大径が口縁部にあるものと、胴中央あるいは下半部にあるものとに分けられるなど、バラエティーに富む。また、甕に各種の文様が施文されるのも大きな特徴の一つである。このことは当遺跡のみならず、各地の同時期の甕に言えることであり、特殊な変形工字文 (VII Ic 住一6) や、口縁部の逆弧文 (VII If 住一4他) などは常盤・尻II・小井田III遺跡などほぼ全県下にわたって分布している。主な文様としてこの他に交互刺突文・絡条体丘痕文・結節同転文・附加縄文・連続山形文がある。この他に複合口縁も湯舟沢III類の特徴の一つである。複合口縁をもつ甕は、頸部に無文帯を有するものが多い。

天王山式土器の特徴を簡潔にまとめると、「口縁の突起の発達」・「交互刺突」・「条の縦走する縄文」・「体部文様帯下端の下向き弧文」(中村:1976)などがあげられているが、これらの要素は湯舟沢III類では満たされている。が、その他の文様・器形も存在していることに注目すべき点がある。天王山式土器は東北地方のみならず更に広い分布を有しているが、各地方・地域によって相当の独自性を保っている。宮城県上ノ原A遺跡(佐藤他:1978)や青森県島山遺跡(工藤他:1977)がその好例であり、当遺跡の資料も北上川上流域における天王山式土器の一つの分布圏を示すものと捉えることができる。さらには常盤式と同様な名称、例えば「湯舟沢式土器」と仮称し、本県の天王山式土器の分類や細分の目安とすることも可能である。湯舟沢III類に近似するものに赤穴洞窟(江坂:1953)、一関市浄光沢遺跡(鈴木:1958)、上野B遺跡

〔第II群土器(高田:1985)〕などから出土した一群の土器がある。壺形土器以外の器種は類別が少なく、器壁はきわめて薄いのが特徴である。文様は天王山式ほど明瞭ではない浅い沈線間を突く平面的な交互刺突文・体部の、不規則な羽状縄文・体部下端での縄文(捺糸文)の末端がクロスする・あるいは最下部の条が横走するなどの特徴がある。これらの要素は湯舟状山類にはほとんど見られないので、区別して考えるべきであろう(註9)。

6. 小 結

湯舟沢遺跡出土土器をI～III類に分類した。これらを組成・器形・文様上で比較すると次の通りである。

組 成: I～III類とも基本的に壺・甕(深鉢を含む)・鉢・蓋・高環から成り立っている。

I類: それぞれの器種間に数量の偏重は認められず、バランスのとれた組合せとなっている。

同時期の他の遺跡と同様、甕が最も多く高環がこれに続く。大形の深鉢・浅鉢が存在する。

II類: I類に比して壺が増加し、蓋は減少する。高環の器形がバラエティに富み環部がI類よりは浅くなる傾向を示す。深鉢は姿を消し、鉢は小形化し、袖珍土器が日立つ。

III類: 壺・蓋・高環とも減少し、大形の各種の甕が主体を占める。甕をそのまま小形化したような鉢は減少し、異形の浅鉢があらわれる。

器 形

壺 I類: 大形の肩部の張る長胴の壺が特徴的である。胴部に縄文以外の文様をもつ例は極く少数である。胴部球形の小形壺もある。

II類: 頸部が直立気味で胴部は球形を呈し、最大径が胴中央部のものが多い。器高20cm前後が多く、極端な大形・小形の例はない。胴部に篋描沈線・磨消縄文が多用される。

III類: 数は減少する。小形壺の他は肩部がゆるやかな器形になりそうであるが、類別乏しく不明である。

甕 I類: 煮沸具として縄文土器の系統を引く大形の深鉢と頸部をもつ甕とに分けられる。甕は頸部に沈線をめぐらすものが多い。最大径は口縁部にあるもの、肩部にあるもの両方で沈線と縄文以外の文様は無い。口縁部は小さな波状・山形突起・平縁など様々である。

II類：I類の器形を引き継ぐ器形が多いが、これらの他に頸部から口縁部が長く、且つ外に大きく広がる器形が出現する。縄文をもつものが最も多いが、無文の壺がII類であられる。例外的に頸部に文様をもつ例がある。I類と比較してやや大形化し、バラエティーに富む。口縁部は波状・山形などもあるが平縁の例が多くなる。

III類：最大径が口縁部にあるもの、肩部にあるもの、胴中央部あるいは下半部にあるものなど様々である。複合口縁あるいは肥厚な口縁の造りが目立つ。平縁が多い一方で山形の小突起、ゆるやかな波状の口縁もある。底部は総じて小さく、安定感に乏しいものもある。胴の張る器形ではやや上げ底で底縁部がやや外側にはみ出す形のものが多い。精製土器のように各種の文様が施文されており、無文の例はない。頸部に無文帯をもつのも特徴の一つである。

鉢 I類：寛・大形の浅鉢を小形化したもの・碗状・台付・胴部に段のあるものなど様々な器形がある。大洞A'式の器形を引き継ぐものも多く含まれている。

II類：I類に比して小形化する傾向にあり、浅鉢・小形鉢は統一性のある器形にまとまっている。袖珍土器がやや多い。

III類：異形の浅鉢以外はいずれも小形で、精製有文の碗形・鉢形が多い。

蓋 I類：倒碗形がほとんどで、1例東北地方では類例の少ない蒸気口をもつものがある。縄文以外の文様は無い。

II類：I類の器形の他に、磨消縄文をもつ精製の蓋がある。他の遺跡でも出土しているが類例は少ない。他の蓋とは用途・性格が異なる可能性も考えられる。

III類：倒碗形・笠形があるが、数は少ない。I～III類ともいずれも把手を持つ器形と推定され、把手のない倒鉢形、倒皿形を呈する資料は発見されていない。

高坏 I類：山形口縁を呈するものが多く、平縁は少ない。坏部は碗状・浅鉢状・有頸など各種あり、磨消縄文は少ない。脚部は筒形で波状文が大多数を占める。

II類：体部文様に磨消縄文・充填縄文などを用いた従来になかったモチーフが見られる。浅鉢状の平縁の坏部が増加し、山形口縁は減少する。I類よりは細い筒形の脚もある。

III類：破片資料のみで全体を知り得ないが、磨消縄文を伴っている。

文 様

I類：変形工字文・平行沈線文・波状文が多く、縄文はLRが多くRLは少ない。高坏・小形鉢の多くは丹彩されている。磨消縄文は少ない。

Ⅱ類：太い篋描沈線による波状文・連弧文・連続山形文・変形工字文・王（工）字文などが、磨消縄文あるいは充填縄文手法により、多彩に用いられている。縄文原体にも特殊な技法が用いられている。これらが施文される器種は蓋の例外を除いてⅠ・Ⅱ類とも壺・小形鉢・高坏に限られている。丹塗りもほとんどがこの器種に集中する。Ⅰ・Ⅱ類の文様の概略は、挿図に示す通りである。

Ⅲ類：交互刺突文・連続山形文・変形工字文・連弧文・結条体疋痕文・結節回転文などがあり、縄文・磨余文は斜行・横走・縦走あるいは一部でクロスするなど変化に富む施文をしている。壺・鉢における頸部無文帯も特徴的である。高坏以外の丹塗りは減少する。

以上、湯舟沢遺跡の弥生式土器について述べてきたが、三分類したうち湯舟沢Ⅰ類土器は、一部に二枚橋式の高坏や青木畑式的な壺も含むが、トータルとして谷起島式に含まれよう（註10）。山王Ⅲ層式と比較すると同Ⅲ層の下層部分出土のグループにより近い様相を示している。このことは時間差を示すのか、あるいは地域性によるものか今後の課題の一つとなろう。湯舟沢Ⅱ類土器は、Ⅰ類土器に後続する。磨消縄文・充填縄文あるいは各種のモチーフなどから山王Ⅲ層の上層部分のグループ・寺下Ⅳ式・樹形Ⅳ式あるいは田舎館2群の一部に併行する時期に相当する。ただ、ⅦJc住居地の壺のようにやや後続する器形なども見受けられ、ある程度の時間差をもって存在したことが考えられる。将来的には細分も可能であろう。湯舟沢Ⅲ類土器は、天王山式土器に相当する一群である。ただし、天王山遺跡や常盤遺跡などの資料と共通する点も多いが異なる点も多くあり、このⅢ類をもって「湯舟沢式土器」という名称を提唱したい。湯舟沢式土器以前の土器としては上野遺跡・山崎遺跡・和井内東遺跡などの一群の土器があり、後続する土器としては所謂赤穴式土器が相当するものと考えられる。

湯舟沢遺跡出土の弥生式土器は、岩手県内ではかつてなかった程の質と量をそなえている。これらの遺物・遺構は今後の弥生時代の基礎的研究には欠くことのできない資料となることは確実である。特に岩手県の場合、集落の構成や土器の編年など未だ不明な事項が多く残されている。当遺跡の発掘資料が、これらの事項の解明の一助となれば幸いである。

註

- (1) : 岩手県埋蔵文化財センターの調査により、弥生時代に属する10棟の竪穴住居が検出されている(馬場野Ⅱ遺跡一昭和58年度現地説明会資料一による)。本報告は、昭和61年刊行予定。
- (2) : 西台畑遺跡や荻ノ口遺跡のような明瞭な碗文ではなく、谷起島遺跡(工藤：1982)

の壺に似た形のモチーフがある。

- (3) : 盛岡市教育委員会の調査による。報告は昭和61年刊行予定。同遺跡はかつて岩手県埋蔵文化財センターで調査した経過がある(上野他:1980)。盛岡市教育委員会の調査は岩手県埋蔵文化財センターの調査区とは若干地点が異なるという。紫VI遺跡については盛岡市教育委員会、八木光則、千田和文両氏に協力をいただいた。
- (4) : この種の土器については青森県埋蔵文化財センター岡田康博氏はじめ、同センターの方々に種々御教示をいただいた。記して感謝申し上げます。
- (5) : (1)と同じ。
- (6) : 岩手県内ではこの時期の土器の細分は未だなされていない。最も古い土器の一群を含めた始現期の検討が必要である。江釣子村葦屋敷遺跡・一関市谷起島遺跡の一部の資料がそれに相当する可能性が高い。
- (7) : (3)と同じ。
- (8) : 個人蔵。清水野遺跡の縄文時代に関しては、草間の報文がある(草間:1968)。
- (9) : これらの土器は一応「赤穴式」と呼ばれているが、赤穴洞窟の資料は江坂と小田野の紹介した少量の資料しか知られていない。近年、一戸町上野遺跡などで比較的多数の資料が得られているが、組成や文様構成など未だ不明な点が多い。
- (10) : 谷起島式土器については将来細分が可能となろう。最も一般的に用いられる変形工字文にしても、谷起島遺跡などで見られる単位の縞目にある2個一対の貼瘤は、湯舟沢では全く見られない、などの差がある。その際は長坂下遺跡・葦屋敷遺跡・君成田IV遺跡などの資料が重要な役割を果たすと考えられる。

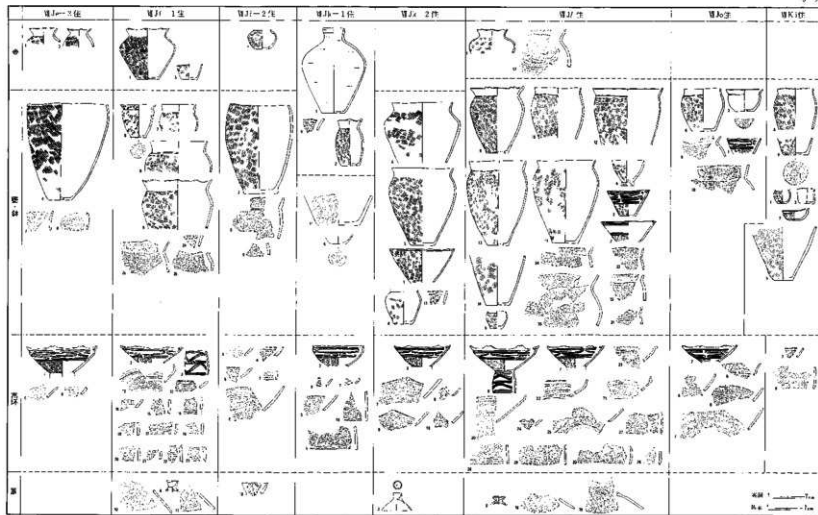
1986・1・16

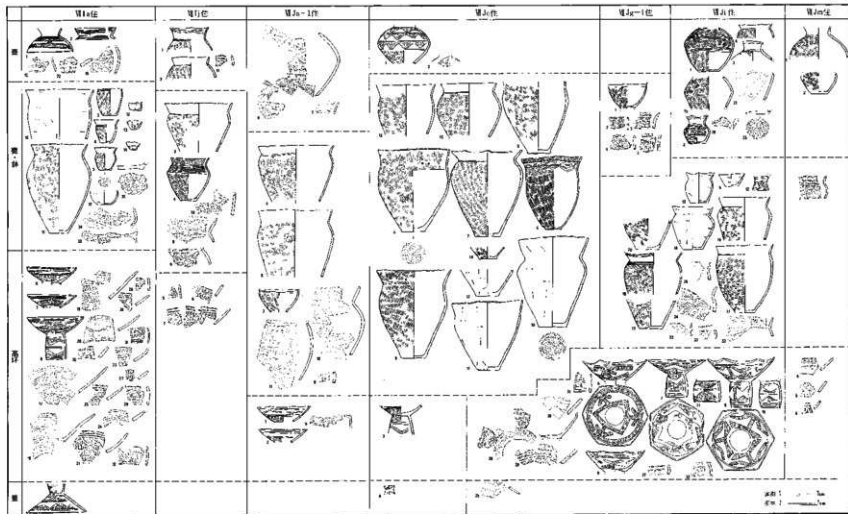
引用参考文献 (五十音順)

- 相原 謙二:1979 「大渡野遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』 PP300~416 岩手県教育委員会
- 伊藤 隆夫:1965 「長坂下遺跡出土の合口土器について」『岩手史学研究』47 PP57~62 岩手史学会
- 伊藤 玄三:1958 「仙台市西台畑出土の弥生式土器」『考古学雑誌』44-1 PP11-28
- 同 :1960 「宮城県青木の弥生式遺跡と出土土器」『東北考古学』1 PP 9~23
- 伊藤 鉄夫:1969 「水沢市の歴史—平安以前—」水沢市教育委員会
- 同 :1973 「沼ノ上遺跡調査報告書」江刺市教育委員会
- 伊東 信雄:1954 「岩手県佐倉河村発見の弥生式土器」『古代学』3-2 PP144~154 古代学協会
- 同 :1960 「東北地方北部の弥生式土器」『文化』24-1 PP40~64 東北大学文学会
- 同 :1968 「東北地方Ⅱ」『弥生式土器集成』2 PP126~128 日本考古学協会

- 同：1974 「弥生文化」『水沢市史』1 PP291～346 水沢市
- 岩本 義雄・三宅 徹他：1979 「宇鉄II遺跡発掘調査報告書」『青森県郷土館調査報告』6 青森県郷土館
- 上野 猛・工藤 利幸：1980 「紫VI遺跡」『御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書』PP543～588 健岩手県埋蔵文化財センター他
- 江坂 輝彦：1953 「岩手県小本川流域の洞窟遺跡」『貝塚』45 PP 1～3 土曜考古学会
- 遠藤 勝博：1981b 「大瀨遺跡」『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書』PP243～327 健岩手県埋蔵文化財センター
- 遠藤 勝博・村上 達夫他：1983 「君成田IV遺跡発掘調査報告書」『岩手県埋蔵文化財調査報告書62』健岩手県埋蔵文化財センター
- 遠藤 輝大：1978 「原始時代」『一関市史』1 PP383～457 一関市
- 岡田 康博：1984 「青森県内の弥生時代終末期の土器について」『遺址』4 PP13～19 成田滋彦
- 奥山 潤・安保 彰：1963 「十和田湖西南部（小坂館山）の弥生式文化とその後続形態（上・下）」『考古学雑誌』49-2（PP47～62）、49-3（PP44～55）
- 小田野 哲憲・熊谷 常正：1979 「第2次谷起島遺跡発掘調査概要」一関市教育委員会
- 小田野 哲憲：1982 「弥生時代」『岩手の土器』PP115～130 岩手県立博物館
- 小田野 哲憲・高田 和徳：1983 「上野B遺跡」『一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』IV PP173～313 一戸町教育委員会・建設省岩手工事事務所
- 小野田 哲憲：1985 「和井内東遺跡出土の弥生式土器」『日高見国』PP235～247 『菊池啓次郎学兄還暦記念会』
- 葛西 勲：1976 「井沢遺跡」平賀町教育委員会（青森県）
- 加藤 孝：1968 「宮戸島貝塚寺下用地区出土品に見られる弥生文化」『仙台湾周辺の考古学的研究』PP83～99 宮城教育大学歴史研究会
- 加藤 道男：1982 「青木畑遺跡」『宮城県文化財調査報告書』85 宮城県教育委員会
- 北林 八州晴他：1976 「千歳（13）遺跡発掘調査報告書」『青森県埋蔵文化財調査報告書』27 青森県教育委員会
- 草間 俊一：1968 「岩手県紫波郡矢幅村清水野遺跡」『日本考古学年報』16 日本考古学協会
- 草間 俊一・及川 洵他：1972 「長谷堂貝塚」岩手教育委員会
- 工藤 武：1982 「第4次谷起島遺跡発掘調査概報」一関市教育委員会
- 工藤 竹久：1968 「下北半島尻屋念仏間遺跡」『考古学ジャーナル』23 PP21～23
- 工藤 泰博・鈴木 克彦他：1977 「烏海山遺跡発掘調査報告書」『青森県文化財調査報告書』32 青森県教育委員会
- 後藤 勝彦・及川 洵他：1968 「関谷洞窟」『大船渡市教委社教シリーズ』14 大船渡市教育委員会
- 近藤 宗光・橋沢 潤郎：1985 「小井田遺跡発掘調査報告書」『岩手県埋蔵文化財調査報告書85』健岩手県埋蔵文化財センター
- 佐藤 信行他：1978 「上ノ原A遺跡」『一迫町文化財調査報告書』3 一迫町教育委員会 弥生時代研究会
- 佐藤 正彦・小田野 哲憲他：1984 「山崎遺跡発掘調査報告書」健前高田市教育委員会・岩手県土木部

- 杉原 荘介：1936 「下野野沢遺跡及び陸前斜形圓貝塚出土の弥生式土器の位置に就て」『考古学』7—8 PP370—384 考古学会
- 杉原 荘介・神沢 勇一他：1975 「弥生式土器」『日本の美術』44 小学館
- 鈴木 克彦：1978 「青森県における弥生時代終末期の土器文化」『考古風土記』3 PP29—40
- 鈴木 孝志：1958 「一関市殿美浄光沢の弥生式土器」『岩手史学研究』28 PP57—58
- 鈴木 隆英：1979 「大明神遺跡」『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』II PP193—228 岩手教育委員会
- 須藤 隆：1969 「青森県大畑町二枚橋遺跡出土の土器・石器について」『考古学雑誌』56—2 PP10—67 日本考古学会
- 同：1970 「秋田県大曲市宇津ノ台遺跡の弥生式土器について」『文化』33—3 PP72—109 東北大学文学会
- 同：1982 「北辺の弥生文化」『縄文土器大成』5 PP130—134 講談社
- 同：1983 a 「東北地方の初期弥生土器—山王田層式—」『考古学雑誌』68—3 PP1—53
- 同：1983 b 「弥生文化の伝播と恵山文化の成立」『考古学論叢』PP309—360 芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会
- 関 豊：1980 「岩手県二戸地方出土の弥生式土器二例」『考古風土記』5 PP213—214
- 芹沢 長介：1960 「石器時代の日本」築地書館
- 高田 和徳：1984 「上野遺跡」『一戸町文化財調査報告書』7 一戸町教育委員会
- 同：1985 a 「上野遺跡」『一戸町文化財調査報告書』13 一戸町教育委員会
- 高橋 義介：1981 a 「火行塚遺跡」『二戸バイパス関連遺跡発掘調査報告書』PP329—458 磐岩手県埋蔵文化財センター
- 高橋 信雄・三浦 謙一他：1979 a 「力石II遺跡」『主要地方道一関・北上線関連遺跡発掘調査報告書』PP15—121 磐岩手県埋蔵文化財センター
- 同：1979 b 「鬼II遺跡」『主要地方道一関・北上線関連遺跡発掘調査報告書』PP125—152 磐岩手県埋蔵文化財センター
- 高橋 文明：1983 「蔵屋敷遺跡」『江釣子遺跡群』江釣子村教育委員会
- 高橋 与右衛門・大原一則：1984 「上斗内III・IV・V遺跡発掘調査報告書」『磐岩手県埋蔵文化財調査報告書71』磐岩手県埋蔵文化財センター
- 武田 良夫：1978 「岩手県における弥生式土器について」『考古風土記』3 鈴木文彦
- 橋 善光：1971 「青森県原念仏間の弥生式土器について」『北海道考古学』7 PP39—43 北海道考古学会
- 坪井 清足：1953 「福島県犬山道跡の弥生式土器」『史林』36—1 PP50—63 京都大学
- 坪井 正五郎：1899 「日本石器時代の網代形編み物」『東京人類学会雑誌』40 PP440—444 東京人類学会
- 松沢 潤郎・小平 忠孝：1983 「小井山III遺跡発掘調査報告書」『磐岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書69』磐岩手県埋蔵文化財センター
- 鳥畑 寿夫：1955 「岩手県西磐井郡谷起島遺跡出土土器について」『上代文化』25 PP37—42 国学院大学考古学会





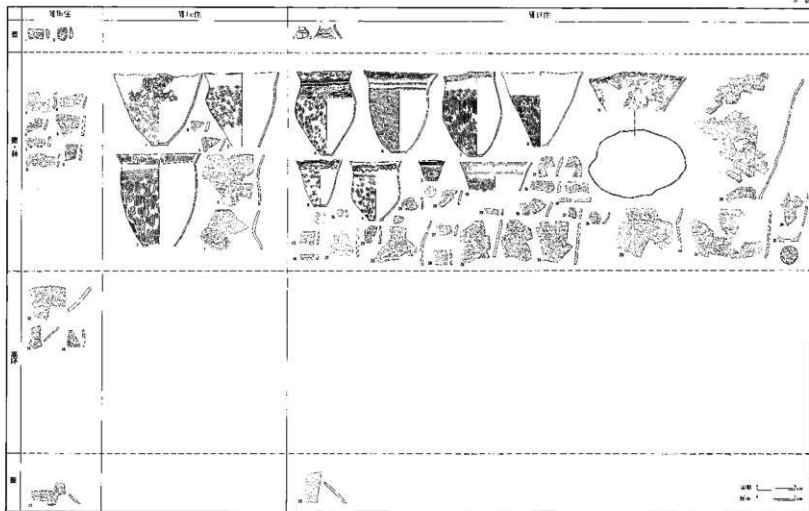
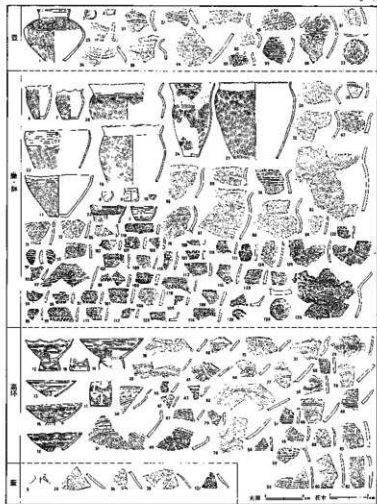


图177 濠沟泥层出土器



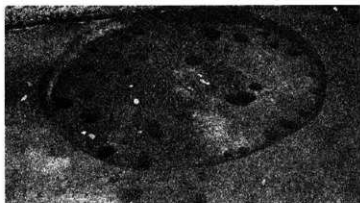
— 129 — 第178回 瀬舟河遺構出土器

- 林 謙作・小田野 哲憲：1977 「谷石島遺跡第一次発掘調査報告書」 一関市教育委員会
- 平井 進・石川 長喜：1984 「森口遺跡発掘調査報告書」「岩手県埋文センター文化財調査報告書78」 鶴岩
手県埋蔵文化財センター
- 三上 昭：1980 「墳館遺跡」「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書」Ⅲ PP221～322 岩手県教育委
員会
- 三浦 圭介他：1985 「垂柳遺跡」「青森県埋蔵文化財調査報告書」88 青森県教育委員会 垂柳遺跡発掘調査
会
- 三浦 謙一・佐々木 勝他：1984 「長者屋敷遺跡発掘調査報告書（Ⅲ）」「岩手県埋蔵文化財センター文化財
調査報告書77」 鶴岩手県埋蔵文化財センター
- 村上 達夫・佐々木清文：1983 「上野山遺跡発掘調査報告書」「岩手県埋文センター文化財調査報告書67」 鶴
岩手県埋蔵文化財センター・建設省三陸国道工事事務所
- 山内 清男：1925 「石器時代にも稲あり」「人類学雑誌」40-5 PP181～184 東京人類学会
同 1930 「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄文式土器の終末」「考古学」1-3 PP139～157
同 1979 「日本先史土器の縄紋」
- 山口 了紀：1978 「江刺市沼の上遺跡」 鶴岩手県埋蔵文化財センター
- 吉田 努・千葉 周秋：1980 「上平沢新田遺跡」「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書」Ⅲ
PP129～218 岩手県教育委員会
- 四井 謙吉：1978 「野敷遺跡」「東北縦貫自動車道関係遺跡発掘調査報告書」 PP 2～94 鶴岩手県埋蔵文
化財センター

3 区写真図版



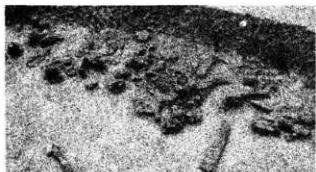
写真図版1 3区航空写真



全景



埋土
断面



炭火材出土状況

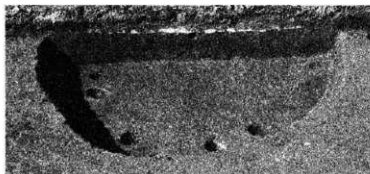


炉址

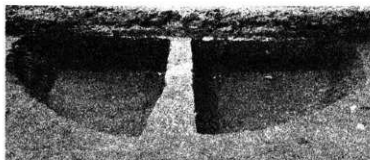


遺物出土状況

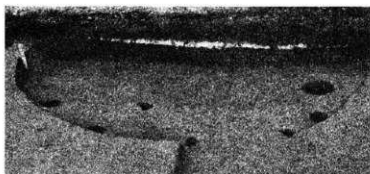
写真図版2 VIIa 竪穴住居址



Ⅷ1b住
全景



埋土
断面

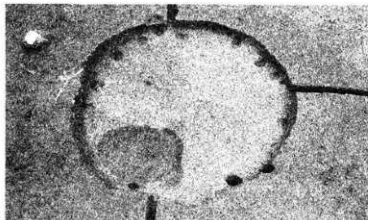


Ⅷ1c住
全景



埋土
断面

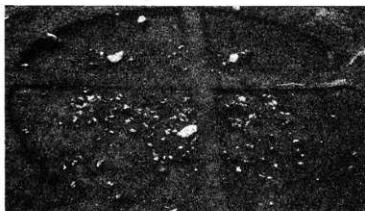
写真図版3 Ⅷ1b・Ⅷ1c雙穴住居址



全景

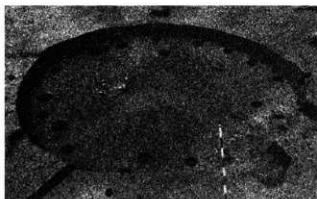


埋土
断面

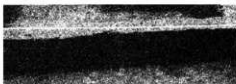


遺物
出土状況

写真図版4 VII-1 竪穴住居址



全景



埋土断面



遺物出土状況



炉址



炭化材出土状況

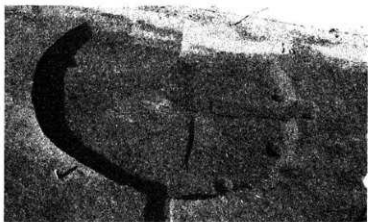
写真図版5 VIIj 雙穴住居址



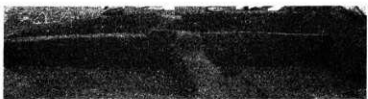
ⅦJa-1住
全景



炉址

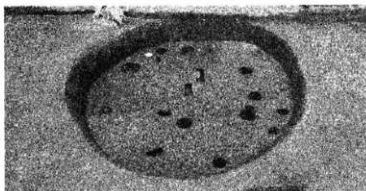


ⅦJa-2住
全景



埋土
断面

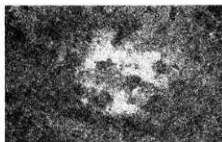
写真図版6 ⅦJa-1・2雙穴住居址



全景



埋土
断面



炉址



遺物出土状況

写真図版7 VII Jc 竪穴住居址

ⅤJf-1住
全景



ⅤJf-2住
全景



ⅤJe-1住
全景

ⅤJf-1住
全景

ⅤJe-2住
全景



ⅤJe-2住
埋土断面



写真図版8 ⅤJe-1-2, ⅤJf-1-2竪穴住居址

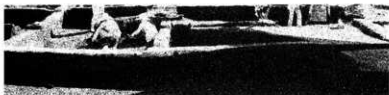


Ⅵ J a-1住

Ⅵ J e-1住 Ⅵ J f-1住

Ⅵ J e-2住 Ⅵ J f-2住

全景



埋土
断面

Ⅵ J f-1住

Ⅵ J e-1住



Ⅵ J f-1住
炉址



Ⅵ J f-1住
遺物出土状況



Ⅵ J f-1住遺物出土状況

写真図版9 Ⅵ J e-1-2, Ⅵ J f-1-2竪穴住居址



VII Jg-1·2住
全景



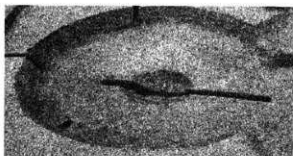
VII Jg-1住
炉址



全景

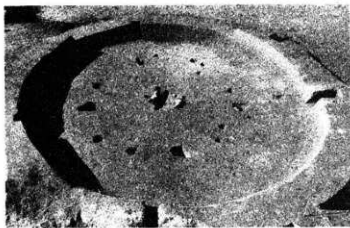


VII Jg-2住 炉址

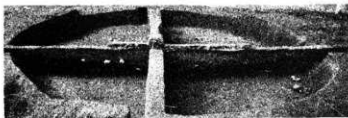


VII Jg-3住
全景

写真图版10 VII Jg-1·2·3竖穴住居址



全景



埋土断面



炉址

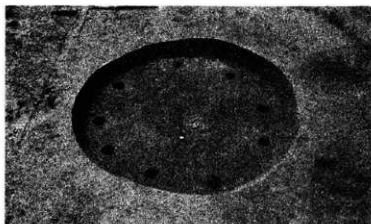


炉址断面



遺物出土状況

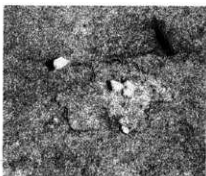
写真図版11 VII J i 竪穴住居址



全景



埋土
断面

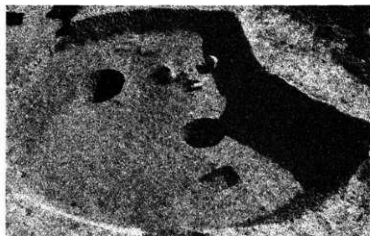


炉址



遺物出土状況

写真図版12 VII J k-1 竪穴住居址



Ⅷ Jk-2住
全景



Ⅷ J1住全景



炉址

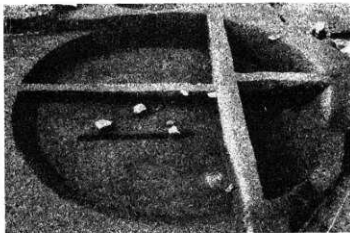


Ⅷ Jo住全景



炉址

写真図版13 Ⅷ Jk-2, Ⅷ J1, Ⅷ Jo竪穴住居址



全景



埋土
断面



炭化材出土状況

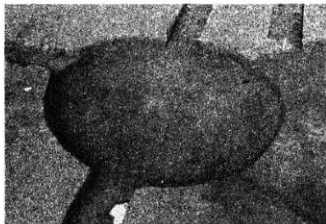


炉址



遺物
出土状況

写真図版14 Ⅷ J m 竪穴住居址



Ⅶ Jn-1住全景



炉址



Ⅶ Jn-2住全景

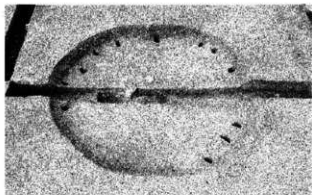


炉址

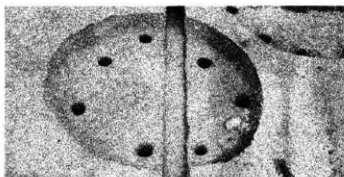


Ⅶ Jn-3住
全景

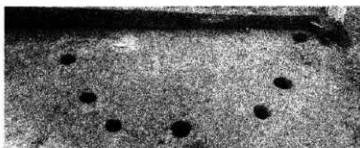
写真图版15 Ⅶ Jn-1·2·3 竪穴住居址



ⅧJp-1住
全景

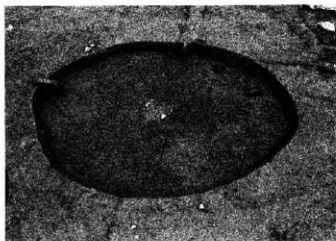


ⅧJp-2住
全景



ⅧJp-3住
全景

写真図版16 Jp-1・2・3雙穴住居址



全景



埋土
断面



伊址断面



遺物出土状況



全景



ⅤJ 配石

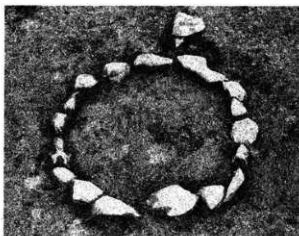
遺物出土状況



ⅤIh 土器埋設炉



ⅤJn 石圈炉



ⅤKi
石圈炉

写真図版18 配石遺構・炉址



第1号ビット



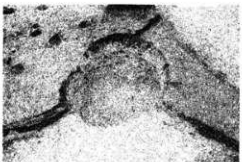
第8号ビット



第2号ビット



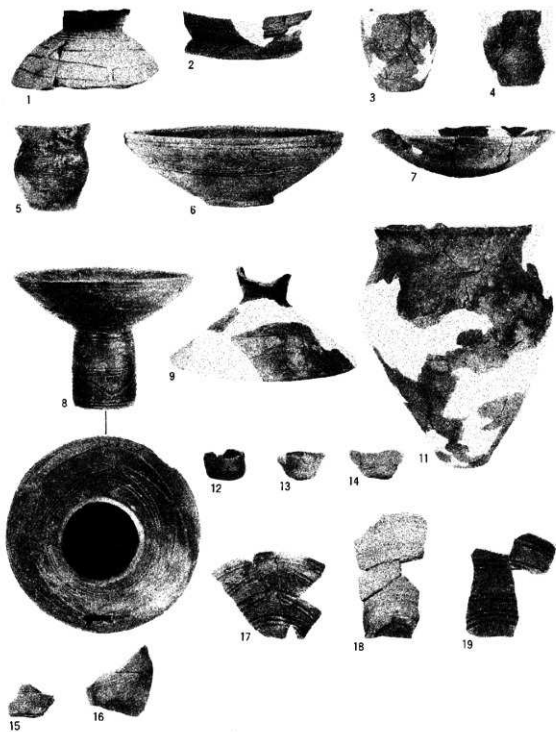
第9号ビット



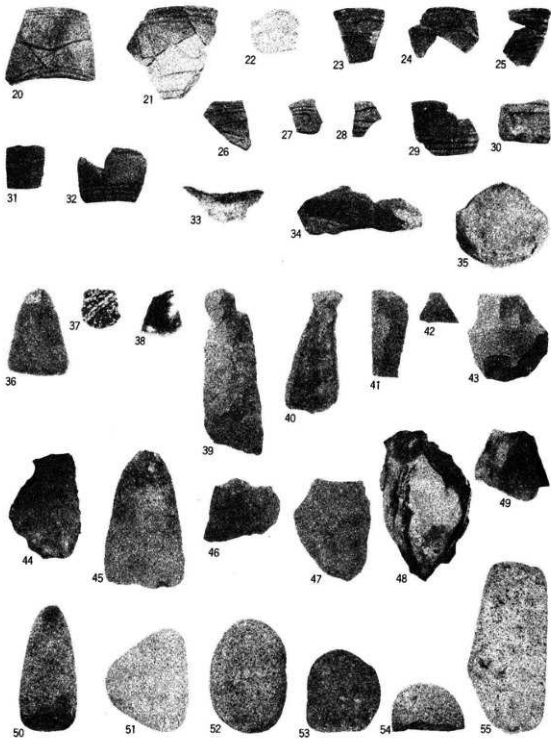
第6号ビット



第10号ビット



写真図版20 VIIa型穴住居址出土遺物(1)



写真図版21 VIIa 竪穴住居址出土遺物(2)



写真図版22 Ⅷ1b 竪穴住居址出土遺物



1



2



3



4



5



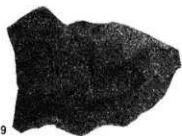
6



7



8



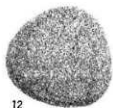
9



10



11

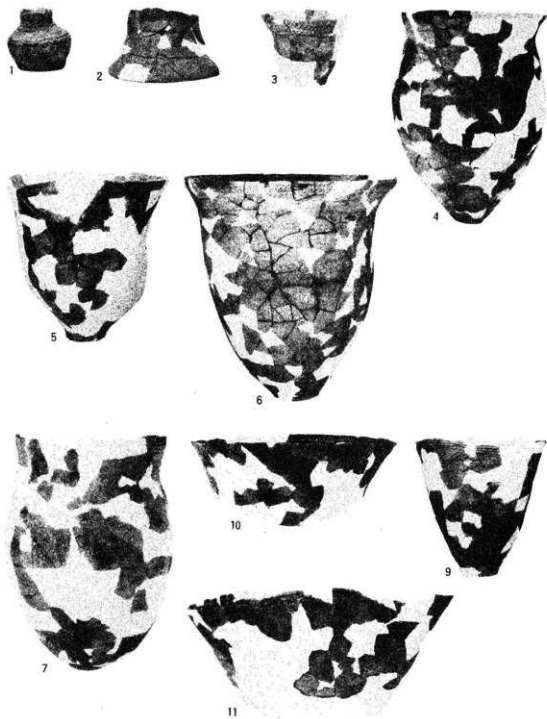


12



13

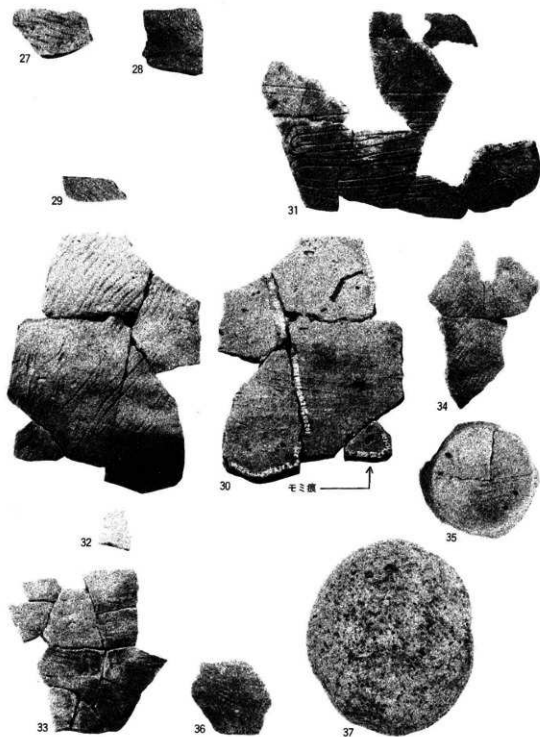
写真图版23 ⅤIc 竖穴住居址出土遺物



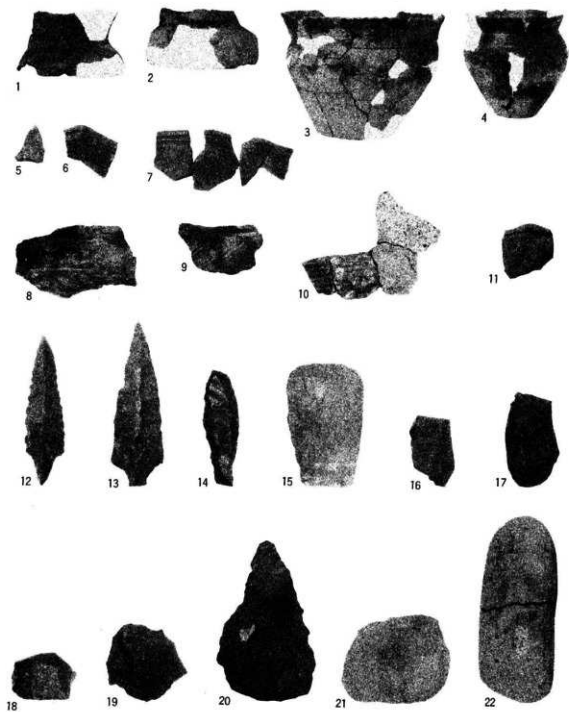
写真图版24 Ⅱf 整穴住居址出土遺物(1)



写真图版25 VII f 竖穴住居址出土遗物(2)



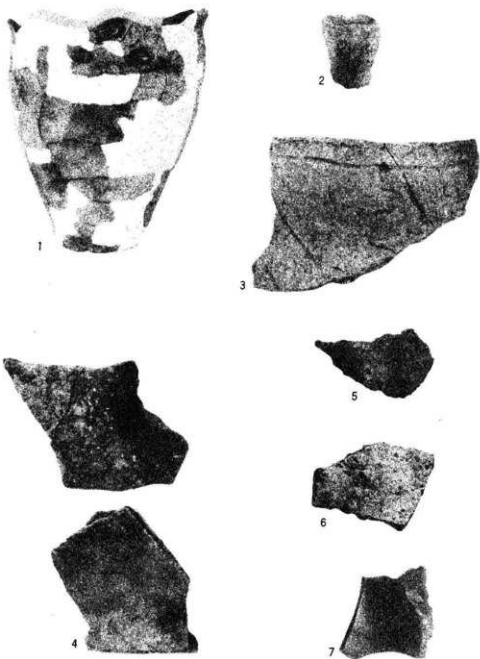
写真图版26 WIf 整穴住居址出土物(3)



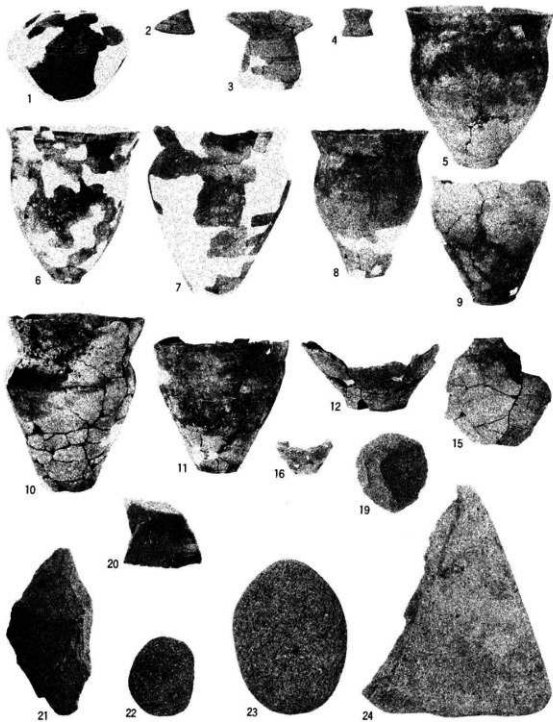
写真図版27 ⅤIj 竪穴住居址出土遺物



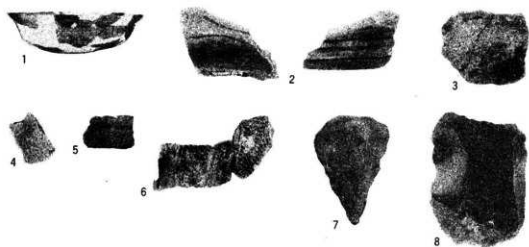
写真図版28 ⅧJa-1 竪穴住居址出土遺物



写真図版29 VII Ja-2 竪穴住居址出土遺物



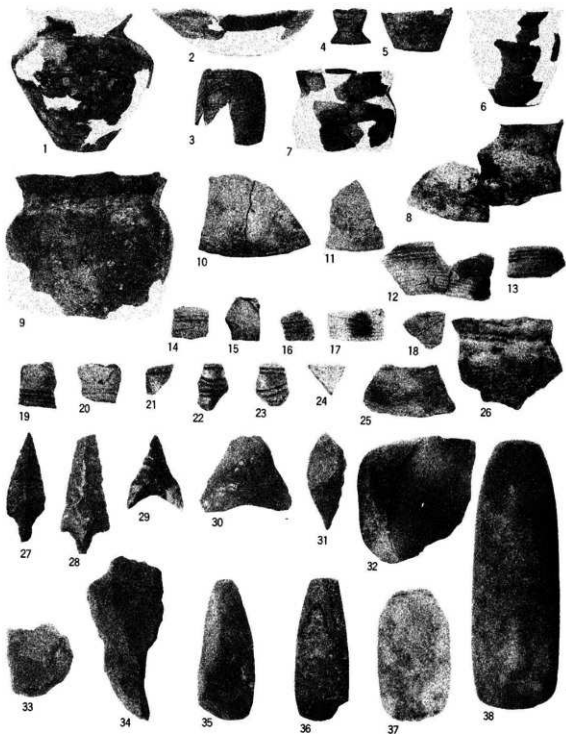
写真图版30 ⅧJc 豎穴住居址出土遺物



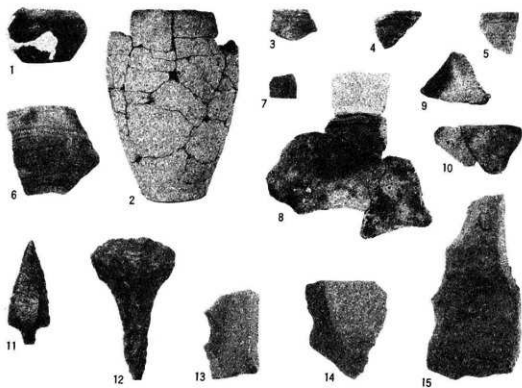
Ⅵ Je-1 竖穴住居址



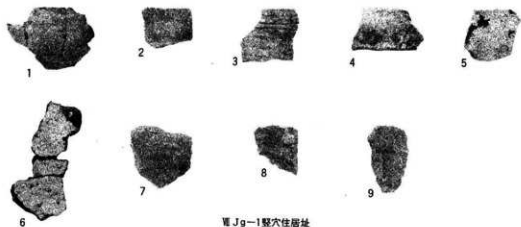
Ⅵ Je-2 竖穴住居址



写真图版32 Ⅵ J f-1 豎穴住居址出土遺物

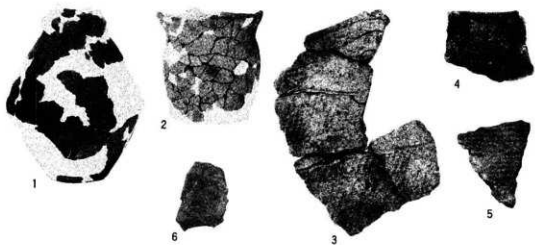


WJf-2 雙穴住居址



WJg-1 雙穴住居址

写真図版33 WJf-2 雙穴住居址・WJg-1 雙穴住居址出土遺物

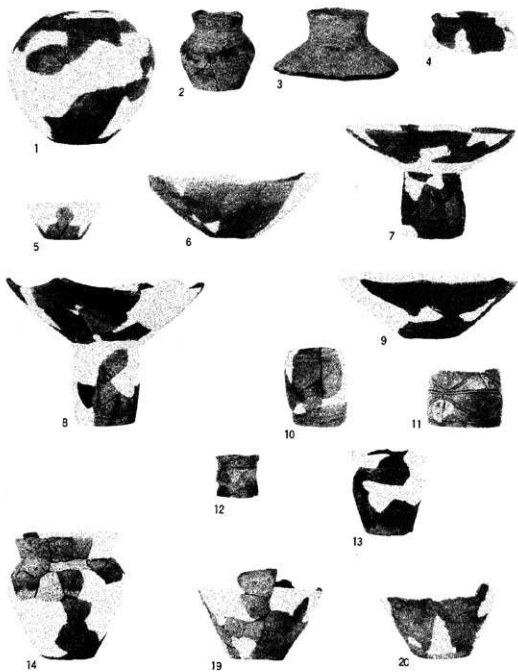


ⅧJg-2 整穴住居址

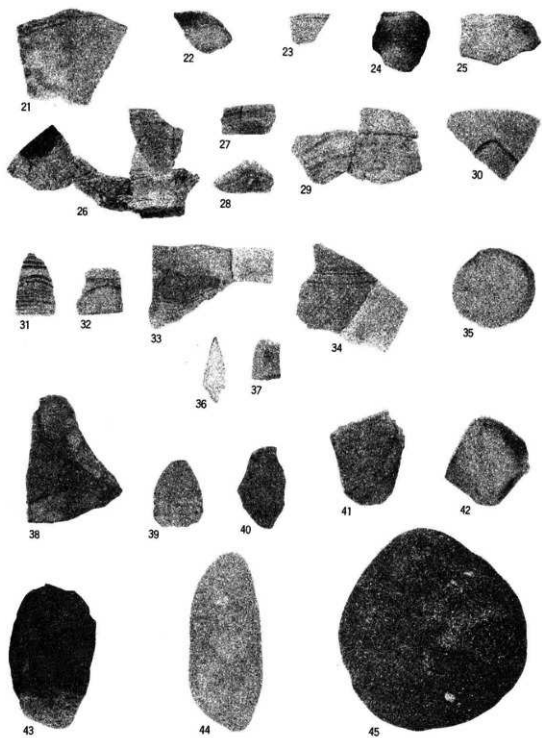


ⅧJg-3 整穴住居址

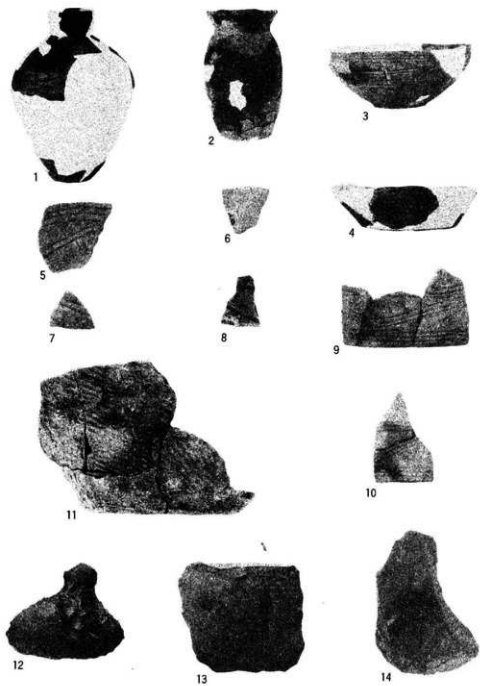
写真图版34 ⅧJg-2 整穴住居址・ⅧJg-3 整穴住居址出土遺物



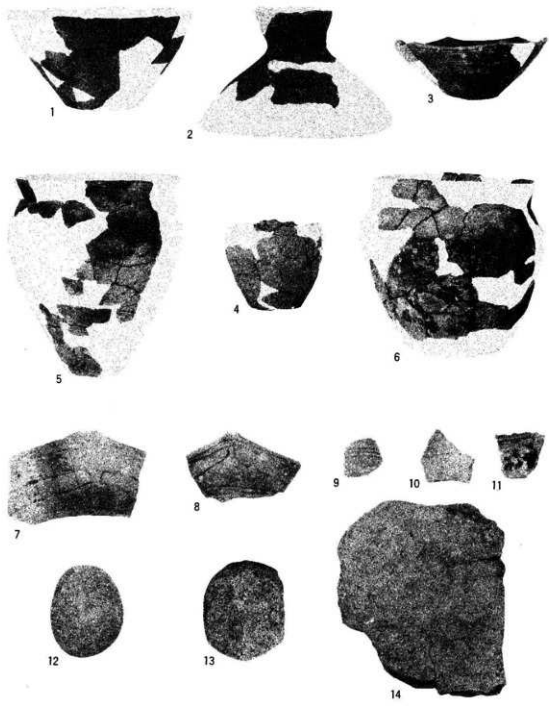
写真図版35 ⅤJ 豎穴住居址出土遺物(1)



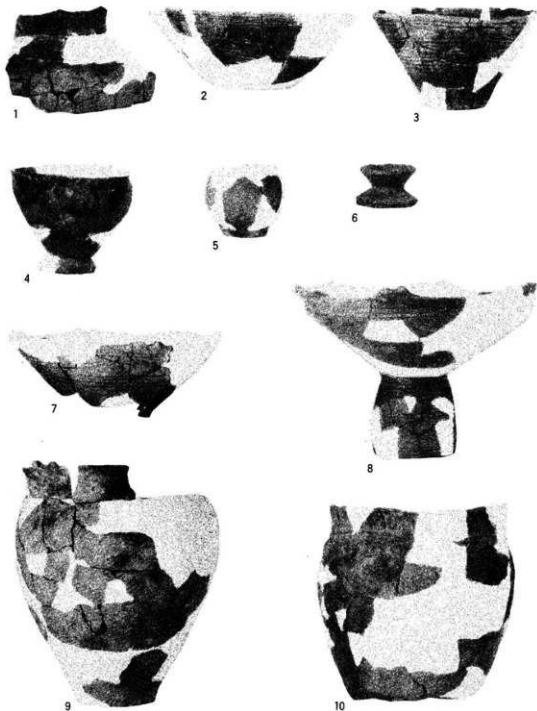
写真図版36 ⅧJ i 雙穴住居址出土遺物(2)



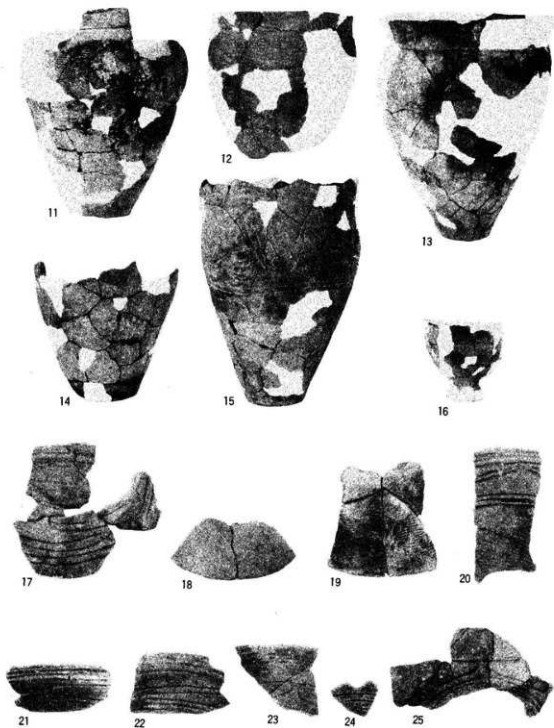
写真図版37 VII Jk-1 竪穴住居址出土遺物



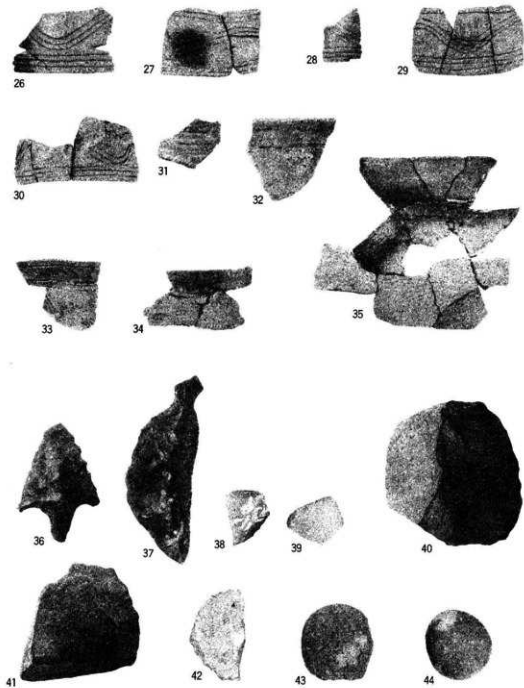
写真図版38 VI J k-2 豎穴住居址出土遺物



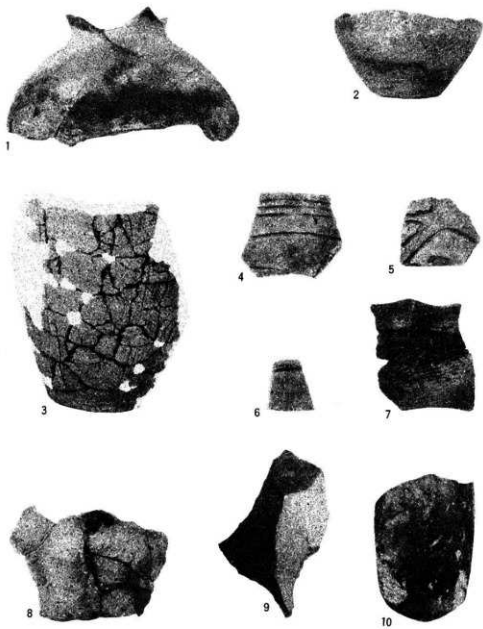
写真図版39 ⅤJ/竪穴住居址出土遺物(1)



写真図版40 ⅧJ/雙穴住居址出土遺物(2)



写真図版41 ⅧJ / 竪穴住居址出土遺物(3)

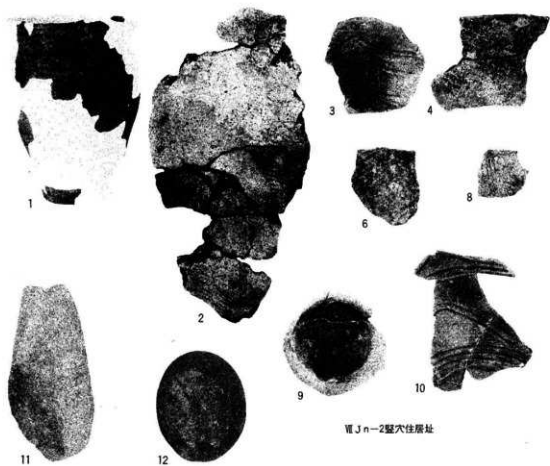


写真図版42 甬Jm壑穴住居址出土遺物

3 区

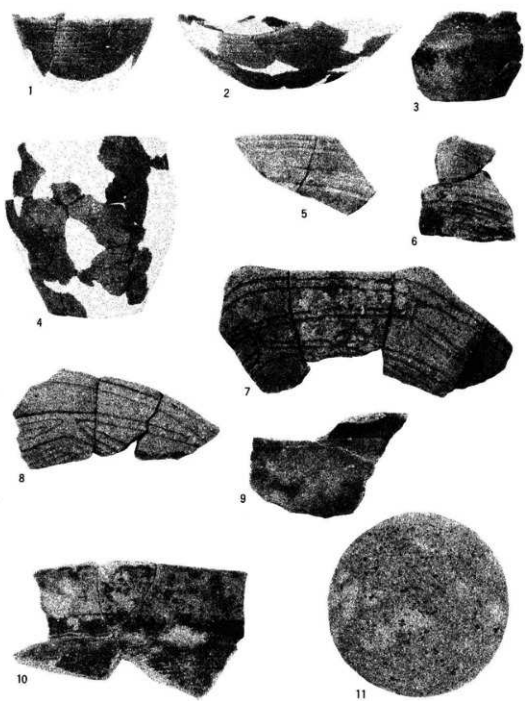


Ⅴ J n-1 整穴住居址

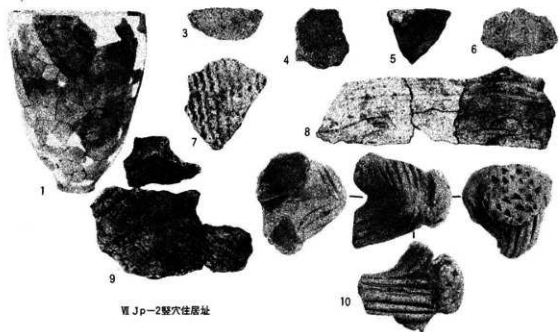
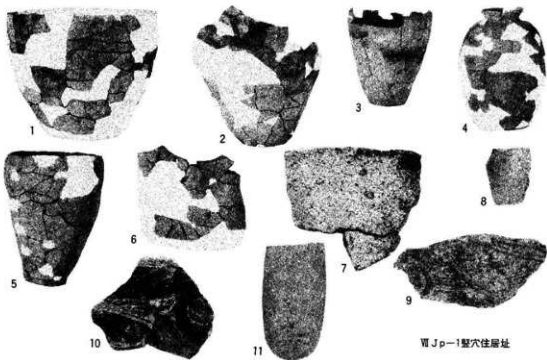


Ⅴ J n-2 整穴住居址

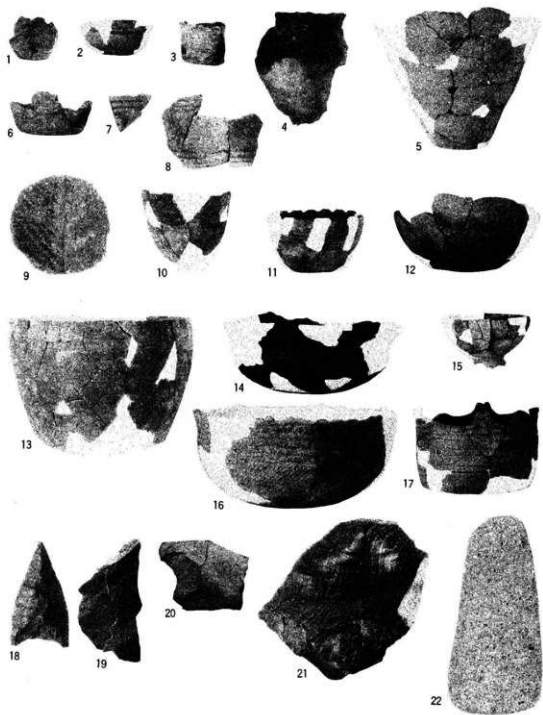
写真図版43 Ⅴ J n-1 整穴住居址・Ⅴ J n-2 整穴住居址出土遺物



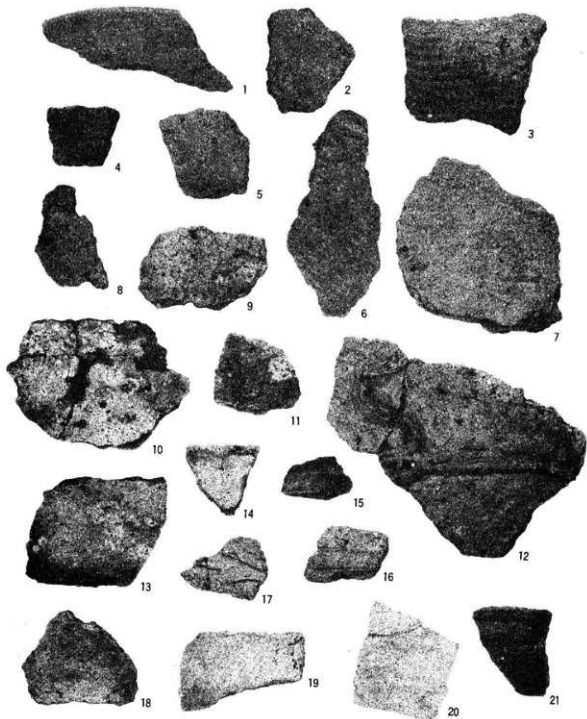
写真図版44 Ⅶ Jo 竪穴住居址出土遺物



写真図版45 WJp-1 整穴住居址・WJp-2 整穴住居址出土遺物

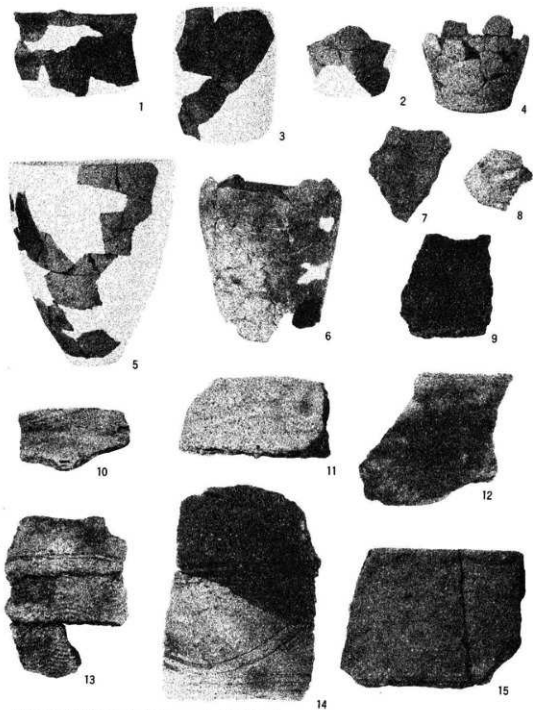


写真図版46 Ⅷ K | 豎穴住居址出土遺物



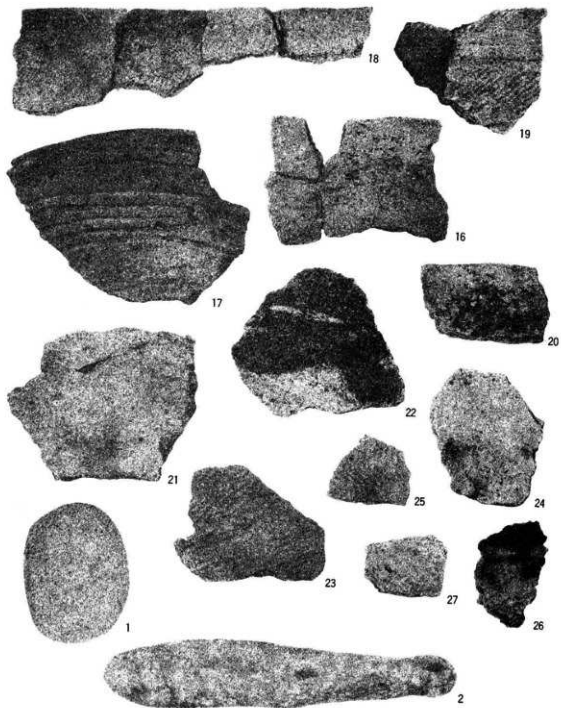
1. 第1号烧土 3. 第8号烧土 8-9. 第27号烧土 11-13. 第33号烧土 14-18. 第35号烧土
 2. 第7号烧土 4-7. 第22号烧土 10. 第29号烧土 12. 第32号烧土 19-21. 第36号烧土

写真图版47 烧土遺構出土遺物



1・9～14. 第4号ビット 4. 埋設炉 6. 第10号ビット
 2・3. 第5号ビット 5. 第9号ビット 7・8. 第1号ビット

写真図版48 ビット・炉出土遺物

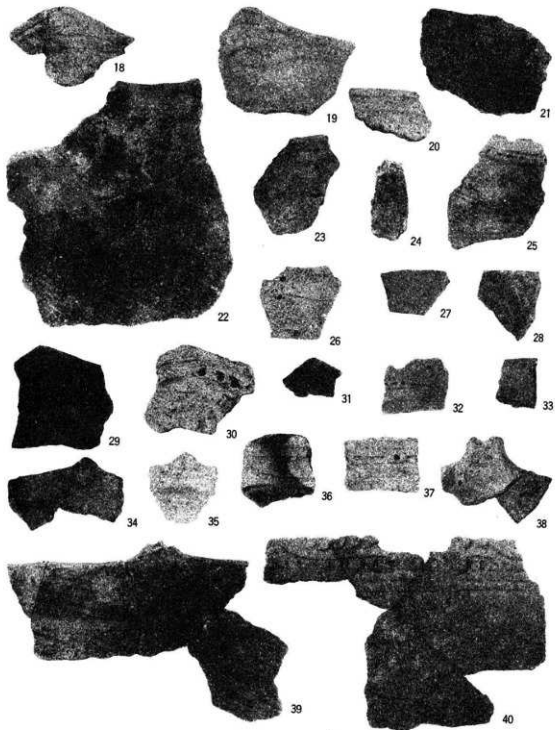


16～19. 第5号ビット 20～25. 第6号ビット 26・27. 第7号ビット 1・2. 配石

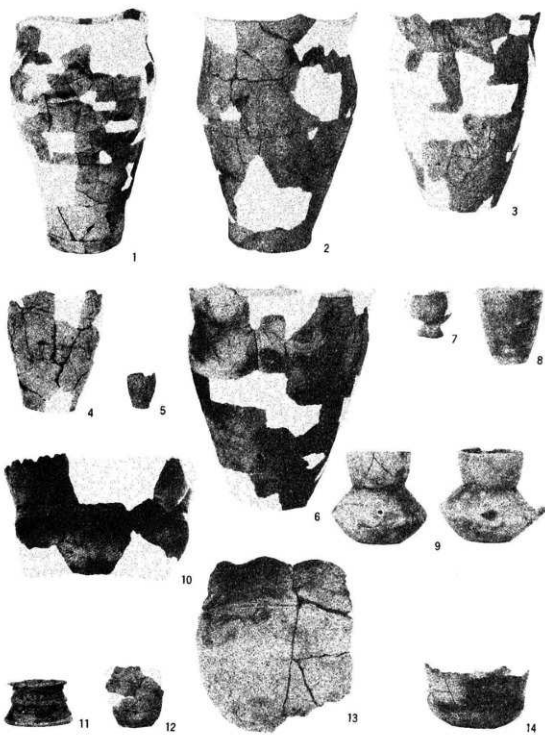
写真図版49 ビット・配石遺構出土遺物



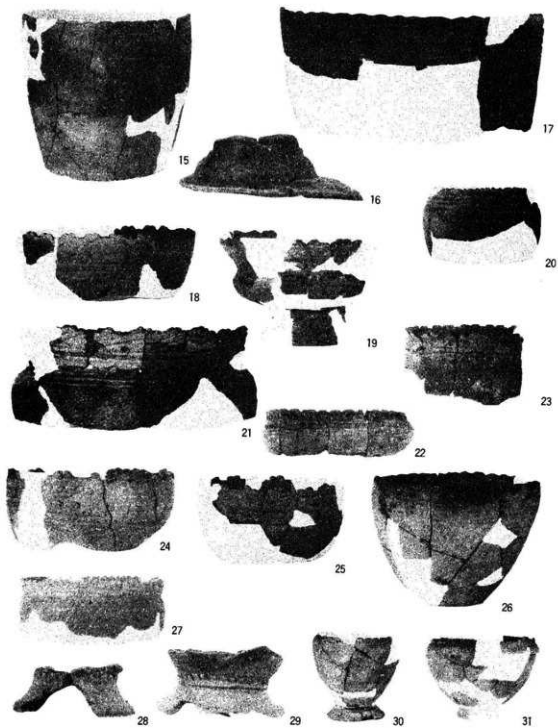
写真図版50 遺物包含層Jブロック出土土器



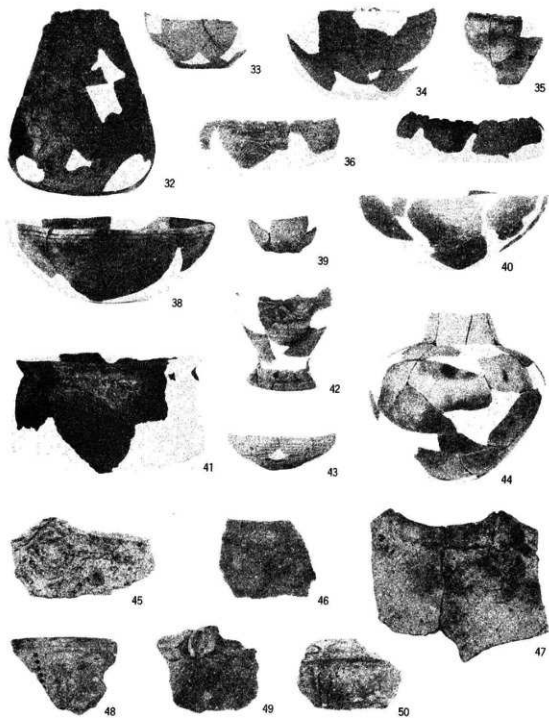
写真図版51 遺物包含層Jブロック出土土器



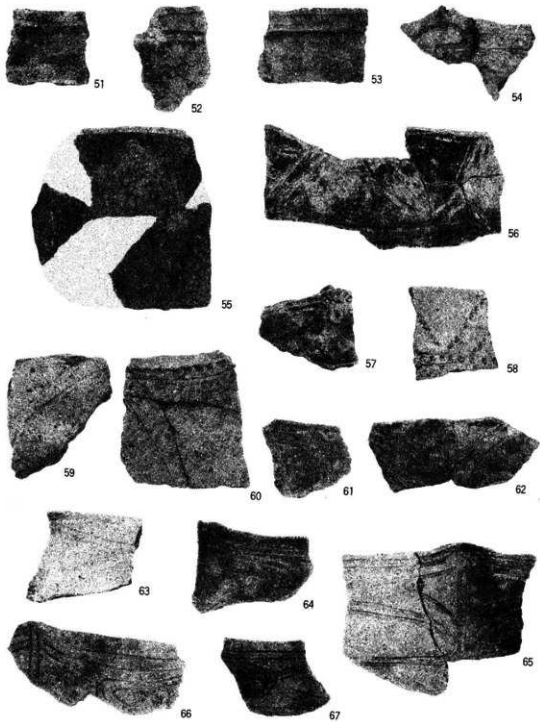
写真図版52 遺物包含層K ブロック出土土器



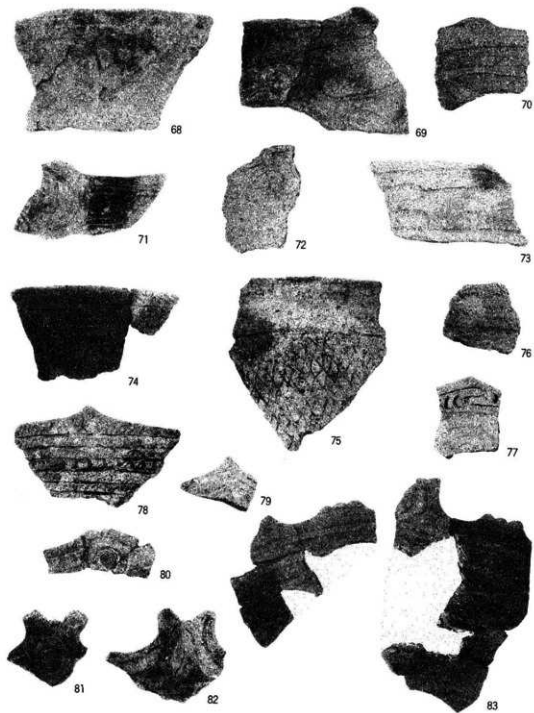
写真図版53 遺物包含層Kブロック出土土器



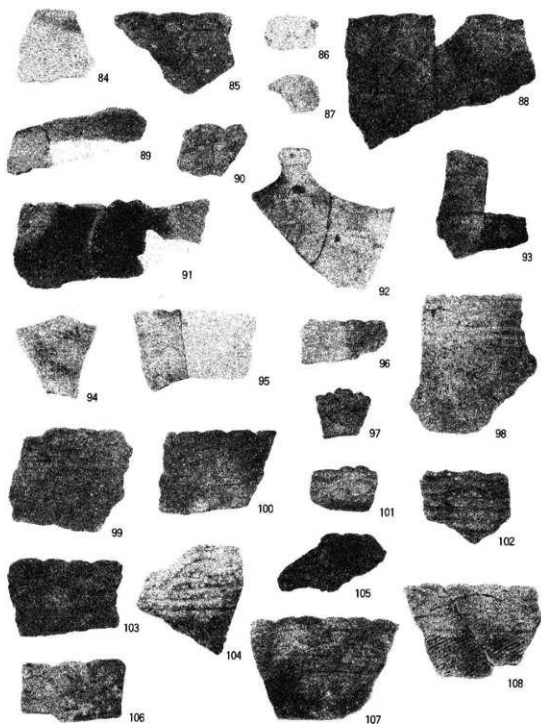
写真図版54 遺物包含層Kブロック出土土器



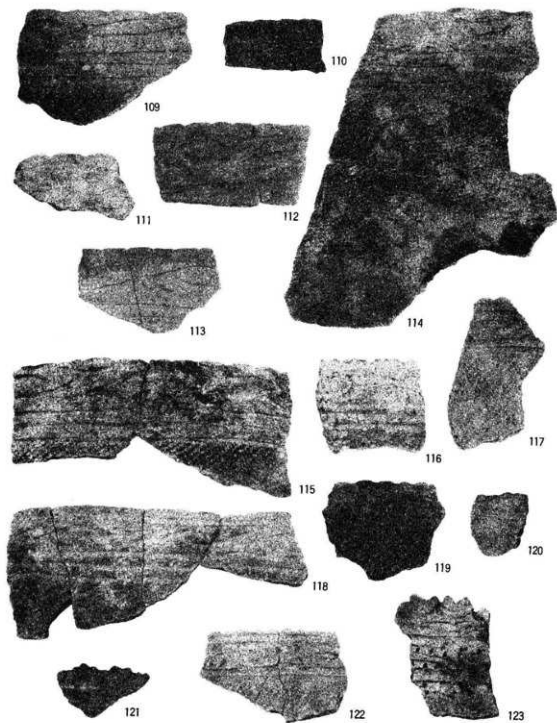
写真図版55 遺物包含層K ブロック出土土器



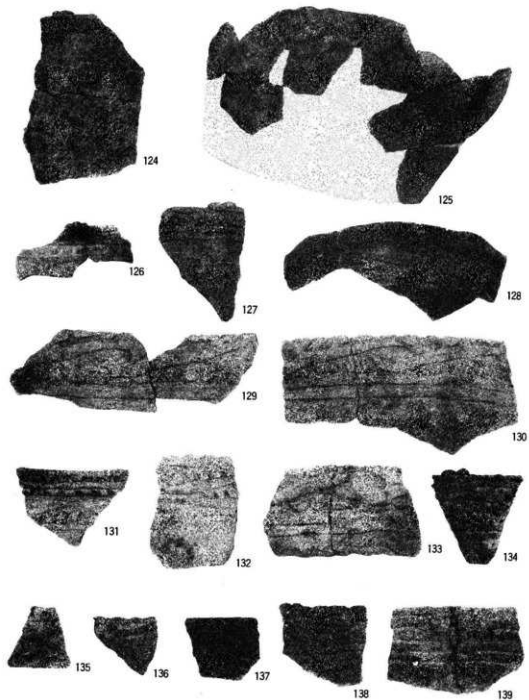
写真図版56 遺物包含層Kブロック出土土器



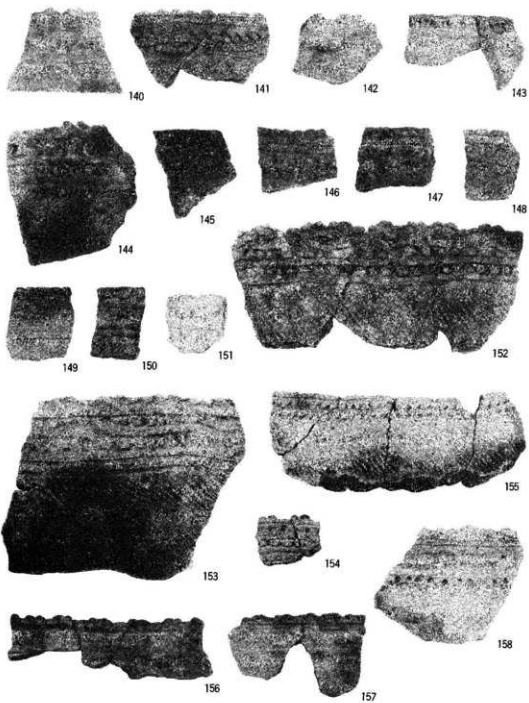
写真図版57 遺物包含層Kブロック出土土器



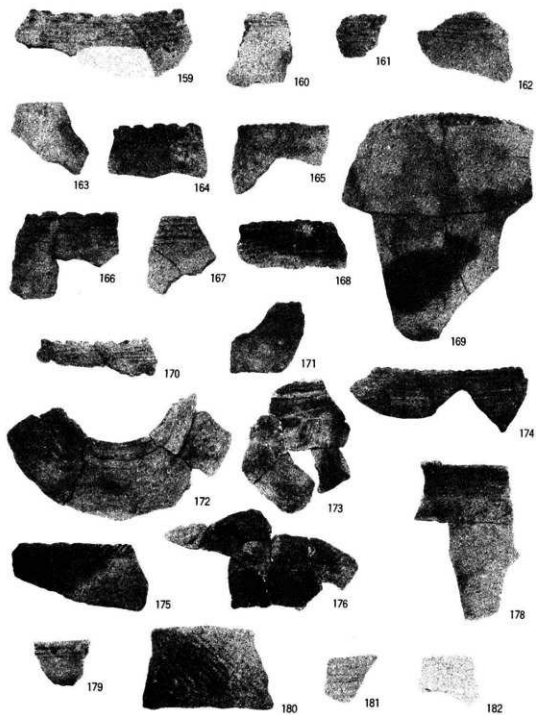
写真図版58 遺物包含層Kブロック出土土器



写真図版59 遺物包含層Kブロック出土土器



写真図版60 遺物包含層K ブロック出土土器



写真図版G1 遺物包含層Kブロック出土土器



写真版62 遺構外出土土器



14



15



16



17



18



19



20



21



22

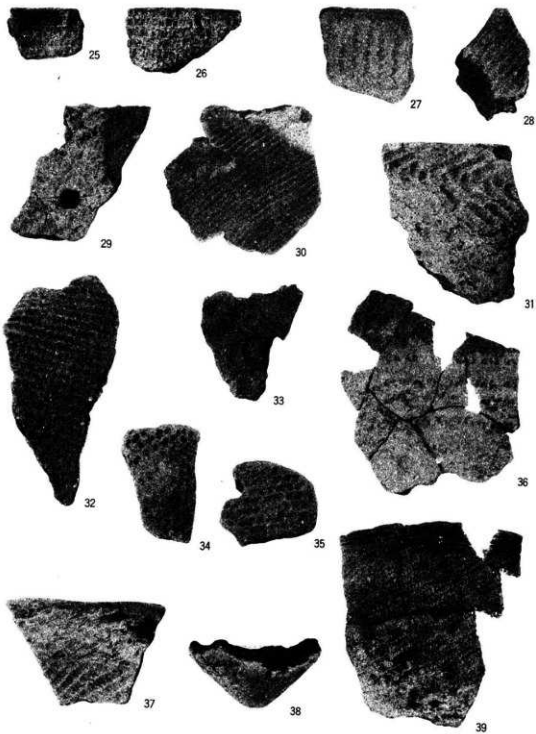


23

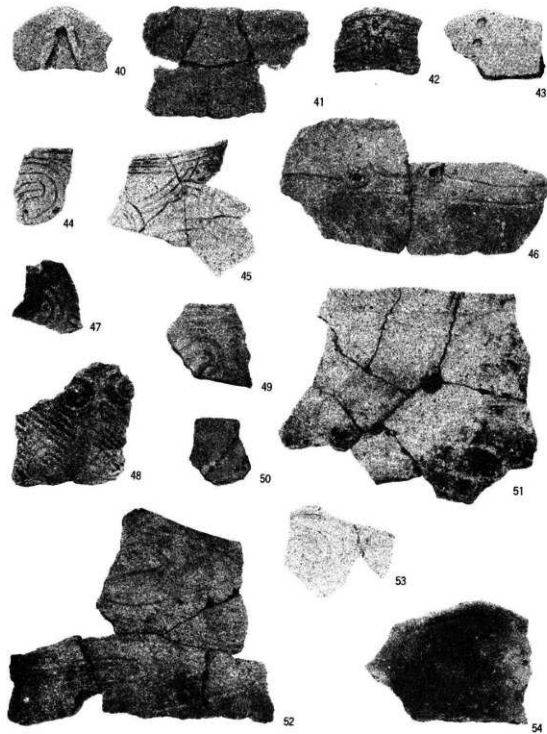


24

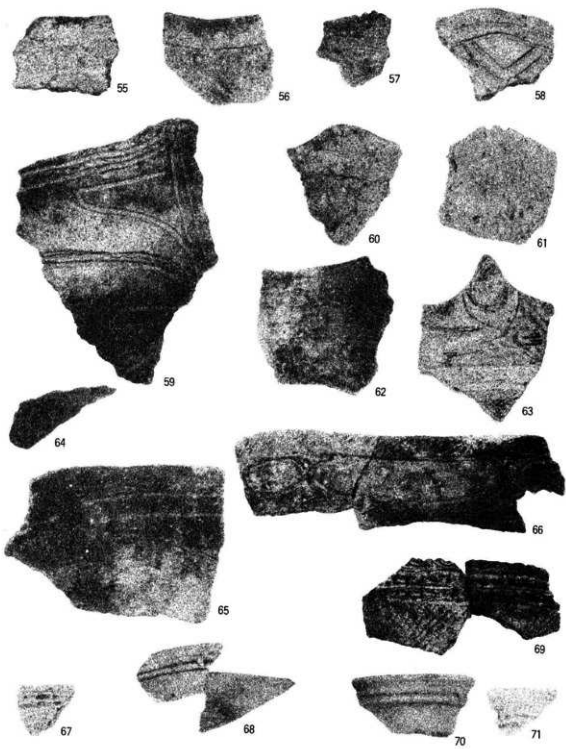
写真図版63 遺構外出土土器



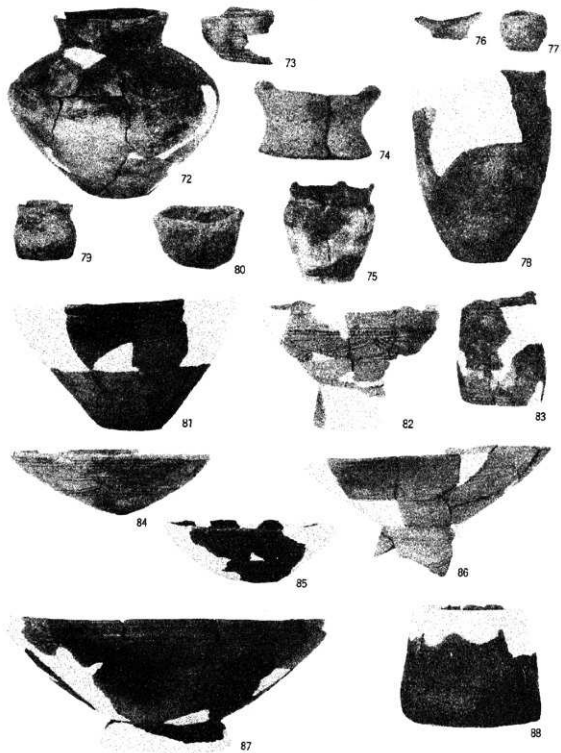
写真図版64 遺構外出土土器



写真図版65 遺構外出土土器



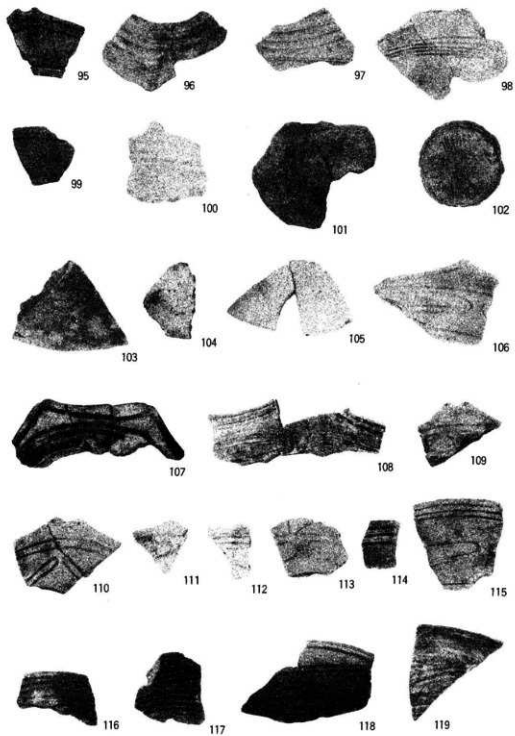
写真図版66 遺構外出土土器



写真图版67 遼構外出土土器



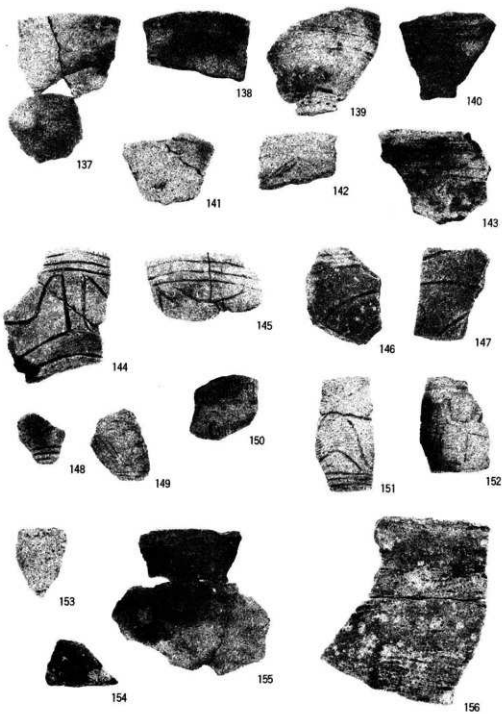
写真図版68 遺構外出土土器



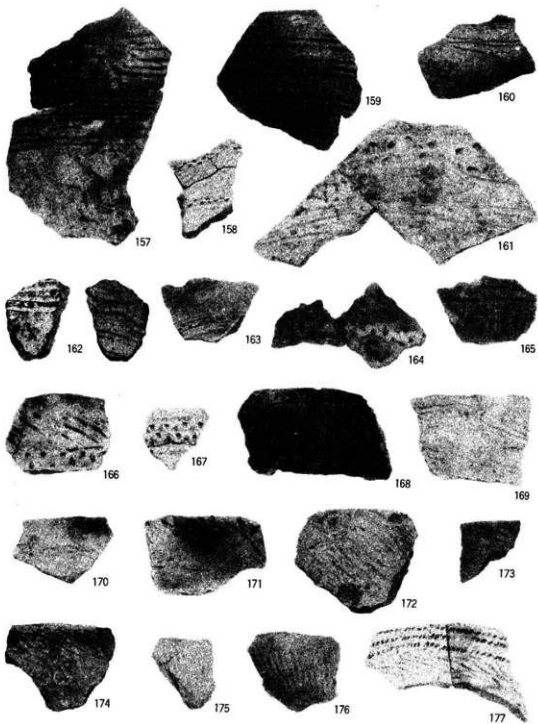
写真図版69 遺構外出土土器



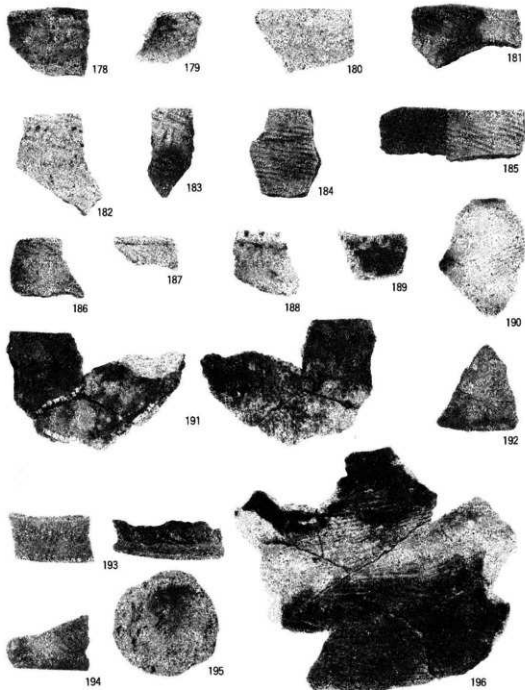
写真図版70 遺構外出土土器



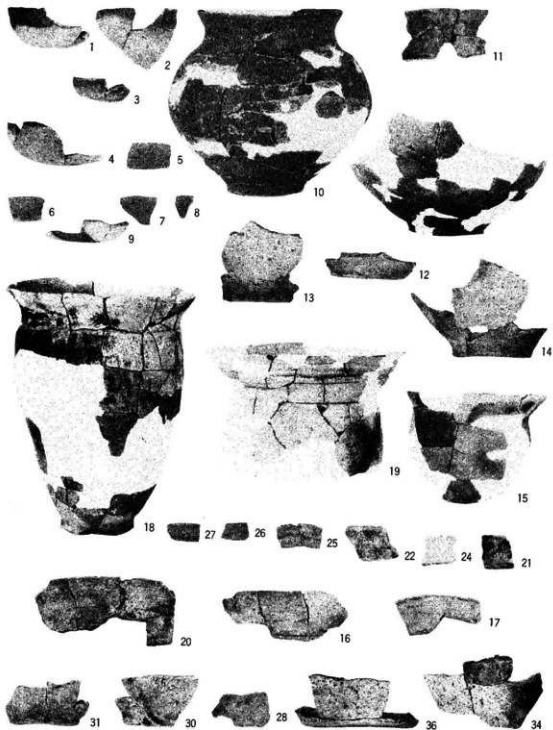
写真图版71 濠沟外出土土器



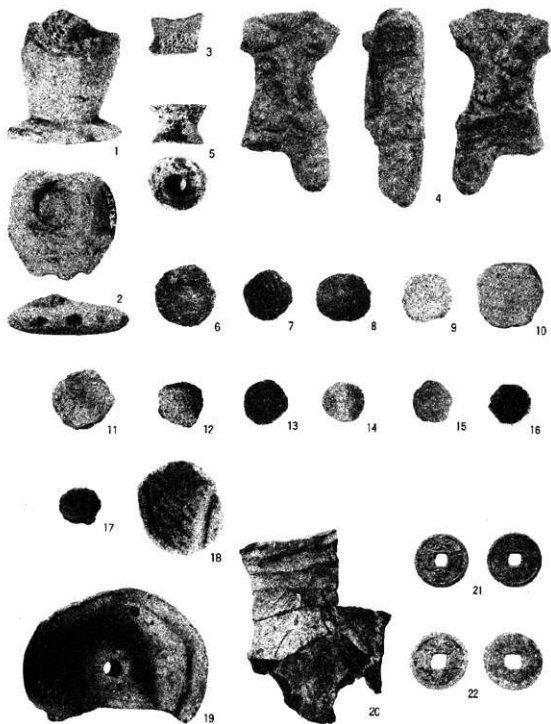
写真図版72 遺構外出土土器



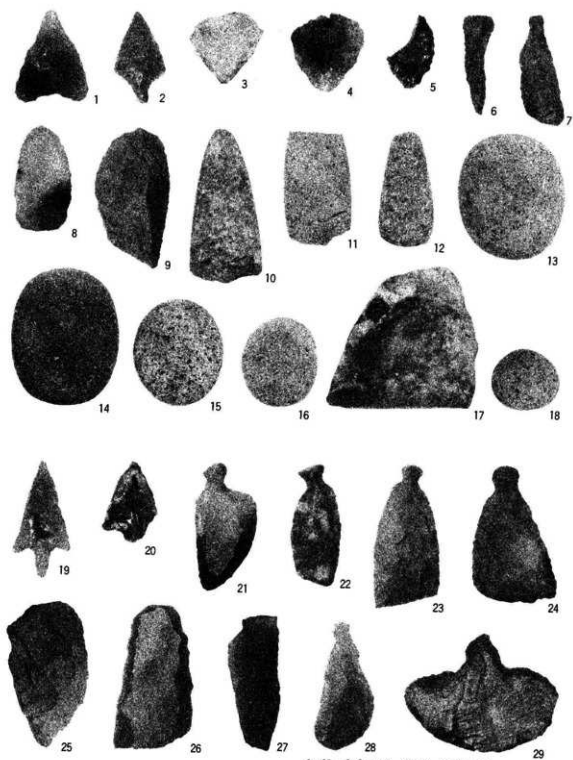
写真图版73 遺構外出土土器



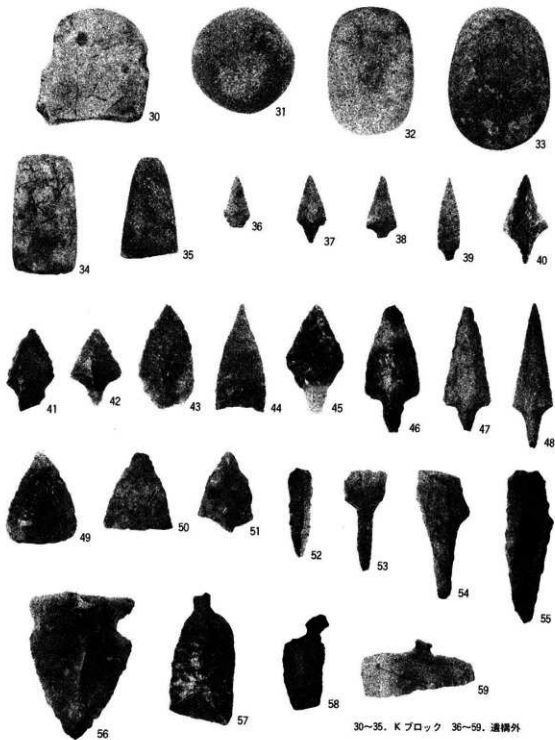
写真图版74 遺構外出土土器



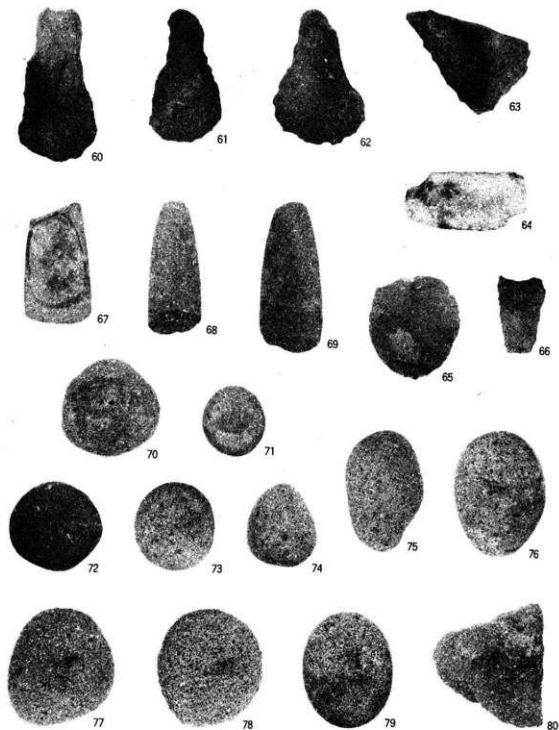
写真図版75 遺構外出土土器・土偶・土製品・古銭



1~18, Jブロック 19~29, Kブロック
 写真図版76 遺物包含層J・Kブロック出土石器



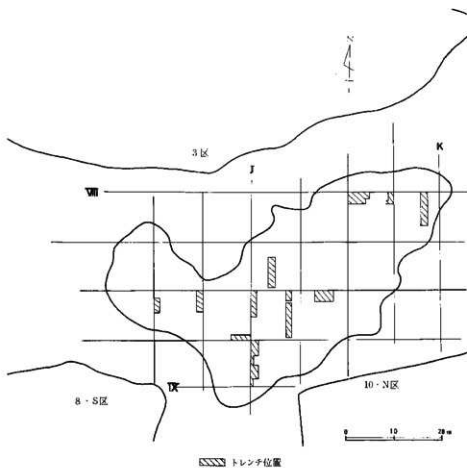
写真図版77 遺物包含層Kブロック・遺構外出土石器



写真図版78 遺構外出土石器

4 区

略号	YH 4
調査面積	1,960 m ²
調査機関	滝沢村教育委員会



第1図 4区グリッド配置図

I 地形と地質

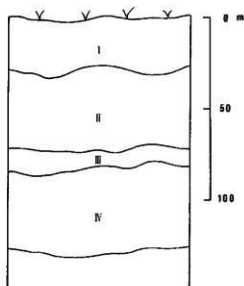
1. 地形概観

本区は北・西・南を3区・8区・10区により、三方から囲まれた低湿地である。東流して市兵衛川に流れ込む小川が、3区の南端・8S区の北端と二分して流れ、その間にできた小さな州であり、雪溶けや大雨の後には全域が水をかぶり、縦横に小さな流れが走る。そのため本区上には、林地は形成されず、一面の笹に若い灌木がまばらに成育している程度であった。面積は1,960㎡、標高は187mを測る。

2. 基本層序

- I層 黒褐色土層 柔らかく、粘りなし。
粉状バミスを若干量含む。
- II層 黄橙色土層 柔らかくもろいが、粘りは強い。
- III層 橙色土層 粘りが強い。砂粒・スゴリアを若干量含む。
- IV層 灰色土層 粘性が特に強い。
- V層 礫層

本区にては、泥炭層形成と流入遺物の有無の確認を目的として、グリッドに沿い巾2m、長さ5mもしくは10mのトレンチ11本を人力にて入れた。その結果上位5層にては明確な泥炭層の形成はみられず、有機遺物も人工のものは発見し得なかった。その他の遺物は、表面採集若干量及びIII層よりわずかに出土している。



第2図 4区基本層序

II 発見された遺構と遺物

1. 遺構

設定した11本のトレンチにおいて、遺構と思われる土色の変化は認められなかった。

2. 遺物

コンテナ及び箱分の土器片と自然流木が出土したのみであった。土器は磨滅した状態のものが大半である。

(1) 土器

縄文土器・弥生土器が出土している。

縄文土器

縄文時代後期に属するもの(2・5・6)

平行沈線によって文様が展開するもの(2・6)と連続刻目文をもつもの(5)がみられる。

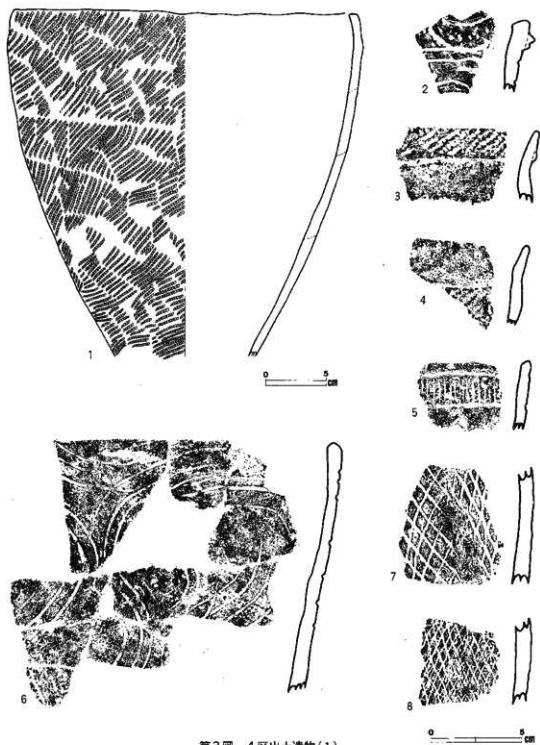
(2)は口縁頂部に「三日月」状の隆帯が横位に貼付られ、隆帯上には列点状の刺突が施されている。(3)は平縁を呈する比較的大型の深鉢形土器と思われ、頸部付近に最大径を有するものと思われる。文様構成は平行する沈線が渦巻状・弧状に描かれる。文様展開から、いずれも後期前葉、十腰内I式に併行するものと思われる。連続刻目文が施される土器は、口縁部に施された平行沈線間内に縦の刻目が施されている。刻目は浅く刷毛目状を呈し極めて細い。磨滅した小破片1点だけであるため詳細な時期決定は出来かねるが、後期末葉、十腰内V式に併行するものかと思われる。

縄文時代晩期に属するもの(15・16・17)

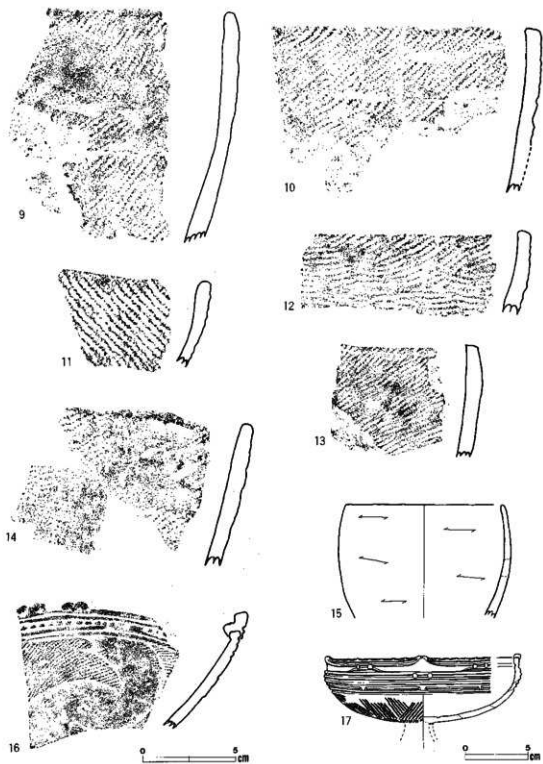
図示した3点のみの出土である。小型の深鉢(15)・浅鉢(16)・高坏(17)が出土している。深鉢は、胴部中央付近に最大径をもち、口縁が内湾するタイプのもので、内外面ともに無文研磨されている。浅鉢の口唇上には2対の突起が配され、口縁部には平行沈線間に刻みが施されており、胴部には沈線によって区画された磨消し縄文が展開する。高坏の口縁には山形の小突起がみられ、胴部に施文される工字文には2個一対の粘土粒がみられる。浅鉢・高坏は、その文様展開から、それぞれ大洞C1式・A'式に比定される。

粗製土器(1・3・4・7~14)

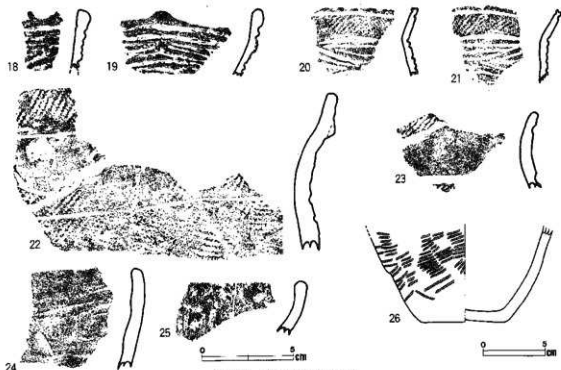
主体的な文様展開がみられず、縄文のみ施文される土器を一括した。時期別の明確な細分は難しいが、縄文時代後期・晩期に属するものと思われる。当区において最も多く出土している。



第3图 4区出土遗物(1)



第4图 4区出土遺物(2)



第5図 4区出土遺物(3)

平口縁を呈し、口縁部付近に最大径をもつ比較的大型の深鉢型土器(1・9~14)は、いずれも口縁部が内湾気味に直立する。施文される縄文はLRのものが多く、RLのもの(11)は少ない。(3)は複合口縁をもち、頸部が無文帯となっている。複合口縁上にはLR縄文が施されている。(4)は口縁部が無文帯となるもの、(7・8)は網目状撚糸文の土器である。

弥生土器

図示した9点のみの出土である。浅鉢(18・19)・甕(20・21・22)・壺(23)・鉢(24・25)が出土している。浅鉢(19)の口縁部山形突起の頂部及び口唇上には列点状の刺突が施されている。(18・19)ともに多量の煤が内外全面に付着する。文様の主体は変形工字文である。(20・21)は同一個体と思われるもので、口縁部に横走る平行沈線間に縄文LRが施され、胴部に菱形を意匠したと思われる沈線文が展開される。いずれも口唇上には一糸の沈線が施されている。複合口縁を呈する(22)の頸部付近には、平行沈線によって区画された幅の広い磨消帯の中に波状の沈線文が描かれる。鉢の器内外面には篋状工具による調整痕が明瞭に認められる。破片資料のみで詳細な時期決定はしかねるが、いずれも弥生時代中期に属するものと思われる。

(2) 自然流木

自然流木13点は、いずれもⅢ層下位より出土している。樹種同定の結果、ナラ類8点・クリ類3点・広葉樹1点・樹皮1点と判明している。(詳細は鑑定・分析参照)

Ⅲ ま と め

本調査区は、昭和51年度に実施された試掘調査により遺跡から除外された区域であった。しかしながら本区は、遺跡の載る各段丘に囲まれた湿原であることから、縄文時代後期～晩期・弥生時代の木製品が出土する可能性があるものと予測されたので、人力によるトレンチを極力増やす方向で調査を実施した。結果は、木製品の出土は無く、縄文時代後期前葉及び末葉・晩期、弥生時代中期の土器片と自然流木が発見されたにすぎなかった。

各地に於ける木製品の出土事例を鑑みると、その多くが段丘や自然堤防を背後に控えた低湿地から発見されている。今後の村内に於ける他遺跡の調査に於いても、当然眼を向けなければならない留意点であろう。

4 区写真図版



航空写真
(真上より撮影)

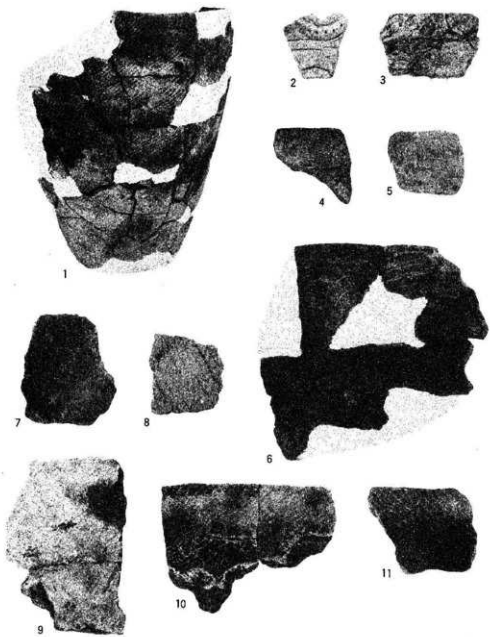


基本層序

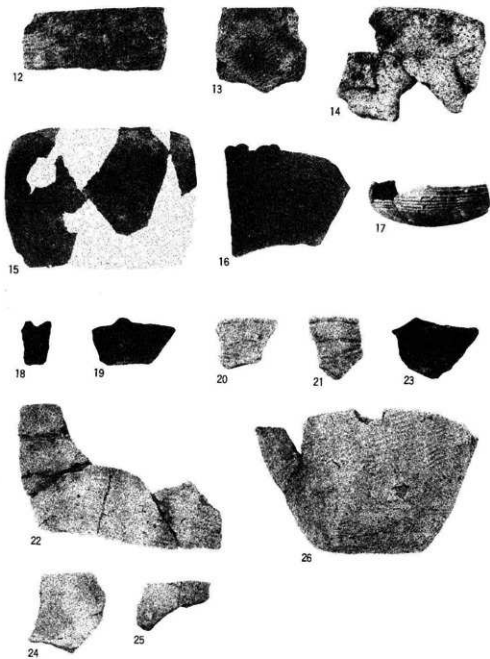


調査風景

写真図版 1



写真图版2 4区出土遗物(1)



写真图版3 4区出土遗物(2)

滝沢村教育委員会文化財調査報告書第2集

湯舟沢遺跡(第1分冊)

昭和61年9月30日 発行

発行 滝沢村教育委員会

岩手県岩手郡滝沢村大字崎針

第11地割字中鶴岡55番地

電話(1096)84-2111代

印刷 山門北州印刷株式会社

岩手県盛岡市青山四丁目10番5号

電話(0196)41-0585代
